(2) 溝

SD1 (Fig.57～59)

調査区を東西方向に延びる区画溝で、軸方向はN－74°－Eである。検出規模は幅94～104cm、深さ14～32cmを測り、検出長は33mである。断面形態は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色粘質シルト、灰黄褐色粘土である。埋土中には近世の遺物と瓦片を少量含んでいる。

SD1の南側には区画溝SD3が約4.9mの間隔を空けて並行しており、さらにこれらの東西溝に垂直に交差して、溝SD4が南北方向に延びる。交差する南北溝SD4との切り合いは攪乱のために不明であるが、出土遺物の年代観からみてSD4が後続するとみられる。

出土遺物は、染付中碗・小碗・碗蓋・小皿・中皿・猪口・壺、陶胎染付碗、白磁小碗・小杯・紅皿、青磁小皿、陶器中碗・小皿・鉢・捏鉢・片口・擂鉢・鍋・土瓶蓋・壺又は甕・灯明皿・火鉢、陶器色絵小碗、土師質土器小皿・杯・焜炉・白土器小皿、瓦質土器火鉢、瓦であり、この中には被熱した瓦片、陶磁器片が少量含まれる。

図示したものは499～535である。

499～509は磁器。507は中国産、その他は肥前産である。

499～501・504は肥前産の染付中碗。499は肥前産の陶胎染付碗で山水文を描く。胎土は灰色を呈し、呉須は暗青灰色に発色している。500も同様で、唐草文を描くものである。501は肥前産の端反形碗で、外面に草花文、見込みに筆描きによる五弁花を描く。高台内に角枠内渦福の銘をもつ。504は丸形中碗で薄手の作りである。口縁部内外面に圏線が巡る。505は白磁の中碗である。

503は肥前産又は肥前系の染付碗蓋。口縁部内外面に帯線、外面に格子状の文様、見込みに細線による不明文様を描く。502は肥前産の桶形猪口で、外面に草花文と竹文を描く。高台内に渦福銘をもつ。506は美濃手の染付皿で、内面に草花文、内外の側面に文様の一部が見える。肥前産で1650～1660年代。508は青磁の壺。口縁端部と口縁部内面無釉。体部内面施釉。釉は二次被熱により変質している。509は初期伊万里の壺で、高台外側に櫛歯文、高台内に不明文様を描く。透明釉は灰白色を帯びる。1630～1640年代のもの。

507は漳州窯系の青花碗である。内面に二重圏線と不明の文様。呉須は藍色に発色し、透明釉は白色を帯びる。17世紀前半の製品である。

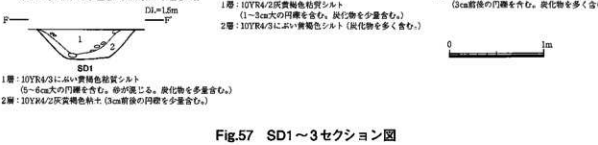


Fig.57　SD1～3セクション図

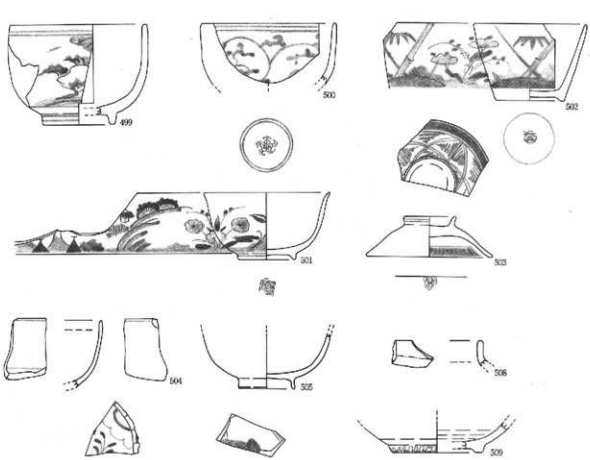


Fig.58　SD1出土遺物実測図（1）

510～526は陶器。

510～515は灰釉碗である。510は瀬戸・美濃系のせんじ碗。511・513・515は尾戸窯の灰釉丸碗である。513は厚手の作りで、外面に荒いコテ痕が残る。灰釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉で光沢が強い。512は肥前産の灰釉丸碗。灰釉は浅黄色を帯びる。514は京焼の色絵半球形小碗。金・青・緑の上絵付で若松・竹が描かれる。

516・523は唐津系灰釉陶器の小皿である。516は内底に砂目痕が残る。灰釉は焼成不良気味で白濁する。523は口縁部溝縁状。灰釉は焼成不良気味で白濁する。1610～1630年代。

517は尾戸窯の灰釉鉢。灰釉は焼成不良気味で白濁する。

521は京焼の灰釉蓋物。外面の灰方に鉄錆と呉須による草花文を描く。底部に三足を貼付する。外底に墨書を認める。

518は捏鉢か。灰釉を施釉し、口縁部は玉縁状を呈する。口縁端部は無釉である。520は壺又は甕の底部で黒褐色の釉を施釉する。

519は肥前産の香炉又は火入れ。黒褐色の素地に白化粧土刷毛目を施す。肥前産。522は能茶山窯

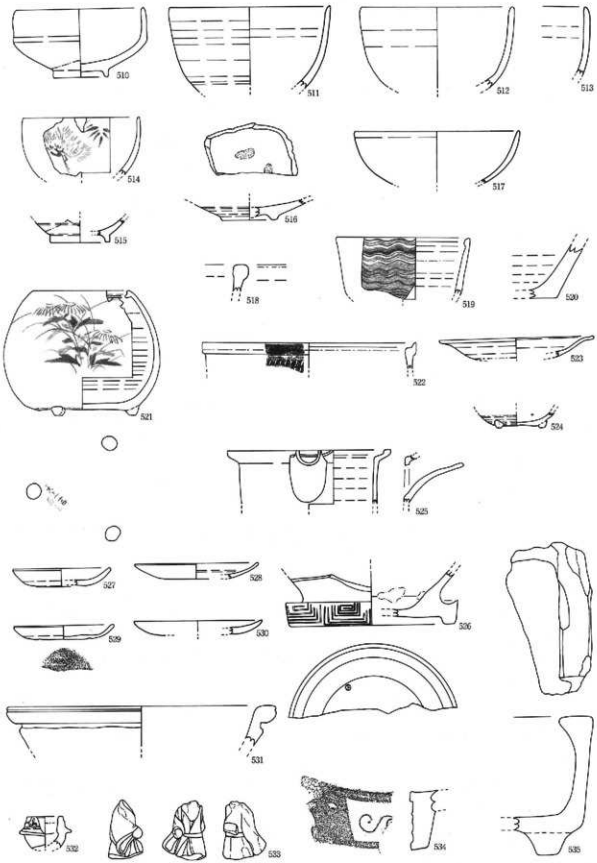


Fig.59　SD1出土遺物実測図 (2)

の行平。体部内外面鉄釉刷毛塗りの後、外面に飛鉋を施す。525は銚子か。内外面ににぶい赤褐色の鉄釉を施釉する。

526は瀬戸・美濃産の緑釉火鉢。底部外面に陰刻による雷文帯。外面に緑釉を施釉し、内面と外底に鉄錆を刷毛塗りする。外底に貫通しない穿孔をもつ。

524はミニチュアの陶器鍋である。外面上半と内面に鉄釉を施釉する。

527～533は土師質土器。

527～530は土師質土器小皿。527～529はにぶい黄橙色～浅黄橙色の胎土をもつもので、内外面回転ナデ調整。530は尾戸窯の白土器小皿で、灰白色の胎土をもつ。内外面はヨコナデ調整。内底は欠損し文様の有無は不明である。

531は五徳か。粘土紐積み上げ成形で、内外面回転ナデ調整。関西系で、胎土はにぶい橙色を呈し、胎土中に石英、長石、金雲母、灰黒色系鉱物、赤色風化礫等の砂粒を含んでいる。口縁部内面に煤が強く付着している。502は瓦質土器の火鉢。箱形で、脚を貼付する。

532は釜形のミニチュア。上半が型作りで、外面上半に陽刻文様を施す。内面と外面下半にナデ。外面上半に黄緑色、内面に黄色の低火度釉を施釉し、口縁部内面と外底は無釉である。胎土は灰白色を呈する。533は人形。男子像で、中実。外面はユビオサエ・ユビナデ。緑・橙の低火度釉を部分的に施釉している。胎土は灰白色を呈する。

534は軒平瓦。被熱し橙色に変色している。535は瓦質の火鉢である。

SD1では17世紀から18世紀の遺物が多く出土しているが、中には1820年代～19世紀中葉にかけて生産された能茶山窯の陶器（522）等も含まれる。これらのことからみて、SD1の廃絶時期は19世紀中葉に比定される。

SD2 (Fig.57・60)

調査区中央部を南北方向に延びる溝で、N－14°－Wの軸方向をもつ。検出規模は幅62cm、深さ19cmを測り、検出長は9mである。断面形態は逆台形を呈する。埋土は1層：灰黄褐色粘質シルト、2層：にぶい黄褐色シルトで、下層埋土中に炭化物を多く含んでいる。

西側には、区画溝SD4が並行するが同時期に機能したかどうかは不明である。交差する東西溝SD1との切り合いは、撹乱のため不明である。

出土遺物は、染付中碗・小皿、白磁紅皿、陶器中碗・小碗・小皿・捏鉢・擂鉢・甕・瓶、土師質土器小皿・人形・笛、鉄釘である。

図示したものは536～546である。

536～539は陶器。536は灰釉の甕である。双耳は欠損するが、外面上位に剥離痕が残る。口縁端部と内面無釉。537は捏鉢。1.1縁端部無釉。釉は焼成不良で白濁する。538は鉄釉の小瓶。胎土は灰色を呈する。尾戸窯又は能茶山窯産とみられる。539は焼締の灯明受皿。外面回転ナデ、外底回転ケズリ。尾戸窯又は能茶山窯産の可能性をもつ。

540～542・544～546は土師質土器。540～542は土師質土器小皿である。544・545は人形。544は人物の一部とみられるもので、外面に低火度釉を施釉する。型押し成形前後貼り合わせで、中空。釉は焼成不良気味で黄褐色に発色する。胎土は浅黄橙色を呈する。545は人物の頭部で、型押し成

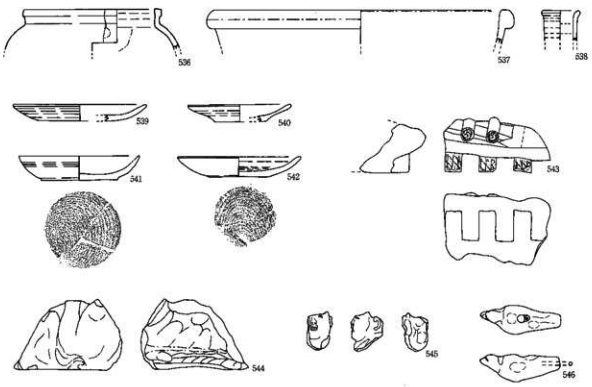


Fig.60　SD2出土遺物実測図

形で中空。胎土は浅黄橙色を呈する。546は鳩笛。外面には緑色を帯びる半透明の低火度釉を施釉する。中空で、背面と尾の部分に穿孔を穿つ。外面にユビオサエ、ナデ痕が残る。胎土は灰白色を呈する。

543は瓦質土器で、器種不明。家を形取ったものの屋根部分である。

図示したものの他に、SD2では備前焼擂鉢、肥前内野山窯銅緑釉蛇の目釉剥ぎ小皿、肥前産の灰釉丸碗、染付の広東形碗等が出土している。遺物量が少なく年代観は明確にできないが、広東形碗の出土等からみて、SD2の廃絶時期は18世紀末以降とみられる。

SD3 (Fig.57・61)

調査区を東西方向に延びる区画溝で、N－74°－Eの軸方向をもつ。検出規模は幅102cm、深さ14cmを測り、検出長は11.5m である。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色粘質シルトで、埋土中には炭化物を多く含んでいる。

SD3の南側には区画溝SD1が約4.9mの間隔を空けて並行する。また、これらの東西溝に垂直に交差して、溝SD4が南北方向に延びる。交差する南北溝SD4との切り合いは撹乱のために不明である。

出土遺物は染付中碗・小杯・小皿、陶器中碗・小碗・小皿・土瓶・擂鉢・鍋・蓋・甕、土師質土器小皿・焜炉、瓦、鉄釘であり、18世紀から19世紀にかけての遺物が含まれている。

図示したものは547～563である。

547～550は磁器で、肥前産又は肥前系。547は染付中碗で、外面に若松文、口縁部内面に雷文帯を施す。548は染付の広東形碗で、鳥文。549は染付蓋物。外面に花文を描く。550は染付皿。外面

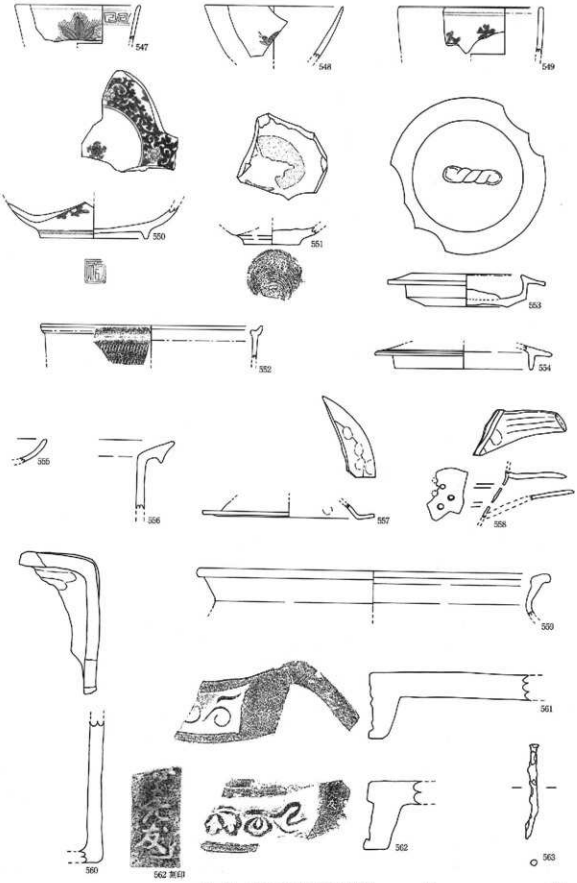


Fig.61　SD3出土遺物実測図

に如意頭連続唐草文、内面に花唐草文、見込みに五弁花文を描く。高台内に圏線と角枠内福銘をもつ。肥前産1680～1690年代の製品である。

551～554・556～559は陶器。

551は肥前系の灰釉小皿で、外底に回転糸切り痕が残る。外面下半は無釉で、灰釉は灰黄褐色に発色し部分的に白濁する。内底に灰白色の不整形の砂目が残る。外底に灰白色の粗い砂が付着している。肥前産の唐津系灰釉陶器小皿に類似するが、砂目と釉調に違いが認められる。

552は行平。外面に鉄錆を刷毛塗りし、飛鉋を施す。内面に錆釉施釉。能茶山窯産の可能性をもつ。553・554は土瓶蓋。553は鉄釉を施釉し、釉は黒褐色に発色する。外底の三方に胎土目痕を認める。554は灰釉の土瓶蓋。天井部周縁に一条沈線を巡らし、上面に白泥のイッチン掛けによる文様を施す。かえりと内面無釉。灰釉は暗オリーブ色に発色する。556は器種不明の口縁部で、口縁部内外面に灰白色の釉、その他にオリーブ褐色の半透明の釉を施釉する。胎土は褐灰色を呈する。能茶山窯産とみられる。

557は無釉の蓋。たたら作りの後、型とユビオサエによって整形しており、薄手の作りである。内面に布目痕が認められ、内外面にはユビオサエ痕が顕著に残る。胎土は緻密で灰黄色を呈する。558は無釉の急須又は土瓶。薄手である。体部内外面にユビオサエとナデ、注口部外面にはヘラナデを施す。

559は鉄釉の壺で、能茶山窯産。鉄釉はにぶい赤褐色で、濃く掛かった部分は黒色に発色する。胎土は黄灰色を呈する。

555は土師質土器小皿。560は箱形の瓦質土器火鉢である。たたら作りで、接合部内面に強いユビナデ痕が残る。外面イタナデ。

561は軒平瓦で、左桟瓦になるもの。偏面文様に唐草文が見える。562も軒平瓦。中心飾りは蔦文で、両側に均整唐草文を配する。角枠内に「安芸友」の銘印が見られ、安芸（高知県安芸市）産と推定される。

563は鉄釘である。

SD3埋土中には17世紀から18世紀の遺物が多く含まれるが、中には1820年代～19世紀中葉にかけて生産された能茶山窯産の陶器（552・556・559）も含まれている。これらから、SD3の廃絶時期は19世紀中葉に比定される。

SD4 (Fig.62～64)

調査区の中央を南北方向に延びる溝で、N－17°－Wの軸方向をもつ。断面形態は皿状を呈し、検出規模は幅120～130cm、深さ22～24cm、確認長は16.5mである。埋土は灰黄褐色粘質シルトで、埋土中には炭化物を多く含んでいる。

東西溝SD1・SD3とは垂直に交差しているが、該当部の撹乱が著しく、前後関係は不明である。その他の切り合い関係では、18世紀後半の土坑SK1を切っている。

出土遺物は染付中碗・小杯・小皿、陶器中碗・小碗・小皿・擂鉢・土瓶・鍋・壺・甕、土師質土器小皿・焜炉、瓦、鉄釘である。出土状況をみると、上層には肥前産の広東形碗、瀬戸・美濃産の染付端反形碗、瀬戸・美濃産の陶胎染付広東形碗、能茶山窯産の染付碗、能茶山窯産の陶器甕など19世

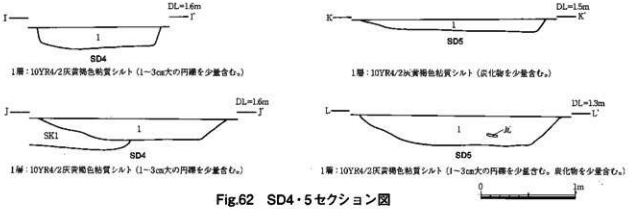


Fig.62　SD4・5セクション図

紀前半～中葉の遺物が含まれ、下層から初期伊万里皿、被熱した筆文小杯、蛇の目高台小碗、肥前波佐見産の染付蛇の目釉剥ぎ小皿、灰釉半球形小碗、鉄釉土鍋、土瓶、備前焼擂鉢、煙管吸口など17世紀後半から18世紀の遺物が多く出土している。

図示したものは564～588である。

564～571は磁器。

564・565は染付中碗。564は能茶山窯産の端反形碗。外面に花唐草文、口縁部内外面に多重圏線、見込みに圏線と蝙蝠文を描く。高台内に「井」銘をもつ。565は肥前系の広東形碗で、外面に矢羽根状の文様を描く。呉須は暗青灰色に発色する。

566は肥前系の筆文小杯。567は染付蓋物。蛇の目高台で、外面に草花文と雲輪を描く。透明釉は灰白色を帯びる。呉須は暗緑灰色に発色する。568は初期伊万里の小皿で、内面に菊花を描く。1610～1630年代の製品である。569は染付小皿で内面に二重圏線と略化された文様を描く。見込み蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部分に灰白色の砂が巡る。高台無釉。胎土は灰白色を呈する。

570は水滴。唐子を表したものとみられ、鉄錆と呉須を塗り分ける。型作り貼り合わせによって成形されており、中空。内面に布目痕が残る。肥前産で19世紀前半～中葉の製品である。571は570と同一個体の可能性をもつもので、体部に円孔を穿つ。内面にユビオサエ痕が残る。

572～582は陶器。

572～575は備前焼の擂鉢。576は土瓶又は急須で、薄手である。胎土は褐灰色を呈し、外面に白化粧土を施釉した後、透明釉を重ね掛けする。外面に呉須による文様と二重圏線を描いている。577は灰釉の陶器底部で、外面に型紙刷りによる錆絵を施している。内面に強いロクロ目。内面施釉。高台無釉。灰釉は灰白色を帯びる透明の釉である。胎土は灰白色で円孔を多く認める。

578は器種不明の鉄釉陶器。外面に緩やかなロクロ目。口縁は内側に肥厚させている。胎土は灰白色、鉄釉は黒褐色に発色する。579は鉄釉の捏鉢か。内面ロクロ目顕著。高台内は鋭角的に削り出す。鉄釉は黒褐色に発色。胎土は赤褐色を呈する。580は鉄釉の鍋の底部。外底に三足を貼付。内面に暗褐色の鉄釉を施釉。外底無釉。胎土はにぶい橙色を呈する。能茶山窯産。

581は鉄釉甕。体部外面上位に櫛目と櫛描波状文を巡らす。内面と頸部外面に強いロクロ目を残す。鉄釉は暗褐色に発色する。胎土は灰黄色を呈する。

582は灯明受皿。内面に灰釉を施釉し、外面無釉。灰釉は灰オリーブ色を帯び2㎜前後の貫入が入

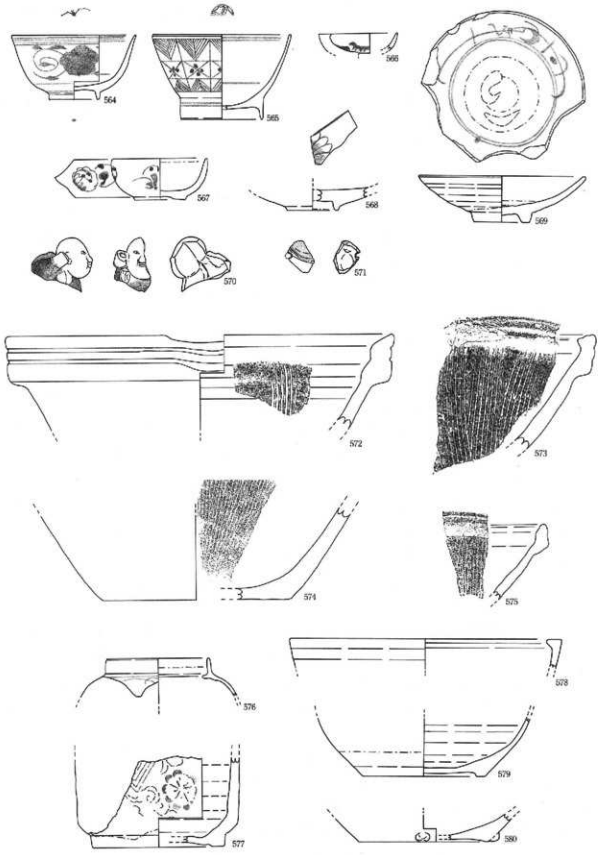


Fig.63　SD4出土遺物実測図（1）

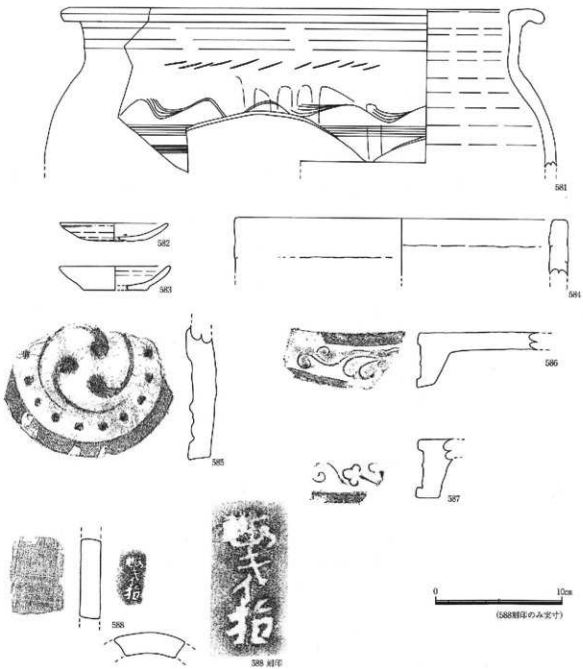


Fig.64　SD4出土遺物実測図（2）

る。内底に目痕が残る。関西系。

583は土師質土器小皿。584は焜炉類か。粘土紐積み上げ成形で、内外面に粘土紐接合痕を明瞭に残す。外面ナデ、内面ヨコナデ。胎土はにぶい橙色である。

585は巴文軒丸瓦。586・587は軒平瓦。586は中心飾りは蔦文。両側に均整唐草文を配する。587は中心飾りは茎付の花３本からなり、両側に均整唐草文を配する。唐草は巻きが強い。588は丸瓦で上面に「あキ□」銘をもち、安芸（高知県安芸市）の製品である。

SD4の廃絶時期は19世紀中葉に比定される。

SD5 (Fig.62・65～67)

調査区の西部を東西方向にのびる溝である。軸方向はN－74°－Eで、南側に位置する東西溝SD1とは並行している。検出規模は、幅194～210cm、深さ14～30cm、確認長は13mである。断面形態は逆台形で、埋土は灰黄褐色粘質シルトである。

切り合い関係では、時期不明のSK18に切られている

出土遺物は染付中碗・小碗・小杯・小皿・中皿・大皿・猪口・蓋物・瓶・壺・水滴、青磁染付小皿、色絵染付猪口、色絵中碗、白磁小碗・小杯・鉢・紅皿、陶器中碗・小皿・鉢・捏鉢・擂鉢・瓶・香炉・壺・甕・灯明受皿、土師質土器小皿・焜炉、匣鉢、瓦である。埋土中には瓦片が多く含まれるが、瓦片には被熱赤変したものが少量混じっており、その他の遺物にも被熱のものが含まれている。

図示したものは589～636である。

589～608は磁器で、593は中国産、その他は肥前産である。

590は染付中碗で、外面に丸文と寿字文を描く。二次被熱により釉は変質する。肥前産1630～1650年代。591は染付猪口で、外面草花文。592は陶胎染付碗で、黄灰色の素地に白化粧土と透明釉を施す。呉須で圏線を描くが、主文様は不明である。18世紀前半。595は高台施釉の白磁小杯。594は桶形小杯で草文を描く。18世紀前半のものである。

596は染付中皿。内面に唐草文、外面に連続唐草文を描く。597は染付中皿で、内面に瓜文を描く。呉須は濃みによって青色から淡青色に塗り分けている。肥前産17世紀末～18世紀前半の製品である。598は染付丸形小皿で内面に草文を描く。肥前産で1640～1650年代。599は染付大皿で内面に山水文を描くもの。高台内にハリ支え痕が残る。肥前有田の製品で1655～1670年代のものである。

602・603は染付蓋物。602は腰張形の蓋物で、格子文と亀甲文を描く。1780～1840年代のもの。603は外面に二重圏線と草花文を描く。肥前有田の製品で1660～1700年代。601は青磁染付碗の蓋。口縁部内面に四方襷。外面に明緑灰色の青磁釉を施釉する。604は白磁紅皿。600は染付皿で墨弾きによる文様と圏線を描く。606は初期伊万里の染付壺。頸部外面に渦文、肩部に不明の染付文様を巡らせる。1630～1640年代。607は染付瓶の底部で内面無釉である。

605は箱形の染付水滴。型押し成形。上面中央に径4㎜の円孔をもち、円孔周辺に陽刻による菊弁文を施す。外底布目、内面ユビナデ。外面施釉で、内面と外面の一側面のみが無釉となる。608は染付の水滴又は人形。型押し成形貼り合わせ。内面ユビオサエ・ユビナデ。外底に布目痕が残る。

593は漳州窯系の色絵皿である。灰白色の白濁した釉を高台外側まで施釉し、高台内は無釉である。内面に赤で「[illegible]」字文を描く。17世紀前半の製品である。

609～629は陶器。

609～614・616は碗。609は灰釉の端反形小碗。灰釉は1㎜前後の貫入が入る透明の釉で、二次被熱により部分的に変質している。胎土は灰白色を呈する。610・611は尾戸窯の灰釉中碗。ともに灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉を施釉し、釉は0.5～1㎜大の細かな貫入が入る。胎土は灰白色を呈する。611は高台内を曲線的に削り出し、畳付外側にナデを施す。内底に目痕がある。612は京都系の灰釉碗で高台内を鋭角的に削り出している。613は鉄釉の中碗で能茶山窯産の可能性をもつ。高台無釉。胎土は褐灰色で、鉄釉は黒色に発色する。614は肥前産の灰釉丸碗で、高台施釉。616は灰

釉碗の底部で、高台内を曲線的に削り出す。畳付両側はナデにより丸みをもつ。灰釉は浅黄色を帯びる光沢の強い透明の釉で2㎜前後の貫入が入る。

615は尾戸窯又は能茶山窯の鉄釉鉢。内外面ロクロ目顕著。胎土は灰白色。鉄釉は褐色に発色する。

617～619は皿。617は唐津系の灰釉陶器小皿で、内底に砂目をもつ。灰釉は灰オリーブ色を帯びる。618は見込みを蛇の目釉剥ぎするが部分的に釉が残る。灰釉は焼成不良気味で白濁する。釉剥ぎ部分に砂が付着している。619は肥前内野山窯の銅緑釉小皿。見込み蛇の目釉剥ぎで、釉剥ぎ部に砂目痕が残る。内面は青緑色、外面は灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施釉する。

620～622は擂鉢。621・622は備前焼の擂鉢である。620は瀬戸の擂鉢。胎土は灰白色を呈し、内外面に鉄錆を施す。内外面ロクロ目。内面に櫛目を施す。口縁端部は欠損する。

623は焼締めの灯明受皿。油溝は浅く、三方にアーチ状の抉りをもつ。胎土は赤褐色。内面に灯芯油痕を認める。

624～626は甕。624は丹波焼の甕で、体部外面に黒褐色の釉、内面と口縁端部には灰オリーブ色の釉を施釉する。頸部外面無釉。胎土は灰色を呈する。18世紀後半の製品である。625は関西系の鉄釉甕。鉄釉は暗褐色に発色し、胎土は灰白色を呈する。626は能茶山窯の鉄釉甕。口縁部を内外に肥厚させる。胎土は褐灰色。鉄釉は褐色に発色する。

627は灰釉の香炉又は火入れ。内外面に強いロクロ目。内面は無釉である。灰釉はにぶい黄橙色の釉で貫入が入る。部分的に緑釉が掛る。628は色絵陶器の底部でクリ底。体部は内湾気味に立ち上がり、外面に縦筋を施す。上絵付による草文色を描くが、変色し黒色に発色している。外面に白化粧土を薄く施した後、灰釉を重ね掛けしている。内面と外底無釉。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で1㎜前後の細かな貫入が入る。胎土は灰色を呈する。

629は水注類か。外面にヘラによる縦筋を施し、注口の一部が残る。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。尾戸窯産。

630は土師質土器小皿で、胎土はにぶい黄橙色を呈する。631は土師質土器の焜炉である。内外面に回転ナデを施す。関西系。632は瓦質土器の火鉢又は火消し壺の口縁部か。

瓦633は側面に「とく」印銘をもつもので、徳王子（高知県香南市徳王子）産。軒平瓦634は中心飾りに花文、両側に均整唐草文を配する。635は軒平瓦で、中心飾りは珠点をもつ子葉文である。

636は寛永通宝である。

SD5には、17世紀から18世紀までの遺物が多く含まれるが、中には1820年代～19世紀中葉にかけて生産された能茶山窯産陶器（615・626）等も含まれている。これらにより、SD5の廃絶時期は19世紀中葉に比定される。

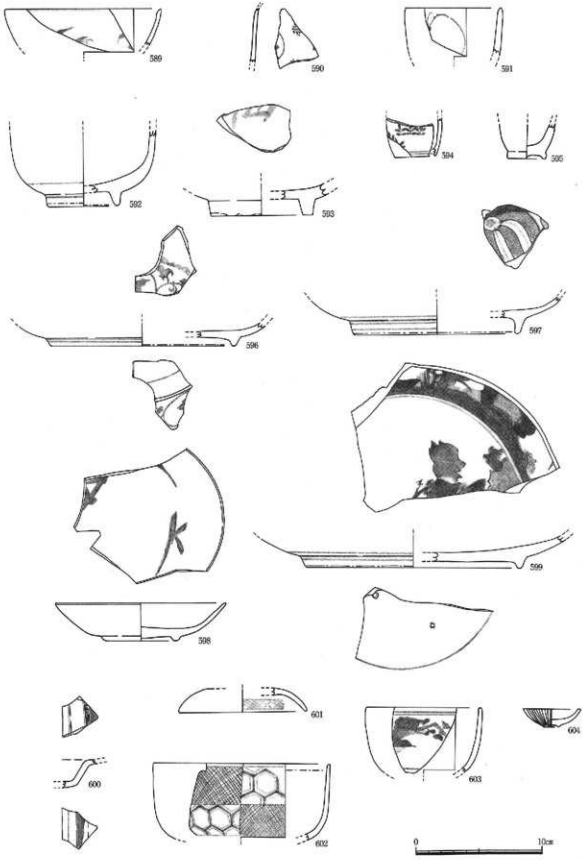


Fig.65　SD5出土遺物実測図（1）

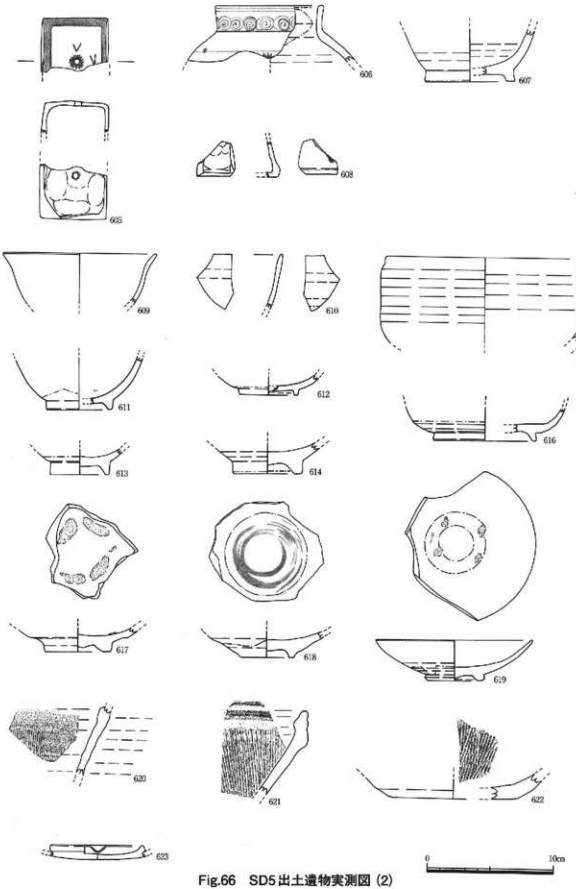


Fig.66　SD5出土遺物実測図 (2)

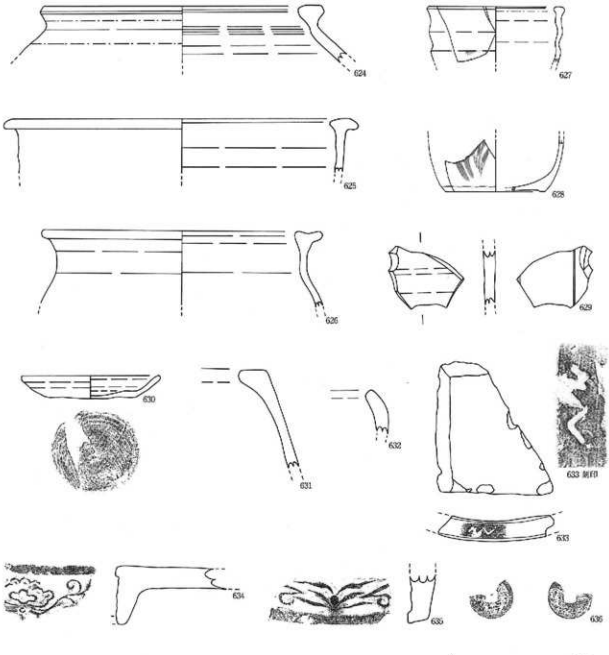


Fig.67　SD5出土遺物実測図 (3)

(3) 包含層出土の遺物

近世の遺物は包含層Ⅱ層内からも多く出土している。ここでは、このうち特徴的なものを取り上げた。図示したものは637～656である。

637は肥前産の染付丸形中碗。外面に撫子と籬(えがき)、見込みに花文を描く。高台内に「宣明」銘をもつ。1660～1680年代の製品である。638は初期伊万里の小皿。内面の中央に菊花、四方隅に半菊を描く。1610～1630年代のものである。639は肥前産の染付小皿で、内面に松と鶴、外面は芙蓉手とみられ

る文様を描く。1820年代～幕末のもの。641は肥前産の草文小杯。高台施釉。呉須はオリーブ灰色に発色し、透明釉は灰白色を帯びる。畳付に砂が付着する。642は肥前産の染付中碗蓋。外面に稲束、口縁部内面に四方襷、見込みに十字花状の文様を描く。

640は尾戸窯の灰釉皿又は鉢で、高台施釉。灰釉は灰オリーブを帯びる半透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。内底に目痕をもつ。644は灰釉の土瓶蓋で、鉄絵を描く。645は灰釉の蓋。上面回転ナデ。下面回転糸切り。上面に淡黄色の灰釉が薄く掛る。

646は水滴か。茄子形で、型押し成形貼り合わせによる。灰釉は焼成不良気味で白濁している。

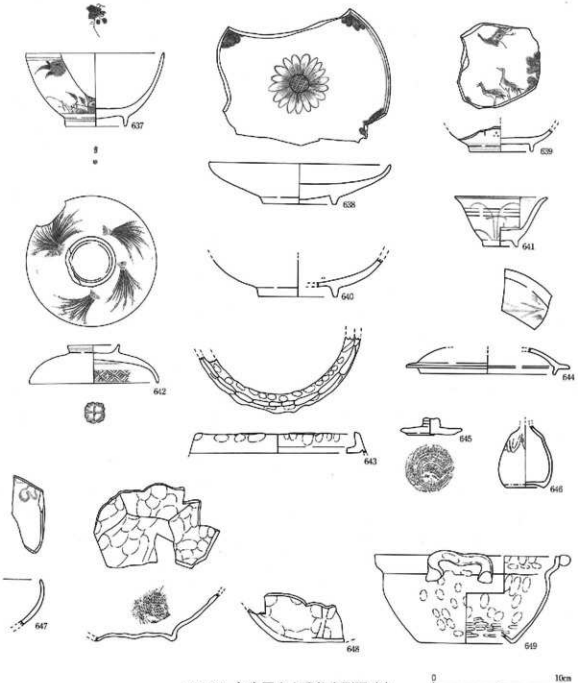


Fig.68　包含層出土遺物実測図（1）

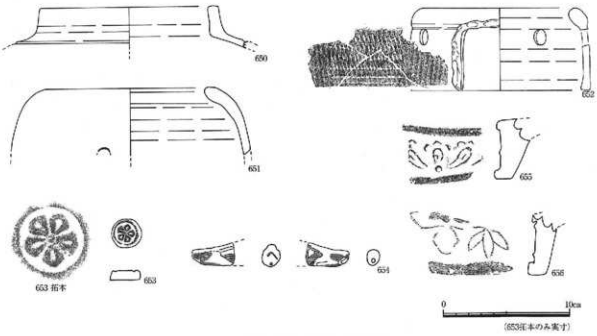


Fig.69　包含層出土遺物実測図 (2)

尾戸窯産の可能性をもつ。647は尾戸窯の変形形の灰釉皿。内面に鉄絵。灰釉は灰白色を帯びる透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。

643・648は型作りと手捏ね成形による焼締の土瓶又は急須。643は外面ユビオサエとナデ。胎土は緻密で淡黄色を呈し、器面は灰黄色に発色する。648は643と同一個体の可能性があるもので、土瓶又は急須の底部か。薄手で、底部は六角形を呈する。ユビオサエによって側面を亀甲状に面取りし、成形している。内外面にユビオサエ痕が顕著に残り、ナデ調整を施しているが、内底の一部には布目痕が残る。外底周囲に煤が付着している。649も手捏ね成形による小型の鍋で、把手を貼付している。内外面にナデとユビオサエ。外底周囲に煤が付着している。胎土は緻密で灰オリーブ色に発色する。

650は瓦質土器の茶釜か。内外面回転ナデ。651は瓦質土器の焜炉。体部上位に円孔の一部が見える。外面にナデ・ミガキ、内面に回転ナデ調整を施す。器面は黄灰色を呈する。胎土は灰白色で、胎土中に石英、長石、雲母、灰色系鉱物の粗砂を含む。内面の上位に煤が付着する。652は土師質土器の五徳か。前面に窓、側面の6箇所に径1.3㎝の円孔をもつ。窓の周縁に粘土紐を貼付しユビオサエ。内面ロクロ目。外面側面には飛鉋による装飾を施し、側面の三方にヘラによる面取りを施している。胎土は灰白色で、胎土中に石英、長石、雲母、灰色系鉱物の砂粒を含む。

653は土師質土器の泥面子。654は土師質土器の人形又は場笛である。型押し成形貼り合わせによるもので、尾の先端に貫通しない穿孔をもつ。羽を黄、尾を茶の顔料で描き分け、全体に薄緑の釉を掛ける。胎土は灰白色を呈する。

655・656は軒平瓦。655は中心飾りが三花文である。

(4) その他の遺物

今回の調査区では、近代以降の整地層（Ⅰ－2層）と近・現代の撹乱内からも、近世から近・現代の遺物が多く出土している。近世の遺物では特に江戸後期から幕末までのものが目立ち、近代以降の削平によって消失した遺構の中には、幕末から明治初頭にかけての浅い廃棄土坑や瓦溜まりが含まれていたことも推察できる。

ここではそのうち特徴的なものを抽出し掲載した。図示したものは657～730である。

① 近世の遺物

657～707は磁器。

657～660は染付碗である。657は肥前系の染付中碗。外面に柘榴と蝙蝠文、口縁部内面に雷文帯、見込みに松竹梅円形文を描く。658は能茶山窯の染付中碗。外面は寿と福字、窓に山水文を描き、地を濃みで塗り埋める。口縁部内面は雷文帯を巡らす。659は肥前系の端反形中碗。外面に雀、竹、雪輪、釜、鋤、見込みに竹文を描く。660は肥前系の端反形中碗で、愛媛県砥部の製品か。外面に多重の圏線、草と蝶、内面に二重圏線を描く。見込みは蛇の目釉剥ぎし、中央に略化された不明文様を描いている。1840～1860年代。662は肥前産の雨降り文小碗。663は肥前産又は肥前系の端反形中碗。外面に松を描き、濃みの濃淡で地を塗り埋める。661は色絵中碗。661は赤・青（その他は剥離）の上絵付で猫を描く。

664はうがい茶碗で、内面に不明文様をもつ。肥前産で18世紀後半。665は肥前産の染付小杯で、外面に若松文を描く。

666・668～670・672～675は染付皿。666は陽刻型打ち成形の皿。内面に陽刻による蓮弁と唐草文を施し、呉須で列点文を描く。口縁部輪花形で口錆である。肥前有田の製品で18世紀後半。669は染付の大皿。内面に花卉、窓絵、松文等を描いている。668は669と同一個体とみられるものである。670は皿の底部で、内面に草花文、高台内に「成化年製」銘をもつ。672は肥前産の大皿。内面に鶴亀文を描く。高台内に「□□年製」銘。高台内に高台内にハリ支え痕を認める。1820～1860年代。673は花文の大皿又は中皿。外面にごく緩やかなロクロ目が残る。呉須は青灰色で透明釉は明緑灰色をおびる。畳付に灰白色の粗い砂が付着している。肥前山辺田窯の製品とみられ1630～1640年代のものである。674は大皿で、内面に網目文と花文を描く。肥前有田の製品で1650～1670年代。675は内面に永裂文と丸文、外面に如意頭連続唐草文を描く大皿である。肥前産1820～1860年代。

676・678・682は染付鉢。676は内外面に花文を描き、呉須は青色に発色し滲む。肥前系で18世紀末～19世紀前半。678は口縁部輪花形、蛇の目凹型高台の鉢で、内外面に山水文を描く。682は八角形鉢で、内面は鳥と草文、外面は芙蓉手である。

679～681は染付猪口。679は肥前系の猪口で、芭蕉文。体部は厚手で呉須は青灰色に発色している。680は肥前産の猪口で、外面波に千鳥文、口縁部内面に波、見込みに千鳥を描いている。681は能茶山窯産で、高台内に「サ」銘をもつ。見込みは亀文、外面は山水文か。

683～685は染付碗蓋。683は659と揃いとみられる肥前系の碗蓋で、外面に竹、雪輪、釜、鋤、内面に竹文を描いている。684は能茶山窯産の碗蓋。外面に松葉、菊、福寿字文、

内面に雷文帯、芭蕉葉を描く。685は松、梅文を描く。

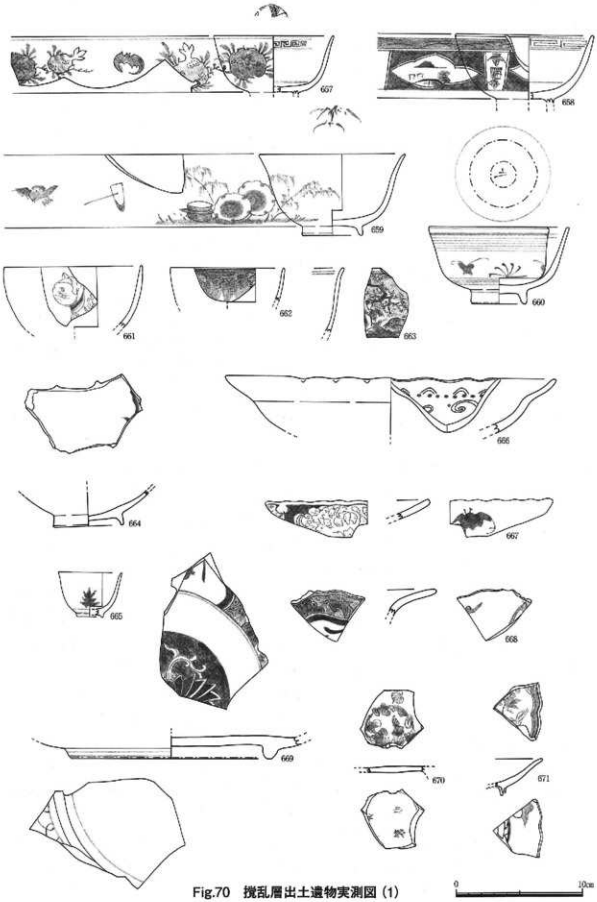


Fig.70　撹乱層出土遺物実測図 (1)

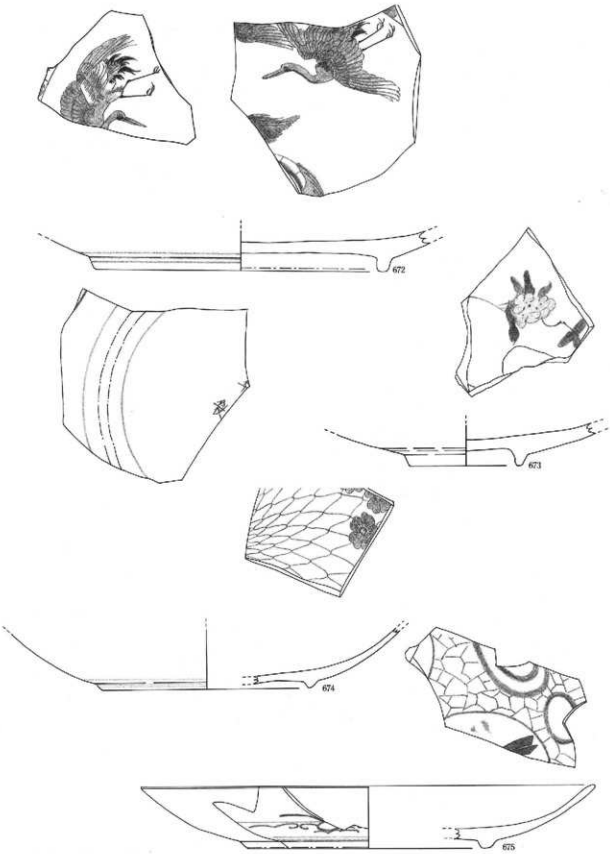


Fig.71　撹乱層出土遺物実測図 (2)

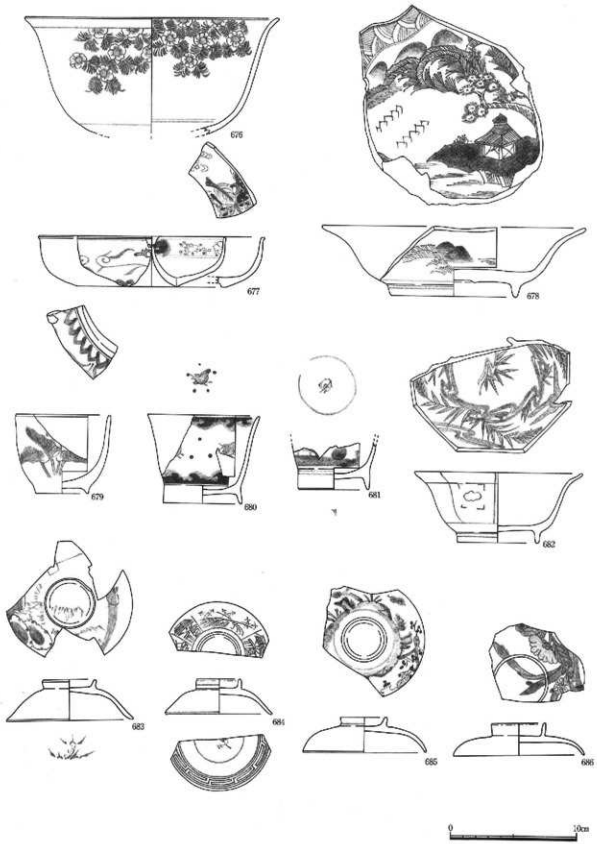


Fig.72　撹乱層出土遺物実測図 (3)

687・688・690～692は染付蓋物の蓋。687は肥前系の蓋物蓋で、山水文。呉須は青色に発色し、透明釉は粗い貫入が入る。688は花文を描き、天井部に摘みをもたない。690は雲と蝙蝠、691は区画に線と井桁文、692は垣と丸に松文を描いている。

693は碗形の蓋物身で、内面施釉、口縁端部無釉。口縁部外面に帯線と丸文、外面下位に草文を描いている。

694～697は段重。694・697は染付段重で、694は牡丹唐草文、697は細線で花唐草文を描くもの。695・696は色絵染付の段重で、695は呉須で蓮弁文、赤の地埋めを白抜きした唐草文、上絵付け（剥離し不明）による丸に花文を施している。肥前産で19世紀初頭～幕末。696は呉須と赤・黒の上絵付で丸に桃、赤の地埋めを白抜きした唐草文を施すものである。肥前産で18世紀末～幕末の製品である。

698は染付火入れ。花詰めに窓を設け、宝文を描く。口縁端部に敲打痕を認める。699は染付うがい茶碗。外面に花文、内面に蘂を描く。呉須は青色に発色する。700は染付仏飯器。外面に半菊花文を描き、透明釉は焼成不良気味で白濁する。701は色絵の神酒徳利。赤・緑の上絵付で「御神前」の文字と飾りを描く。702は蛸唐草文の小瓶で、畳付に砂が付着している。

704は色絵の人形又は水滴で、赤の上絵を施す。706は外面に鱗状の陽刻文様を施す。

707は染付の手焙り。外面に丸文を散し、四方に円形の窓を設け、窓内に笹・樹木を描く。

708～720は陶器。

708～709は尾戸窯の灰釉丸碗。708は外面にごく緩やかなロクロ目が残り、高台内を曲線的に削り出す。711は尾戸焼の変形形鉢。型打ち成形による蔦を型取り、外面にヘラで稜線を施す。内外面に布目痕が残る。

713は京都系の灰釉丸碗で、外面に鉄錆で注連縄文を描く。714は京・信楽系の小杉碗で、鉄錆で若松文を描く。715・716は京焼の蓋付鉢と蓋である。鉄錆と青絵具、赤・緑の上絵付で草花文を描く。716は高台内を鋭角的に削り出す。高台内は平坦である。内面施釉で、内面の段部のみ無釉。高台施釉。灰釉は1㎜前後の細かな貫入が入る。

717・718は灰釉土瓶で、同一個体。外面上位に多条の沈線を施す。灰釉はにぶい黄色を帯びる透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。胎土は灰白色を呈する。720は灰釉の灯明受皿で、容器付き立鼓形のもの。受け部に抉りをもつ。

721は土師質土器の焜炉又は火鉢。粘土紐積み上げ成形で、三足を貼付する。内外面ヨコナデ調整。外面に煤が付着する。722は土師質土器の火消し壺蓋。天井部内面に煤が付着する。724は土師質土器の五徳か。723は瓦質土器の焜炉又は火鉢で、外面ナデ・ミガキ。底部外側に印刻による雷文・櫛垣文を施している。

725は軒平瓦。中心飾りは花文。側面に均整唐草文を配する。726・727は平瓦で、側面に「アキ兼」印銘をもち、安芸産（高知県安芸市）と推定される。

728は凝灰岩製の硯。陸部に縦方向の擦痕を認める。陸部中央は使用により窪んでいる。

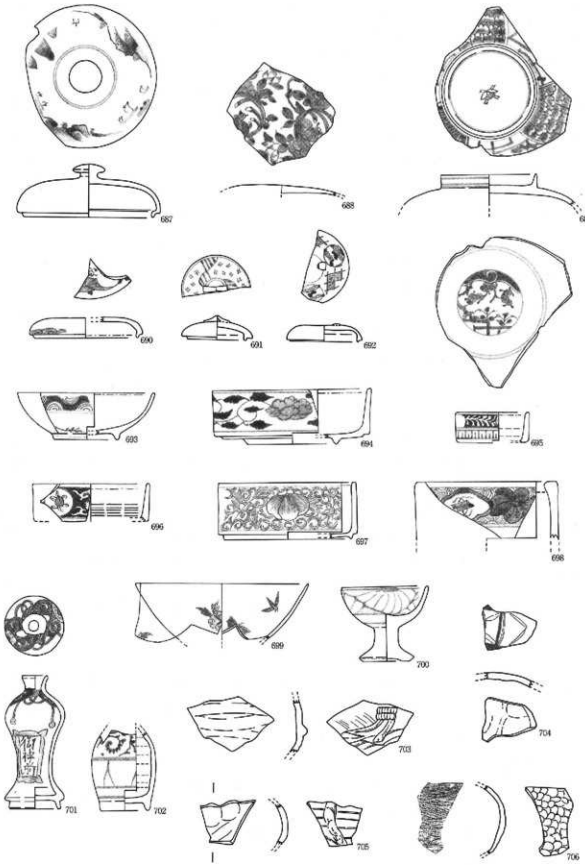


Fig.73　撹乱層出土遺物実測図 (4)

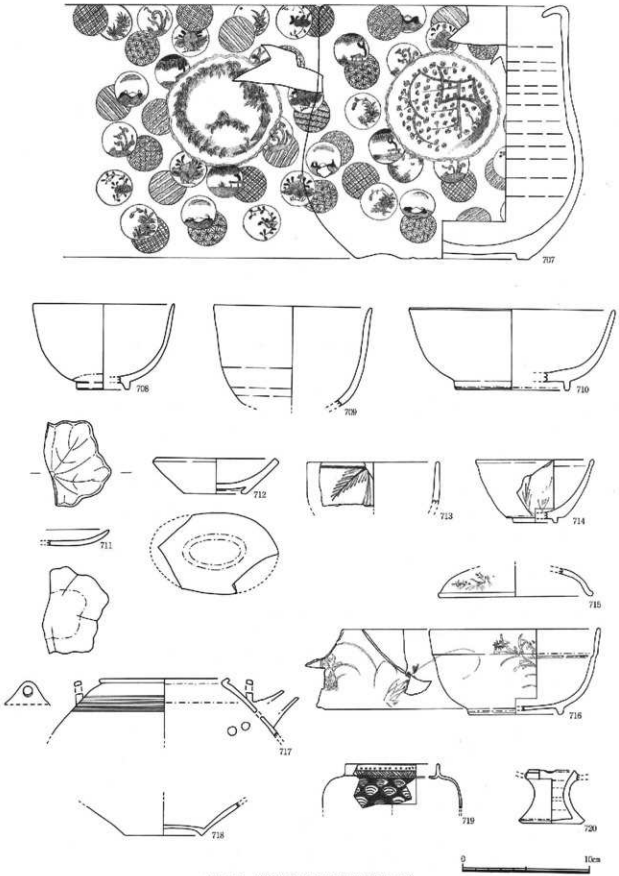


Fig.74　撹乱層出土遺物実測図 (5)

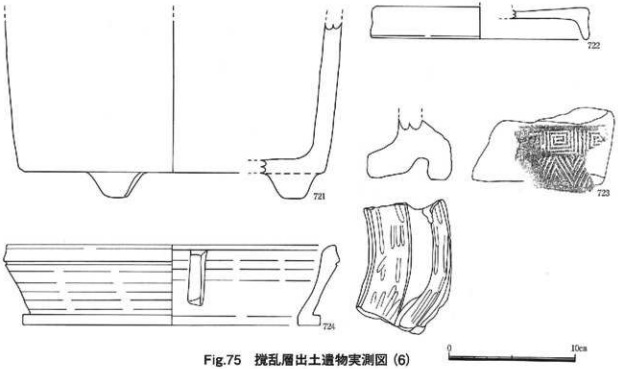


Fig.75　撹乱層出土遺物実測図（6）

② 近代以降の遺物

710・712は近世又は近代。710は瑯平焼の丸形鉢で、鮮やかな緑色の釉を施釉する。胎土は灰白色を呈する。712は瑯平焼の可能性をもつもので、レンゲか。内面に失透性のレモン色の釉、外面に白色の釉を施釉する。胎土は白色を呈する。

667・671は色絵染付の皿である。667は色絵染付の皿。口縁部輪花形で、酸化コバルトと赤・緑の上絵付けで窓と花文を描いている。外面には酸化コバルトによる蝙蝠文を描く。肥前産で明治。671は口縁部輪花形の色絵染付皿。内面に酸化コバルトによる帯線と、赤・緑・その他（剥離し不明）の上絵付による草花と籠、外面に酸化コバルトによる芭蕉を描いている。肥前産で明治～大正の製品である。

677は色絵染付の鉢である。口縁部玉縁状で、底部はクリ底。内面に酸化コバルトと赤の上絵付で花文と宝文、外面に呉須で唐草と蕙弁文を描いている。肥前産で明治の製品である。

686は色絵染付の蓋。呉須と金・赤の上絵付で水仙と菊花を描いている。幕末から明治初頭頃の製品である。

703・705・706は色絵の人形又は水滴で同一個体の可能性をもつ。型押し成形貼り合わせで、中空。内面ユビオサエ・ナデ。703は黄土色の釉下彩を施している。瀬戸又は関西系の製品とみられる。

719は急須又は土瓶。蓼手の作りで、外面に白化粧土施釉の後、酸化コバルトで列点文、櫛垣、青海波文を描く。内面無釉。胎土は黄灰色を呈する。関西系で19世紀のものである。

729は蓋付の鉢か。外面にゴム印による「防衛□□」の文字を施し、文字は灰オリーブ色に発色する。内面施釉で、端部と口縁部内面無釉。太平洋戦争時に生産された防衛食器で、肥前の製品である。730は白磁の小瓶で、外底に「653セ」の記号が施される。

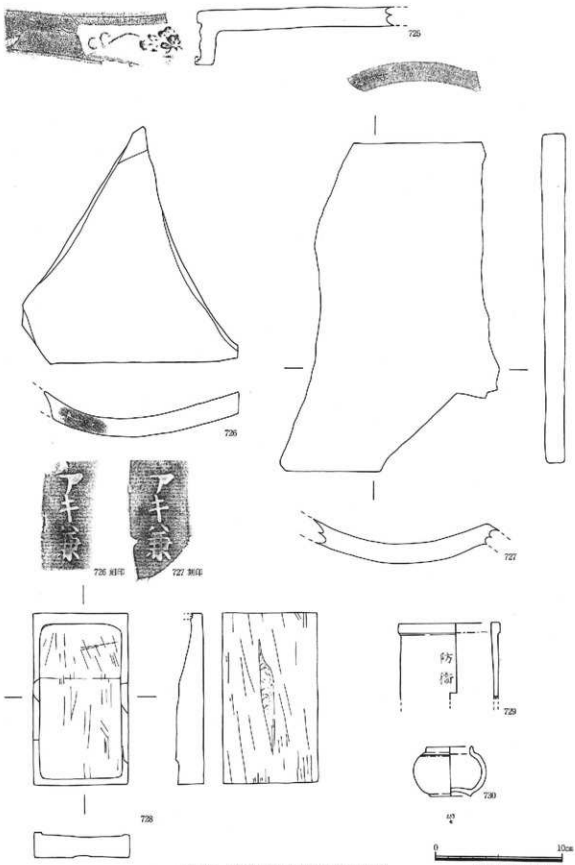


Fig.76　撹乱層出土遺物実測図 (7)

Tab.1　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）口径	器高	底径	最大径	色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・年産年代・銘・使用痕・他）
1	TP1 Ⅱ－3層 集中1	磁器 染付	猪口 端反形	8.8	6.2	4.2	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）略化した文様 高台内）不明	外面ごく緩やかなロクロ目。	肥前産
2	TP1 Ⅱ－3層 集中1	磁器 染付	小杯 端反形	6.0	3.4	2.6	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）草文	高台施釉。高台に砂が付着。	肥前産
3	TP1 Ⅱ－1層	磁器 染付	鉢	25.6	—	—	—	外）白 断）白	外）雲 内）松・竹・梅	口縁部輪花形。	肥前産 18世紀前半
4	TP1 Ⅱ－1層	磁器 染付	碗蓋	—	—	摘み径 5.4	—	外）白 断）白	外）不明 内）圏線・略化した不明文様	広東形碗の蓋。呉須は青灰色。	肥前系 1780年代～幕末
5	TP1 Ⅱ－1層	磁器 染付	中碗 広東形	—	—	6.0	—	外）白 断）白	外）雪輪・不明 見込み）二重圏線・不明		肥前系 1780年代～幕末
6	TP1 Ⅱ－3層 集中1	磁器 染付	蓋物 半筒形	6.6	4.0	4.0	—	外）白 断）白	外）稲束 高台）二重圏線	口縁端部無釉。	肥前産 漆継痕あり
7	TP1 Ⅱ－1層	磁器 染付	小瓶 辣韮形	1.4	—	—	—	外）灰白2.5GY8/1 断）灰白N8/	外）蛸唐草・梅	内面ロクロ目。内面無釉。呉須は暗青色。	肥前産19世紀
8	TP1 Ⅱ－3層 集中1	陶器	中碗 丸形	12.0	7.4	5.2	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	内外面緩やかなロクロ目。高台内を曲線的に削り出す。高台内に渦状の鉋痕。目痕3足。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	尾戸窯
9	TP1 Ⅱ－3層 集中1	陶器	中碗 腰折形	11.0	—	—	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白5Y8/1	灰釉	せんじ碗。外面に多段の強いロクロ目。灰オリーブ色を帯びる光沢の強い透明の釉で2～3mm大の貫入が入る。	関西系
10	TP1 Ⅱ－1層	陶器	中碗	—	—	4.2	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y7/1	外）白濁した釉	内底に渦状のロクロ目。畳付外側に面取り。高台内に鉋による渦。高台無釉。白濁した灰白色の釉で部分的に黒褐色に発色。	
11	TP1 SD1 Ⅱ－2層	磁器 青磁	香炉又は火入れ	11.6	—	—	—	外）明緑灰7.5GY7/1 断）灰白N8/	灰釉	内面ロクロ目。内面無釉。半透明の明緑灰色の釉。	
12	TP1 Ⅱ－3層 集中1	磁器 染付又は白磁	小瓶	—	—	4.6	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/		内面強いロクロ目。内面無釉。高台施釉。畳付に砂が付着。	
13	TP1 SD1 Ⅱ－2層	陶器	徳利	3.4	—	—	14.5	外）オリーブ5Y5/4 断）灰白5Y7/2	灰釉	内面ロクロ目。灰釉はオリーブ色に発色し厚く掛った部分は白色に発色。	外面に釘彫。
14	TP1 SD1 Ⅱ－2層	陶器	中甕	32.8	—	—	—	外）にぶい赤褐5YR4/4 断）灰白2.5Y8/1	鉄釉	口縁部T字状。内外面ロクロ目。内面上位まで施釉。鉄釉はにぶい赤褐色。	関西系
15	TP5 Ⅱ層	磁器 染付	中碗 丸形	9.6	5.4	3.8	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）コンニャク印判による文様 高台外）二重圏線 高台内）圏線・「大明年製」	外面コンニャク印判による文様。	肥前産 1690～1730年代
16	TP5 Ⅱ層	磁器 染付	中碗 丸形	—	—	3.8	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）草花文 高台内）圏線	透明釉は白濁する。畳付に砂が付着。	肥前産　波佐見 18世紀
17	TP4 Ⅰ層	磁器 染付	中碗蓋	—	—	摘み径 6.2	—	外）白 断）白	外）如意頭文か 摘み外）二重圏線 摘み内）銘 内）松・鹿・二重圏線		肥前産 1780～1810年代
18	TP5 Ⅱ層	白磁又は染付	猪口 腰張形	7.7	5.5	4.0	—	外）灰白N8/ 断）灰白N8/		口縁部端反形。	肥前産
19	TP5 Ⅱ層	磁器 染付	大瓶 辣韮形	3.4	—	—	16.0	外）灰白N8/ 断）白	外）鳥・草花		肥前産有田 1660～1670年代
20	TP5 Ⅱ層	陶器	中碗	—	—	4.6	—	外）黒褐2.5Y3/2 断）にぶい黄橙10YR7/3	鉄釉	唐津系。畳付外側に面取り。高台無釉。鉄釉は黒褐色に発色。	肥前産 16世紀末～17世紀前葉
21	TP5 Ⅱ層	陶器	中碗 丸形	11.6	7.7	5.0	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	高台施釉。灰釉は灰黄色を帯びる透明の釉で2～3mm大の貫入が入る。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
25	TP6 Ⅱ層	磁器 染付	大碗 丸形	14.6	7.3	6.2	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）草花文 高台外）二重圏線 高台内）圏線・略化した「大明年製」銘	呉須は青色。	肥前産 18世紀前半
26	TP6 Ⅱ層	磁器 染付	中碗 丸形	10.8	6.5	4.6	—	外）灰白10Y7/1 断）灰白N8/	外）草花文か 高台外）二重圏線	外面緩やかなロクロ目。呉須は暗緑灰色。	肥前産　波佐見 18世紀
27	TP6 Ⅱ層	磁器 染付	中碗 広東形	—	—	6.4	—	外）白 断）白	外）不明 内）不明	呉須は青色。	肥前産又は肥前系 1780年代～幕末

Tab.2　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉胸等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
				口径	器高	底径	最大径				
28	TP6 Ⅱ層	磁器 染付	中碗 望料碗	11.4	5.7	4.6	—	外）白 断）白	外）野菜文 見込み）野菜文	望料碗。腰が張り、高台は外方に張り出す。呉須は暗緑灰色。	肥前系 18世紀末～19世紀初頭
29	TP6 Ⅱ層	青磁	小皿	—	—	4.4	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	青磁釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部に砂が付着。外面下半施釉。明緑灰色の釉。	肥前産　波佐見 18世紀
30	TP6 Ⅱ層	磁器 染付	小皿 端反形	12.8	2.4	7.8	—	外）白 断）白	内）菊花重ね 外）宝珠 高台内）「製」	呉須は青色。	肥前産 1640～1650年代
31	TP6 Ⅱ層	磁器 染付	猪口 腰折形	—	—	4.4	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）不明 高台内）「大明年製」	呉須は淡い青色。	肥前産 17世紀後葉～18世紀前半
32	TP6 Ⅱ層	白磁	碗又は猪口 腰折形	9.0	5.8	4.8	—	外）白 断）白		高台施釉。	肥前産 18世紀前半
33	TP6 Ⅱ層	白磁又は染付	小杯 端反形	6.8	3.5	2.7	—	外）灰白10Y8/1 断）白		高台施釉。白濁した釉。	肥前産
34	TP6 Ⅱ層	白磁又は染付	小杯	—	—	2.3	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）ヘラ彫による縦筋	内底凸状。高台無釉。	肥前産 1630～1640年代
35	TP6 Ⅱ層	白磁又は染付	紅猪口 浅丸形	5.8	1.9	2.8	—	外）白 断）白		高台施釉。	肥前産
36	TP6 Ⅱ層	磁器 染付	紅猪口 浅丸形	5.8	2.4	2.8	—	外）灰白2.5GY8/1 断）白	外）笹文	呉須は暗緑灰色。	肥前産
37	TP6 Ⅱ層	磁器 染付	仏飯器	8.2	6.2	4.2	—	外）白 断）白	外）圏線・不明		肥前産
38	TP6 Ⅱ層	陶器	中碗 丸形	12.4	8.6	4.8	—	外）にぶい黄2.5Y6/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	高台施釉。にぶい黄色を帯びる透明の釉で2mm前後の貫入が入る。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
39	TP6 Ⅱ層	陶器	中碗 端反形	10.2	7.6	4.0	—	外）灰白10Y8/1断）灰白5Y8/1	灰釉	内外面にごく緩やかなロクロ目。高台無釉。畳付外側にナデ。	瀬戸系
40	TP6 Ⅱ層	陶器	中碗	—	—	4.4	—	外）にぶい黄2.5Y6/4 断）灰黄2.5Y7/2	刷毛目	内外面に白化粧土刷毛塗りの後透明釉を施釉。畳付外側を小さく面取る。高台施釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
41	TP6 Ⅱ層	陶器	中碗	—	—	4.4	—	外）浅黄2.5Y7/3 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	高台内を鋭角的に削り出す。灰釉は浅黄色を帯びる半透明の釉で0.5mm前後の貫入が入る。	京焼 高台内に銘あり。「清□」か。
42	TP6 Ⅱ層	陶器	皿	—	—	4.4	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	高台内を鋭角的に削り出す。畳付外側を小さく面取る。灰釉は浅黄色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	京都系
43	TP6 Ⅱ層	青磁	皿 三足付き	—	—	7.4	—	外）浅黄2.5Y7/3 断）灰白10YR8/2	内）ヘラ彫りによる文様	見込み蛇の目釉剥ぎ後鉄錆を刷毛塗りしヘラ彫りによる波状文。断面の三足を貼付。畳付外側に面取り。高台内施釉。酸化焼成気味で青磁釉は浅黄色に発色する。	肥前産　波佐見 1640～1650年代
44	SK1 上層	磁器 染付	中碗 丸形	10.4	5.2	4.0	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白5GY8/1	外）コンニャク印判による草花文と筆描きによる松葉	高台に砂が付着。高台施釉。透明釉は僅かに緑色を帯びる。	肥前産 18世紀 高台内に渦福。
45	SK1 下層	磁器 染付	中碗 丸形	9.6	4.3	3.6	—	外）灰白2.5GY8/1 断）白	外）山水文	高台施釉。透明釉は細かな貫入が入る。	肥前産 18世紀前半
46	SK1 下層	磁器 染付	猪口	9.6	—	—	—	外）白 断）白	外）草花文 内）四方襷	口縁部端反形。呉須は淡い青色。	肥前産
47	SK1 床面	白磁	中皿 折縁形	22.0	3.2	8.0	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	白磁釉	高台内に渦状の鉋痕。高台施釉。釉は明緑灰色を帯びる。	肥前産 1630～1640年代
48	SK1	磁器 染付	小皿	—	—	6.0	—	外）灰白10Y7/1 断）灰白10Y8/1	内）菊花文	高台に灰白色の粗い砂が付着。高台施釉。透明釉は灰白色を帯びる。	肥前産 1610～1630年代
49	SK1 下層	白磁	小杯 端反形	7.4	3.8	3.1	—	外）灰白5GY8/1 断）白	白磁釉	外面ロクロ目顕著。高台無釉。畳付に砂付着。釉は灰白色を帯びる。	肥前産 17世紀後半
50	SK1	磁器 染付	猪口	—	—	5.0	—	外）白 断）白	外）下位に二重圏線 見込み）五弁花	呉須は青色。	肥前産 18世紀 高台内に角に渦福。
51	SK1	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.0	3.1	摘み径 3.8	—	外）白 断）白	外）草花文、松葉文、四方襷	呉須は青色。透明釉は粗い貫入が入る。	肥前産 18世紀 摘み内に角に渦福。
52	SK1 下層	磁器 染付	蓋物 蓋	笠部径 12.7	—	—	かえり径 11.2	外）明緑灰10GY8/1 断）灰白N8/	外）花唐草文	かえり無釉。透明釉は明緑灰色、呉須は青灰色に発色。	肥前産18世紀前半 漆継痕あり。
53	SK1 下層	青磁	瓶	—	16.5	10.1	19.0	外）明緑灰10GY8/1 断）白	青磁釉	内外面ロクロ目。畳付両側に面取り。内面無釉。高台施釉。明緑灰色を帯びる半透明の釉。	肥前系 18世紀後半～19世紀前半

Tab.3 遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）口径	器高	底径	最大径	色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
54	SK1 下層	陶器	中碗 丸形	11.6	8.3	5.2	—	外）浅黄2.5Y7/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	畳付両側に面取り。高台施釉。釉は半透明で浅黄色を帯び、貫入が入る。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
56	SK1	陶器	中碗	10.8	5.5	—	—	外）灰白 5Y7/2 断）灰白 5Y7/2	灰釉	外面に緩やかなロクロ目。灰白色を帯びる半透明の釉で1～2㎜大の貫入が入る。	尾戸窯
56	SK1 下層	陶器	中碗 半筒形	9.2	6.7	6.7	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/2	外）呉須と鉄絵による梅文。幹と枝は鉄絵、花は呉須で描く。	高台内平坦。高台内無釉。高台外側まで施釉。灰釉は浅黄色を帯び1～2㎜大の貫入が入る。	京焼 17世紀後半～18世紀初頭 高台内に「寳山」銘印。
57	SK1 床面	陶器	小碗 半球形	9.2	5.6	3.2	—	外）灰白 5Y7/2 断）灰白 5Y8/1	外）鉄絵による菖蒲文灰釉。	畳付両側に面取り。高台無釉。鉄絵はオリーブ黒色に発色。	京都系 18世紀中葉～後半
58	SK1 床面	陶器	蓋	笠部径 10.6	1.3	摘み径 1.4	かえり径 8.0	外）黄褐2.5Y5/3 断）にぶい黄橙10Y6/3	刷毛目	外面に白化粧土刷毛目。内面とかえり無釉。	肥前産 18世紀前半
59	SK1 上層	陶器	壺	—	—	10.0	—	外）暗赤褐5YR3/2 内）灰黄2.5Y7/2 断）灰黄2.5Y7/2	鉄釉	体部内外面にロクロ目。高台内を曲線的に削り出す。畳付はナデにより丸みをもつ。畳付に砂が付着。内面無釉。高台施釉。暗赤褐色の釉。	
60	SK1	陶器	鉢	16.0	10.4	8.4	—	外）灰白 7.5Y8/ 断）灰白 5Y8/	灰釉	内外面に強いロクロ目。畳付両側はナデにより丸みをもつ。高台無釉。釉は浅黄色を帯び粗い貫入が入る。	内底に灰白色の砂目。
61	SK1	土師質土器	杯	8.8	2.9	5.2	—	外）にぶい橙7.5YR7/4 断）にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
62	SK1	土師質土器	小皿	8.0	1.4	5.2	—	外）橙7.5YR7/6 断）橙7.5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
63	SK1 上層	土師質土器	小皿	7.8	1.4	5.4	—	外）浅黄橙7.5YR8/6 断）浅黄橙7.5YR8/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油痕あり。
64	SK1	土師質土器	小皿	7.2	1.4	4.3	—	外）橙7.5YR7/6 断）橙7.5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	底部中央に径5㎜の焼成後穿孔あり。
65	SK2 上層	磁器 染付	蓋 望料碗蓋	笠部径 10.2	3.0	摘み径 2.4	—	外）白 断）白	外）唐草文 内）四方襷・糸巻・二重圏線	望料碗の蓋。天井部は膨らみをもつ。呉須は青色。	肥前産 1770～1800年代
66	SK2	磁器 染付	蓋 碗 蓋	—	—	摘み径 4.0	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）植物文様 摘み外側）二重圏線 内）四方襷・松竹梅円形文	望料碗の蓋。天井部は膨らみをもつ。呉須は青色。	肥前産 1770～1790年代
67	SK2 下層	青磁 染付	猪口 端反形	9.6	6.1	5.0	—	外）明緑灰7.5GY7/1 内）灰白2.5GY8/1 断）白	内）四方襷 見込み）二重圏線・篳描きによる五弁花	口縁部輪花形。青磁釉は明緑灰色に発色。	肥前産 18世紀後半 高台内に角に渦福。
68	SK2 下層	磁器 色絵	小杯	—	—	2.6	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）上絵付（赤）による植物	高台施釉。	肥前産 18世紀前半
69	SK2 上層	磁器 染付	小碗	—	—	3.2	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）灰白N8/	外）下位に圏線 高台外）二重圏線	内面と高台施釉。呉須は青灰色。透明釉は明緑灰色を帯びる。	肥前産
70	SK2 下層	磁器 染付	碗	—	—	5.8	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	外）蛸唐草・違弁文 見込み）二重圏線・松竹梅円形文		肥前産 18世紀後半～19世紀
71	SK2 下層	磁器 染付	瓶	—	—	6.0	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白N7/	外）唐草文か 高台外）圏線	内面無釉。高台施釉。呉須は暗緑灰色。	肥前産
72	SK2 上層	磁器 染付	小皿 丸形	14.8	3.0	9.0	—	外）灰白5GY8/1 断）白	内）格子文・コンニャク印判による五弁花	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下位に多段の鉋痕。高台施釉。	肥前産 18世紀
73	SK2 上層	陶器	中碗 丸形	12.1	7.8	6.0	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白7.5Y7/1	外）鉄絵による草文 灰釉	体部外面にごく緩やかなロクロ目。高台内を曲線的に削り出す。高台内に渦状の鉋痕。畳付外側にナデ。高台無釉。釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。	尾戸窯 内底に目痕。
74	SK2 下層	陶器	中碗 丸形	11.8	8.2	5.4	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	外面上位にロクロ成形による幅広の凹線4条。高台内を曲線的に削り出す。高台内に渦状の鉋痕。畳付外側にナデ。高台無釉。淡黄色を帯びる透明の釉で0.5㎜前後の貫入が入る。片面が焼成不良気味。	尾戸窯

Tab.4　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm） 口径	器高	底径	最大径	色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
75	SK2 下層	陶器	中碗 丸形	12.6	8.7	5.0	—	外）にぶい黄2.5Y6/4 断）浅黄2.5Y8/3	灰釉	外面に緩やかなロクロ目。畳付は丸くおさめる。にぶい黄色を帯びる半透明の釉で1～2㎜大の貫入が入る。	肥前系 17世紀後半～18世紀前半
76	SK2 下層	陶器	中碗 丸形	14.6	9.4	7.4	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	外面に緩やかなロクロ目。高台内を曲線的に削り出す。高台内平坦。畳付内外側にナデ。高台施釉。浅黄色を帯びる透明の釉で2㎜前後の貫入が入る。	尾戸窯か
77	SK2 下層	陶器	中碗	14.8	—	—	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白N8/	灰釉	外面に緩やかなロクロ目。灰白色を帯びる透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。	尾戸窯か
78	SK2 下層	陶器	小碗 半球形	8.7	5.5	3.9	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y8/2	外）鉄絵 灰釉	蛇の目高台。高台内を鋭角的に削り出す。畳付外側に面取り。高台無釉。	京都系 畳付に墨書。
79	SK2 上層	陶器	小碗 筒丸形	8.6	6.3	4.4	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y8/2	灰釉	高台内を曲線的に削り出す。畳付外側にナデ。高台無釉。釉は灰白色を帯びる半透明の釉で0.5～1㎜大の貫入が入る。	尾戸窯
80	SK2 上層	陶器	小碗 筒丸形	8.8	6.4	4.6	—	外）灰白 5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	高台内を曲線的に削り出す。高台内に渦状の鉋痕。畳付外側にナデ。高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。	尾戸窯
81	SK2 下層	陶器	小碗 半球形	8.9	5.6	2.8	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白N8/	外）鉄絵 灰釉	高台内を鋭角的に削り出す。畳付外側に小さい面取り。高台無釉。釉は灰白色を帯びる透明の釉で1～2㎜大の貫入が入る。	京都系 18世紀後半
82	SK2 下層	陶器	小碗 半球形	8.4	5.6	3.0	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y7/2	外）鉄絵 灰釉。釉は灰白色を帯びる半透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。	外面に緩やかなロクロ目。高台内を鋭角的に削り出す。畳付外側に面取り。高台無釉。	京都系 18世紀後半
83	SK2 下層	陶器	小碗 半球形	9.0	5.1	3.2	—	外）灰白5Y8/2 断）灰白5Y8/1	外）鉄錆による草文。灰釉。	高台内を鋭角的に削り出す。畳付外側に小さい面取り。高台無釉。釉は灰白色を帯びる半透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。	京都系 18世紀後半
84	SK2 下層	陶器	小杯 半球形	6.0	3.6	2.0	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y8/1	外）鉄絵（滲む）灰釉。	高台内を鋭角的に削り出す。畳付外側に小さい面取り。高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉で1～2㎜大の貫入が入る。	
85	SK2 下層	陶器	小瓶又は茶入れ	—	—	3.0	—	外）黒褐10YR3/2 断）灰5Y6/1	鉄釉	内面施釉。外底無釉。黒褐色の釉。	
86	SK2 上層	陶器	捏鉢	17.2	—	—	—	外）暗赤灰2.5YR3/1 断）黄灰2.5Y6/1	鉄釉	口縁端部無釉。外面下位無釉。暗赤灰色の釉。	
87	SK2 下層	施釉土師質土器	ひょうそく	4.6	1.8	3.2	—	外）浅黄橙10YR8/4 内）明黄褐10YR7/6 断）浅黄橙10YR8/3	浅黄橙色の低火度釉。	内外面ナデ。芯立は欠損する。内面施釉。外面無釉。	
88	SK2 下層	陶器	灯明受皿	9.8	1.3	6.0	受け部径 7.0	外）灰褐7.5YR4/2 断）明褐灰7.5YR7/2	鉄釉	内外面回転ナデ。外底回転ケズリ。全面施釉。鉄釉刷毛塗り。	
89	SK2 上層	陶器	徳利	—	—	—	13.6	外）にぶい黄2.5Y6/4 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	内面に強いロクロ目。内面無釉。にぶい黄色を帯びる透明の釉。光沢が強く1㎜大の貫入が入る。	瀬戸・美濃窯 外面上位に釘彫り。
90	SK2 下層	陶器	擂鉢	34.0	—	—	—	外）にぶい赤褐5YR5/4 断）明赤褐2.5Y5/6	—	口縁部外面凹線、内面櫛目後回転ナデ。体部外面ヨコナデ、内面櫛目。	堺産
91	SK2 下層	土師質土器	人形	残存長 7.5	全厚 2.4	全幅 4.2	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2	童子	中空。型作り、前後貼り合わせ。内面ユビナデ。	
92	SK2 上層	土師質土器	人形	—	—	—	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰黄2.5Y7/2	侍	中空。型作り、前後貼り合わせ。内面ユビナデ。	
93	SK2 上層	土師質土器	人形	—	—	—	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰黄2.5Y7/2	不明	中空。型作り、前後貼り合わせ。内面ユビナデ。	
94	SK2 下層	土師質土器	人形	残存長 3.5	全厚 1.9	全幅 2.2	—	外）にぶい黄橙10YR7/2 断）にぶい黄橙10YR7/2	侍	中実。型作り、前後貼り合わせ。外面にキラ粉が付着。底部に貫通しない径3㎜の穿孔あり。	
95	SK2 上層	土師質土器	人形	—	—	—	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰黄2.5Y7/2	不明	中空。内面ユビオサエ、ナデ。	外底に墨書。
96	SK2 上層	土師質土器	小皿	10.0	1.4	6.0	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	内）陽刻による高砂文	内外面横方向のナデ。	尾戸窯白土器
97	SK2 上層	土師質土器	皿又は杯	—	—	10.8	—	外）にぶい褐7.5YR5/4 断）にぶい褐7.5YR5/4		内外面ナデ。外底ナデ。	外面に弱い煤。

Tab.5　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）口径	器高	底径	最大径	色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
108	SK3 上層	磁器 染付	中碗 丸形	9.8	5.6	4.0	—	外）白 断）白	外）雨降り文・花卉 高台外）二重圏線	高台施釉。呉須は青色。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半 高台内に「大明年製」銘。
109	SK3 上層	磁器 染付	中碗 丸形	10.1	5.4	3.9	—	外）白 断）白	外）雨降り文・花卉 高台外）二重圏線	高台施釉。呉須は青色。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半 高台内に「大明年製」銘。
110	SK3 下層	磁器 染付	中碗 丸形	10.0	5.6	4.2	—	外）白 断）白	外）雨降り文・花卉 高台外）二重圏線	高台施釉。呉須は青色。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半 高台内に「大明年製」銘。
111	SK3 上層	磁器 染付	中碗 丸形	9.6	5.7	4.6	—	外）灰白2.5GY8/1 断）灰白2.5GY8/1	外）山水文・梅文 高台外）二重圏線	くらわんか手。高台施釉。呉須は青灰色。透明釉は灰白色を帯びる。	肥前産　波佐見 18世紀
112	SK3 上層	磁器 染付	中碗 丸形	10.2	5.5	3.9	—	外）灰白N8/ 断）灰白N8/	外）雪輪草花文 高台外）二重圏線 高台内）圏線	くらわんか手。高台施釉。呉須は青灰色。	肥前産　波佐見 18世紀
113	SK3 下層	磁器 色絵染付	中碗 丸形	10.2	5.6	4.4	—	外）灰白2.5GY8/1 断）白	外）染付による雨降り文・丸文。上絵付（赤・緑）による紅葉。 高台外）二重圏線 高台内）圏線 口銹。	高台施釉。	肥前産 1690～1730年代
114	SK3 上層	陶胎 染付	中碗 腰張形	11.2	—	—	—	外）灰白10Y7/1 断）灰7.5Y5/1	外）山水文	厚手の体部。呉須は青灰色。白化粧土後透明釉施釉。	肥前産 18世紀前半
115	SK3 上層	青花	小鉢	—	—	5.0	—	外）白 断）白	内）岩と草 高台外）三重圏線	高台施釉。呉須は青色。透明釉は僅かに青色を帯びる。	中国 景徳鎮窯系 17世紀前半
116	SK3？ 下層	磁器 染付	中碗	—	—	5.6	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）雲龍文 内）荒磯文 高台外）二重圏線	厚手の体部。高台施釉。呉須は青灰色。	肥前産 1660～1670年代
117	SK3 下層	磁器 色絵	碗	—	—	—	—	外）白 断）白	外）上絵付（赤・緑）による文様	被熱し釉は変質。	肥前産 18世紀 二次被熱。
118	SK3	磁器 色絵	碗	—	—	—	—	外）灰白7.5Y8/1 断）白	外）上絵付（赤・緑・淡い青色）による草花文	透明釉は貫入が入る。	肥前産
119	SK3 上層	陶胎染付	中碗 腰張形	—	—	6.0	—	外）灰白10Y7/1 断）灰白7.5Y7/1	外）唐草文	厚手の体部。	肥前産 18世紀前半 119・120同一個体
120	SK3 下層	陶胎染付	中碗 腰張形	12.4	—	—	—	外）明緑灰7.5GY7/1 断）灰白N7/1	外）唐草文	厚手の体部。	肥前産 18世紀前半 119・120同一個体
121	SK3 下層	磁器 色絵染付	中碗 浅半球形	9.8	4.9	3.6	—	外）白 断）白	外）呉須と上絵付（赤・黄緑・その他は剥離）による山水文	高台施釉。呉須は青色。	肥前産 18世紀前半
122	SK3 上層	磁器 染付	小碗 端反形	7.4	5.2	3.2	—	外）灰白N7/ 断）灰白N7/	外）草花文・蝶 高台外）二重圏線	口縁部端反形。畳付に砂が付着。高台施釉。呉須は青灰色。	肥前産 17世紀末～18世紀前半
123	SK3 上層	磁器 染付	小鉢 端反形	8.2	—	—	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）文様不明 内）〃	口縁部は内面に稜をなして外反する。	肥前系 18世紀前半
124	SK3 下層	白磁または染付	碗蓋	9.4	2.5	3.2	—	外）白 断）白		透明釉は1～2mm大の貫入が入る。	肥前産 18世紀
125	SK3 上層	磁器 染付	小碗 丸形	8.7	—	—	—	外）灰白7.5Y7/1断）灰白N8/	外）雨降り文	呉須は暗緑灰色。透明釉は灰白色を帯びる。	肥前産 18世紀前半
126	SK3 下層	磁器 染付	小碗	—	—	3.4	—	外）灰白N8/ 断）灰白N8/	外）三方にコンニャク印判による若松文	高台施釉。呉須は青灰色。	肥前産 18世紀
127	SK3 上層	磁器 染付	小杯 丸形	5.2	3.6	2.4	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）海老	高台施釉。呉須は青色。透明釉は1mm前後の貫入が入る。	肥前産 18世紀
128	SK3 上層	磁器 染付	小杯 丸形	6.0	—	—	—	外）白 断）白	外）海老	呉須は青色。	肥前産 18世紀
129	SK3 上層	磁器 染付	小杯 丸形	5.4	3.6	2.4	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）海老	高台施釉。呉須は青色。透明釉は1～2mmの貫入が入る。	肥前産 18世紀
130	SK3 下層	磁器 染付	小杯 丸形	6.0	—	—	—	外）白 断）白	外）千鳥・と岸	呉須は青色。	肥前産 18世紀前半～中葉
131	SK3 下層	磁器 染付	小杯 丸形	6.6	—	—	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）竹文か	呉須は青灰色。透明釉は1mm前後の貫入が入る。	肥前産18世紀

Tab.6 遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）口径	器高	底径	最大径	色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
132	SK3 上層	白磁又は染付	小杯 浅丸形	5.0	2.3	2.3	—	外）灰白2.5GY8/1 断）白		高台施釉。透明の釉。	肥前産
133	SK3 下層	磁器 色絵	小杯 浅丸形	5.8	2.4	2.4	—	外）白 断）白	外）上絵付（赤）による文様	高台施釉。	肥前産 18世紀後半
134	SK3 上層	白磁又は染付	小杯 浅丸形	6.0	1.9	2.6	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/		畳付に砂が付着。高台施釉。透明釉は灰白色を帯びる。	肥前産 17世紀末～18世紀前半
135	SK3 上層	白磁	小杯 浅丸形	6.1	2.7	2.8	—	外）灰白2.5GY8/1 断）白	白磁釉	高台施釉。釉は灰白色を帯び1㎜前後の貫入が入る。	肥前産
136	SK3 上層	磁器 色絵	小杯	—	—	2.0	—	外）灰白7.5Y8/1 断）白	外）上絵付（赤）による文様	高台施釉。透明釉は1㎜前後の貫入が入る。	肥前産 18世紀
137	SK3 下層	白磁又は染付	小杯	—	—	2.0	—	外）白 断）白		高台施釉。透明の釉。	肥前産
138	SK3 上層	青花	小皿 丸形	14.0	2.8	8.0	—	外）明青灰5B7/1 断）白	内）野菜文・圏線	高台内に放射状の鉋痕。口縁端部の釉が剥げる。畳付に粗い砂が付着。	中国産 景徳鎮窯系 1620～1640年代
139	SK3 上層	磁器 染付	小皿 端反形	13.8	2.9	8.0	—	外）白 断）白	外）唐草文 内）コンニャク印判による文様 高台内）二重圏線		肥前産 1690～1710年代 高台内に銘。
140	SK3 上層	磁器 染付	五寸皿 端反形	13.4	2.9	8.0	—	外）白 断）白	外）唐草文 内）唐草文 高台内）二重圏線	口縁部稜花形。高台施釉。	肥前産 1690～1710年代
141	SK3 上層	磁器 染付	小皿 変形形	10.3	2.3	—	—	外）灰白5Y8/1 断）白	外）コンニャク印判による唐草文 内）型紙摺りによる草花文	扁平な六角形。糸切り細工。高台は菱形で貼付による。	肥前産　有田 1690～1710年代
142	SK3 上層	磁器 染付	皿又は鉢 変形形	—	—	—	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）コンニャク印判による桐文 内）〃	口縁部稜花形。呉須は青灰色 透明釉は灰白色を帯び粗い貫入が入る。	肥前産 1690～1730年代
143	SK3 上層	磁器 染付	鉢 端反形	—	—	—	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）文様不明 内）花文か	口縁部端反形。呉須は青色。透明釉は粗い貫入が入る。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
144	SK3 下層	青磁	皿	—	—	—	—	外）オリーブ灰10Y6/2断）灰白N8/	内）陽刻による文様		肥前産　有田 17世紀後半
145	SK3 上層	青磁	皿	—	—	—	—	外）オリーブ灰10Y6/2 断）白	内）ヘラ彫による芭蕉葉	外底施釉。青磁釉はオリーブ灰色に発色。	肥前産　有田 17世紀後半
146	SK3 上層	白磁	碗 膶段形	9.4	6.0	4.0	—	外）灰白5GY8/1 断）白	白磁釉	口縁部は内面に稜をなして内湾する。釉は透明で僅かに青色を帯びる。	肥前系 18世紀後半
147	SK3 上層	青磁 染付	猪口	10.0	—	—	—	外）明オリーブ灰5GY7/1 断）灰白5GY8/1	外）青磁釉 内）四方襷文	口縁部端反形。青磁釉は明オリーブ灰色。	肥前産 18世紀後半
148	SK3 上層	磁器 染付	猪口 桶形	9.2	6.1	5.0	—	外）灰白2.5GY8/1 断）灰白N8/	外）草花文・二重圏線	呉須は暗緑灰色。	肥前産
149	SK3 上層	白磁	猪口 腰折形	9.4	5.9	4.6	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	口錆 白磁釉	口縁部端反形。高台施釉。	肥前産 17世紀後半
150	SK3 上層	磁器 染付	猪口 桶形	9.2	5.9	5.8	—	外）白 断）白	外）梅樹文・草花文 高台内）圏線	外底施釉。呉須は淡い青色で滲む。	肥前系 18世紀後半
151	SK3 下層	磁器 染付	猪口 桶形	7.0	5.4	4.4	—	外）白 断）白	外）草花文 高台内）圏線・渦福	外底施釉。	肥前産 18世紀高台内に角に渦福。
152	SK3 上層	磁器 染付	猪口 桶形	7.0	5.6	4.4	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）二方にコンニャク印判による若松文 底部脇）二重圏線	高台施釉。呉須は青灰色。	肥前産 18世紀第2・3四半期
153	SK3 上層	磁器 染付	小碗	—	—	4.0	—	外）灰白2.5GY8/1 断）灰白N8/	外）コンニャク印判による若松文	内面施釉。高台施釉。呉須は青灰色。	肥前産 1690～1730年代 高台内に銘。
154	SK3 上層	磁器 染付	小碗	—	—	3.8	—	外）灰白7.5Y8/1 断）白	外）不明 高台外）二重圏線 高台内）圏線・銘	高台施釉。	肥前産 18世紀前半か 高台内に「大明年製」銘。
155	SK3 上層	白磁	手塩皿	—	—	3.6	—	外）白 断）白	内）陽刻による植物文様	型作り。蛇の目高台。高台内兜巾状。高台内施釉。白磁釉は僅かに青色を帯び、被熱し変質。	肥前産 1630～1640年代 二次被熱。
156	SK3 下層	磁器 染付	蓋物 蓋	笠部径 9.0	—	摘み径 7.8	かえり径 7.8	外）白 断）白	外）網目文・鳥	摘み貼付。内面施釉。かえり無釉。呉須は青灰色。	肥前産 18世紀前半
157	SK3 上層	磁器 染付	蓋物 半筒形	9.0	—	—	—	外）灰白7.5Y8/1 断）灰白7.5Y8/1	外）コンニャク印判による桐文・圏線 高台外）二重圏線	内面施釉。高台施釉。口縁端部と内面上位無釉。	肥前産 1690～1730年代

Tab.7　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	最大径	色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
158	SK3 上層	磁器 色絵	蓋物 身	8.1	—	—	—	外）白 断）白	外）上絵付（赤）による梅文	内面無釉。	肥前産 17世紀末～18世紀前半 350と同一個体
159	SK3 下層	磁器 染付	香炉	7.0	—	—	—	外）白 断）白	外）松文・梅文	内面無釉。内面ロクロ目顕著。呉須は青色。三足を貼付する。	肥前産 1640～1650年代
160	SK3 下層	磁器 瑠璃釉	蓋物 身	5.4	3.1	2.8	—	外）青灰5B6/1 断）白	外）型による梅花文	八角形。型押し成形。内面ナデ。内面施釉。口縁端部と口縁部内面無釉。高台内施釉。蛇の目高台。	肥前産　有田 1680～1700年代 160・161同一個体。
161	SK3 上層	磁器 瑠璃釉	蓋物 蓋	笠部径 6.0	2.1	摘み径 0.6	かえり径 5.2	外）青灰5B6/1 断）白	外）陽刻による花・稲束 瑠璃釉	型作り。内面施釉。かえり無釉。	肥前産　有田 1680～1700年代 160・161同一個体。
162	SK3 下層	磁器 染付	蓋物 蓋	笠部径 5.2	器高 1.9	摘み径 0.6	かえり径 3.6	外）白 断）白	外）コンニャク印判による桐文	内面施釉。かえり無釉。	肥前産 1690～1730年代
163	SK3 上層	白磁	手塩皿 か	6.0	—	—	—	外）白 断）白	内）陽刻文様	型作り。釉は被熱し変質。	肥前産 1630～1640年代 二次被熱。
164	SK3 下層	白磁	紅猪口 浅丸形	4.8	1.5	2.0	—	外）白 断）白	口錆釉	高台施釉。	肥前産 18世紀後半
165	SK3 上層	白磁又は染付	紅皿又は手塩皿	6.0	1.6	3.2	—	外）灰白2.5GY8/1 断）白	菊花形	糸切り細工。高台施釉。	肥前産 18世紀前半
166	SK3 下層	磁器 染付	銚子か	—	—	—	—	外）白断）白	外）花唐草文	銚子の把手か。呉須は青色。	肥前産 1690年代～18世紀前半
167	SK3 下層	磁器 色絵	髪油壺	—	—	—	—	外）灰白N8/ 断）灰白N8/	外）上絵付（赤）による圏線と縞	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前産 1650～1670年代
168	SK3 下層	磁器 色絵	うがい 茶碗	14.6	—	—	—	外）白 断）白	外）上絵付（赤・金）による鳥文		肥前産 18世紀前半
169	SK3 上層	白磁	うがい 茶碗	16.2	—	—	—	外）白 断）白		釉は透明で僅かに青色を帯びる。	肥前産 18世紀 漆継痕あり。
170	SK3 下層	白磁	水滴	全長 5.5	全厚 5.5	全幅 4.8	—	外）灰白N8/ 断）白	獅子	型作り貼り合わせ。内面ユビオサエ、ユビナデ。外底布目。背部分に径3～4mmの円孔あり。	肥前産 17世紀末～18世紀第1四半期
171	SK3 下層	磁器 色絵	水滴	—	—	—	—	外）灰白N8/ 断）灰白N8/	外）陽刻による魚・波。上絵付（赤・青緑・黒）	型作り貼り合わせ。内面ユビオサエ、ユビナデ。魚の口部分に円孔あり。透明釉は僅かに青色を帯びる。	肥前産 17世紀末～18世紀初頭
172	SK3 下層	磁器 色絵	水滴	—	—	—	—	外）灰白N8/ 断）灰白N8/	〃	型作り貼り合わせ。内面ユビオサエ、ユビナデ。	肥前産 17世紀末～18世紀初頭
173	SK3 上層	陶器	中碗 腰折形	10.6	6.0	4.0	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y8/1	外）鉄絵と白泥による花文 灰釉	煎じ碗。内外面上位に強いロクロ目。高台内を鋭角的に削り出す。畳付外側に面取り。高台無釉。灰釉は浅黄色を帯び1～2mm大の貫入が入る。	京都系
174	SK3 下層	陶器	中碗 半球形 か	10.6	—	—	—	外）浅黄2.5Y7/4 断）灰白2.5Y8/2	外）上絵付による梅文（色は剥離し不明） 灰釉	浅黄色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	京都系 被熱し変質。
175	SK3 上層	陶器	小碗 半球形 か	10.0	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	外）鉄錆と呉須による梅文 灰釉	釉は1mm前後の貫入が入る。	京都系
176	SK3 上層	陶器	碗	—	—	—	—	外）淡黄2.5Y8/4 断）灰白2.5Y8/2	外）注連縄文　縄は鉄錆、幣は呉須で描く 灰釉	淡黄色を帯びる透明の釉で0.5mm前後の貫入が入る。	京都系
177	SK3 下層	陶器	中碗 端反形	12.0	7.1	4.6	—	外）灰白5Y8/2 断）灰白5Y8/1	外）鉋による2条の凹線	高台内を鋭角的に削り出す。高台内に渦状の鉋痕。畳付外側に面取り。高台無釉。	京都系
178	SK3 上層	陶器	中碗	10.4	—	—	—	外）浅黄2.5Y7/3 断）灰白2.5Y8/2	外）白化粧土象嵌。二重圏線、印刻による山形文、文様不明 灰釉	薄手の作り。浅黄色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	尾戸窯
179	SK3 上層	陶器	中碗	9.3	—	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白5Y7/1	灰釉	外面に緩やかなロクロ目。灰白色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	尾戸窯
180	SK3 上層	陶器	中碗 筒丸形	11.0	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	灰白色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	尾戸窯
181	SK3 上層	陶器	中碗 丸形	11.6	—	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白5Y7/1	外）鉄錆と呉須による草花文 灰釉	内面に緩やかなロクロ目。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	尾戸窯

Tab.8　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm） 口径	器高	底径	最大径	色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
182	SK3 上層	陶器	中碗	—	—	4.6	—	外）黒褐2.5Y3/2 断）灰白2.5Y7/1	鉄釉	高台内を鋭角的に削り出す。高台無釉。釉は焼成不良気味で黒褐色に発色。	
183	SK3 下層	陶器	中碗	—	—	4.4	—	外）灰褐5YR5/2 断）灰白2.5Y7/1	鉄釉	高台内を曲線的に削り出す。高台内に渦状の鉋痕。高台施釉。釉は焼成不良気味で灰褐色に発色。	
184	SK3 下層	陶器	中碗 腰張形	12.4	7.8	6.4	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白N8/	灰釉	外面に緩やかなロクロ目。外面下位に荒いケズリ痕が残る。畳付は丸くおさめる。高台無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉で2mm前後の貫入が入る。	
185	SK3 上層	陶器	中碗	—	—	5.2	—	外）浅黄2.5Y7/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	京焼風陶器。浅黄色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。高台無釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀初頭 高台内に銘印あり。
186	SK3 下層	陶器	中碗		—	4.8	—	外）灰黄2.5Y6/2 断）にぶい黄橙10YR7/3	灰釉	外面下位に荒いケズリ痕が残る。高台内を曲線的に削り出す。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰黄色を帯びる半透明の釉。	内底に回転方向の擦痕あり。
187	SK3 上層	陶器	碗	—	—	3.8	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	高台内を鋭角的に削り出す。畳付外側に面取り。高台無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉で1～2mm大の貫入が入る。	京都系
188	SK3 上層	陶器	中碗	—	—	5.2	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	灰オリーブ色を帯びる透明の釉で1～2mm大の貫入が入る。高台無釉。	京焼 高台内に銘印あり。
189	SK3 上層	陶器	中碗	—	—	4.0	—	外）灰白7.5Y7/1 断）にぶい黄橙10YR7/3	灰釉	高台内を曲線的に削り出す。高台内に渦状の鉋痕。畳付外側にナデ。高台脇に抉り。高台無釉。灰白色を帯びる釉。	尾戸窯
190	SK3 上層	陶器	中碗	—	—	4.8	—	外）浅黄2.5Y7/4 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	高台内を曲線的に深く削り出す。高台内凸状。畳付は丸くおさめる。高台施釉。浅黄色を帯びる半透明の釉で1～2mm大の貫入が入る。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
191	SK3 上層	陶器	鉢 浅丸形	15.4	6.5	6.0	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y8/2	灰釉	高台内を曲線的に削り出す。畳付は丸くおさめる。高台施釉。灰白色を帯びる半透明の釉で0.5～1mm大の貫入が入る。	尾戸窯 目痕4足。
192	SK3 上層	陶器	鉢 変形形	—	—	—	—	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	外）上絵付けによる草花文 灰釉	内面施釉。	京都系
193	SK3 上層	陶器	小皿	12.0	3.0	4.2	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白5Y7/1	灰釉	口縁部溝縁状。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	肥前産 1610～1630年代 内底に砂目。
194	SK3 下層	陶器	小皿	12.0	3.5	4.6	—	外）緑灰10G6/1 断）灰白2.5Y7/1	内）銅緑釉 外）灰釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面ロクロ目。外面下位無釉。釉剥ぎ部分に砂が少量付着。	肥前産　内野山 18世紀前半
195	SK3 上層 下層	陶器	小皿	11.6	3.5	4.1	—	外）灰オリーブ5Y6/2 内）緑灰10GY5/1 断）灰白2.5Y7/1	内）銅緑釉 外）灰釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面ロクロ目。高台無釉。	肥前産　内野山 18世紀前半
196	SK3 下層	陶器	小皿	—	—	4.4	—	外）灰白10YR8/1 断）にぶい黄橙10YR7/3	灰釉	見込みに砂目。見込みに段あり。灰釉は灰白色を帯びる。高台無釉。	肥前産 1610～1630年代 内底に砂目。
197	SK3 下層	陶器	小皿	—	—	4.6	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白N7/	灰釉	見込みに砂目。釉は灰オリーブ色を帯びる。高台無釉。	肥前産 1610～1630年代 内底に砂目。
198	SK3 上層	陶器	小皿	—	—	—	—	外）灰7.5Y6/1 断）黄灰2.5Y6/1	灰釉	口縁部溝縁状。灰色を帯びる半透明の釉。外面下半無釉。	肥前産 1610～1630年代
199	SK3 上層	陶器	中皿	—	—	5.2	—	外）灰白5Y8/1~5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。畳付の1箇所に三角形の切り込みあり。高台内を曲線的に削り出す。高台内に渦状の鉋痕。畳付外側にナデ。高台無釉。灰釉は焼成不良で白濁。	尾戸窯
200	SK3 上層	陶器	小皿	—	—	4.2	—	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白2.5Y8/2	内）鉄錆による草花文 灰釉	畳付は丸くおさめる。高台無釉。	目痕あり。
201	SK3 上層	陶器	中皿	—	—	7.4	—	外）にぶい黄2.5Y6/3 断）灰黄2.5Y6/2	外）鉄錆による山水文 灰釉	内底に目痕。高台内平坦。高台無釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
202	SK3 下層	陶器	中皿	—	—	8.0	—	外）浅黄2.5Y7/3 断）灰白2.5Y8/2	外）呉須による山水文 灰釉	呉須は灰オリーブ色に発色。灰釉は浅黄色を帯びる透明の釉で、1mm前後の貫入が入る。高台無釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半 高台内に墨書。

Tab.9 遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
				口径	器高	底径	最大径				
203	SK3 下層	陶器	中皿	21.0	4.7	8.2	—	外）灰オリーブ5Y6/3 断）灰白5Y7/1	灰釉	口縁部溝縁状。畳付外側面取り。見込み蛇の目釉剥ぎ。外面緩やかなロクロ目。高台無釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉で2mm前後の貫入が入る。	産不明
204	SK3 上層 SK6 下層	陶器	鉢	20.0	—	—	—	外）明褐灰7.5YR7/1 断）明赤褐2.5YR5/6	刷毛目	内外面白化粧土刷毛塗り後、外面上位に波状の櫛目。口縁端部無釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
205	SK3 上層	陶器	捏鉢	19.8	—	—	—	外）灰黄褐10YR4/2 断）にぶい赤褐2.5YR5/3	刷毛目	口縁端部無釉。内外面に白化粧土刷毛目。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
206	SK3 上層	陶器	捏鉢	—	—	8.8	—	外）黒2.5Y2/1 内）褐灰10YR4/1 断）赤褐10R5/4	刷毛目	外面下位黒褐色の鉄釉。内面白化粧土刷毛目後透明の釉。畳付外側面取り後ナデ。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
207	SK3 上層	陶器	片口	24.4	—	—	—	外）灰黄褐10YR4/2 断）灰黄褐10YR6/2	刷毛目	口縁端部無釉。内外面に白化粧土刷毛目。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
208	SK3 上層	陶器	鉢	—	—	10.0	—	外）黒褐5YR3/1 内）明褐灰7.5YR7/1 断）明赤褐2.5YR5/6	刷毛目二彩手	外面上位に白化粧土施釉後、波状の櫛目。外面下位に鉄錆を刷毛塗り。内面白化粧土刷毛塗り。畳付外側を大きく面取る。内底に砂胎土目痕。	肥前産 18世紀前半
209	SK3 上層	陶器	擂鉢	18.2	5.8	6.6	—	外）にぶい赤褐2.5YR4/4 断）橙2.5YR7/6	鉄錆	口縁部外面に凹線。内面から内底まで櫛目。外面上半回転ナデ、下半回転ケズリ。外底に凹凸。内外面に鉄錆を刷毛塗り。	備前 18世紀
210	SK3 下層	陶器	擂鉢	—	9.5	9.0	—	外）にぶい黄褐2.5YR4/4 断）にぶい黄褐2.5YR4/4		口縁部外面に凹線。内面から内底まで櫛目。外面上半ユビオサエ・回転ナデ、下半回転ケズリ。外底に凹凸。	備前 18世紀
211	SK3 上層	陶器	擂鉢	34.6	13.9	16.0	—	外）灰褐7.5YR4/2 断）灰褐7.5YR4/2	焼締	口縁部外面に凹線。内面から内底まで櫛目。外面ケズリ後ヨコナデ。外底に凹凸。	備前 18世紀
212	SK3 下層	陶器	擂鉢	31.0	—		—	外）赤灰2.5YR4/2 内）赤灰2.5YR4/1 断）赤10R5/6	焼締	口縁部外面に凹線。内面櫛目。外面ユビオサエ・ヨコナデ。	備前
213	SK3 上層	陶器	甕	36.4	—	—	—	外）暗赤褐5YR3/2 断）赤灰2.5YR5/1	鉄釉	口縁部T字状。外面上位に凹線。内外面施釉。鉄釉は暗赤褐色に発色。	
214	SK3 上層	陶器	甕	26.6	—	—	—	外）黒褐5YR3/1 断）暗赤褐5YR3/3	鉄釉	口縁部T字状。口縁端部の内側無釉。鉄釉は暗赤褐色に発色。	
215	SK3 上層・下層	陶器	壺	19.0	19.5	12.0	—	外上）暗オリーブ褐2.5Y3/3　外下）黒褐5YR2/1　内）黒褐5YR2/1 断）灰赤2.5YR4/2	刷毛目	口縁部T字状。外面白化粧土刷毛塗りの後、外面上位に波状の櫛目。オリーブ褐色の釉を重ね掛け。外面下半鉄釉。内面に鉄釉を刷毛塗り。内底に砂胎土目痕。	肥前産 17世紀後半 漆継痕あり。
216	SK3 上層	陶器	瓶	5.6	—	—	—	外）にぶい赤褐5YR4/3 断）明褐灰5YR7/2	焼締	内面ロクロ目。	
217	SK3・SK7 下層	軟質施釉陶器	甕	8.0	—	—	14.6	外）灰黄2.5Y7/2 内）橙7.5YR6/8 断）にぶい橙7.5YR7/4	外）変質した灰黄色の釉 内）橙の低火度釉	内面に強いロクロ目。	釉は被熱し変質。
218	SK3 下層	陶器	壺又は甕	—	—	10.4	—	外）灰黄褐10YR4/2 断）にぶい黄橙10YR7/3	焼締	内外面ロクロ目顕著。外底に凹凸。	
219	SK3 上層	陶器	壺又は甕	—	—	7.4	—	外）灰赤10R4/2 断）にぶい褐7.5YR6/3	鉄釉	内面ロクロ目顕著。畳付外側面取り。内面無釉。内面から高台内にかけて鉄釉が薄く掛かる。	
220	SK5	陶器	不明	—	全幅1.2	全厚0.8	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	把手か。外面凹状。灰釉は灰黄色をおび0.5mm前後の貫入が入る。	尾戸窯
221	SK3 下層	陶器	香炉	12.2	6.8	5.4	—	外）黒N2/ 断）灰白5Y7/1	鉄釉黒色の釉。	畳付外側を面取りしナデ。内面と高台無釉。	
222	SK3 下層	陶器	器種不明	—	—	—	—	外）灰白7.5Y7/1 断）淡黄2.5Y8/3	外）鉄錆と呉須による柳文 灰釉	内面無釉。内面ロクロ目顕著。灰釉は2mm前後の貫入が入る。	京都系
223	SK3 上層	陶器	筆筒	5.6	10.5	5.0	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y8/2	外）鉄錆による笹文 灰釉	内面に多段の強いロクロ目。底部脇に面取り。内面施釉。外底無釉。釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	京都系
224	SK3 下層	陶器	灰落としか	—	—	6.4	—	外）灰白10Y7/1 断）灰白5Y7/1	外）鉄錆による草花文 灰釉	内面ロクロ目顕著。内面と外底無釉。	外底に墨書。

Tab.10　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm） 口径	器高	底径	最大径	色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・施釉等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
225	SK3 上層	陶器	餅水入れ	—	—	—	—	外）灰オリーブ5Y5/3 断）灰5Y6/1	外）鉄釉灰釉。	たたら成形。梅円形。内底周縁部に強いナデ。外底無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉で2mm前後の貫入が入る。	
226	SK3 上層	陶器	鉢碗Ⅱ	4.6	2.9	4.6	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白5Y7/1	灰釉	幅6mmの取手を貼付。底部端に面取り。外底無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で0.5mm前後の貫入が入る。	尾戸焼産か
227	SK3 上層	陶器	鉢碗D	4.8	2.5	4.2	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白5Y7/1	灰釉	内面に緩やかなロクロ目。取手は欠損する。底部端に面取り。外底無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉で0.5mm程度の貫入が入る。	
228	SK3 上層	陶器	蓋	笠部径 7.4	器高 0.6	—	かえり径 7.0	外）浅黄2.5Y7/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	内面とかえり無釉。天井部ケズリ後ナデ。淡黄色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	京都系
229	SK3 下段	陶器	灯明受皿	11.0	1.8	3.0	—	外）赤褐10R5/4 内）赤黒10R2/1 断）赤褐10R5/4	鉄錆	内面と外底上位回転ナデ。外面下位回転ケズリ。外底回転糸切り。外面無釉。	山縁部内外面に灯芯油痕。
230	SK3 下層	陶器	灯明受皿	10.6	7.0	5.8	—	外）灰黄褐10YR5/2 断）灰黄褐10YR5/2	焼締め	内外面回転ナデ。外底回転ケズり。	口縁部内外面に強い煤。
231	SK3 上層	陶器	灯明受皿	11.5	1.6	2.5	受け部径 8.2	外）黒褐10YR3/2 断）灰褐5YR5/2	鉄錆	油溜半月状。外面下位と外底回転ケズり。内外面に鉄釉施釉。	
232	SK3 上層	陶器	灯明受皿	10.8	1.7	5.4	受け部径 7.8	外）にぶい赤褐2.5YR4/3 断）にぶい赤褐2.5YR5/4	鉄錆	油溜半月状。外面下位回転ケズり。外底の中央に回転糸切り痕が残る。内外面に鉄錆施釉。	
233	SK3 下層	陶器	灯明受皿	10.6	1.9	—	—	外）褐灰7.5YR4/1 断）灰5/	鉄錆	内面と外面上位回転ナデ。外面下位回転ケズり。外面無釉。	口縁部内外面に灯芯油痕。
234	SK3 上層	陶器	灯明受皿	11.2	2.5	5.0	受け部径 7.4	外）赤褐10R4/3 内）暗赤褐10R3/2 断）灰5Y4/1	鉄錆	内面と外面上位回転ナデ。外面下位と外底同転ケズり。外面下半無釉。	
235	SK3 上層	陶器	灯明受皿	11.2	1.5	4.4	受け部径 8.8	外）黒褐7.5YR3/1 断）灰褐5YR4/2	鉄錆	油溜半月状。外面下位と外底回転ケズり。内外面に鉄錆を刷毛塗り。	
236	SK3 上層	土師質土器	小皿	10.0	1.5	5.4	—	外）にぶい黄橙10YR7/3 断）にぶい黄橙10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	山縁端部に灯芯油痕。
237	SK3 下層	土師質土器	小皿	9.0	1.5	5.4	—	外）浅黄橙10YR8/4 断）浅黄橙10YR8/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
238	SK3 上層	土師質土器	小皿	8.4	1.1	4.6	—	外）にぶい黄橙10YR7/2 断）にぶい黄橙10YR7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
239	SK3 下層	土師質土器	小皿	7.0	1.1	4.0	—	外）にぶい黄橙10YR7/2 断）にぶい黄橙10YR7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部内外面に灯芯油痕。
240	SK3 上層	土師質土器	小皿	9.4	1.8	4.4	—	外）にぶい橙7.5YR7/3 断）にぶい橙7.5YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
241	SK3 上層	土師質土器	小皿	8.0	1.6	3.8	—	外）にぶい黄橙10YR7/3 断）にぶい黄橙10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
242	SK3 上層	土師質土器	小皿	9.0	1.8	5.0	—	外）灰白10YR8/2 断）灰白10YR8/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
243	SK3 上層	土師質土器	小皿	8.0	1.3	5.0	—	外）にぶい黄橙10YR7/2 断）にぶい黄橙10YR7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
244	SK3 上層	土師質土器	小皿	8.0	1.8	4.0	—	外）浅黄橙10YR8/3 断）浅黄橙10YR8/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
245	SK3 上層	土師質土器	小皿	7.2	1.4	3.9	—	外）にぶい黄橙10YR7/2 断）にぶい黄橙10YR7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。口縁部が歪む。	
246	SK3 下層	土師質土器	小皿	7.8	1.4	4.4	—	外）にぶい黄橙10YR7/3 断）にぶい黄橙10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部内外面に灯芯痕跡。
247	SK3 下層	土師質土器	小皿	8.2	1.4	4.2	—	外）にぶい黄橙10YR7/2 断）にぶい黄橙10YR7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部内外面に灯芯痕跡。

Tab.11　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	最大径	色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・施釉等）	備考（生産地・生産年代・焼・使用痕・他）
248	SK3 上層	土師質 土器	小皿	9.0	1.4	4.8	—	外）浅黄橙10YR8/3 断）浅黄橙10YR8/3		内外面回転ナデ。内底にロクロ目。外底回転糸切り。	
249	SK3 上層	土師質 土器	小皿	8.0	1.6	3.8	—	外）浅黄橙7.5YR8/4 断）浅黄橙7.5YR8/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部内外面に灯芯油煤。
250	SK3 上層	白土器	小皿	10.4	1.6	7.0	—	外）灰白10YR8/1 断）灰白10YR8/1	内）暈刷による輪花文	内底に型による暈刷文様。内面調整と外面にヨコナデ。外底表裏方向のナデ。	尾戸窯
251	SK3 上層	土師質 土器	土鈴	全長 3.9	—	全幅 4.2	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2	土鈴。	手捏ね成形。中空。外面ナデ、ユビオサエ。下側に孔状の切り込みあり。	
252	SK3 上層	土師質 土器	人形	—	—	—	—	釉）オリーブ灰10Y6/2 外）灰白7.5Y8/1 断）灰白7.5Y8/1	鳥。外面上半に薄緑色の灰大度釉を施釉。	型作り貼り合わせ。中空。庫手（1mm）。外面ナデ、内面ユビオサエ。内面下位に粘土塊を貼付。	
253	SK3 上層	土師質 土器	土鈴	—	—	—	—	外）灰白10YR8/2 断）灰白10YR8/2		外面ナデ。内面シボリ目。体部を欠損。径4mの穿孔あり。	
254	SK3 下層	土師質 土器	焙烙	—	—	—	—	外）黒7.5Y2/1 内）にぶい黄橙 10YR7/3 断）にぶい黄橙 10YR7/3		体部外面ユビオサエ、ヨコナデ。内面ヨコナデ。外底に凹凸あり。	関西系 18世紀
255	SK3 下層	土師質 土器	不明	10.8	4.8	8.0	—	外）にぶい黄橙 10YR6/3 断）にぶい黄橙 10YR6/3		内外面回転ナデ。	関西系 口縁部に煤。
256	SK3 上層	土師質 土器	焙烙	30.0	—	—	—	外）にぶい橙 7.5YR6/4 断）にぶい橙 7.5YR6/4		口縁部の反方に径5mmの穿孔あり。体部外面ヨコナデ、内面ユビオサエ、ヨコナデ。外底にナデ目。	関西系 18世紀 外底に強い煤。
257	SK3 上層	土師質 土器	焙烙	26.4	—	—	—	外）にぶい橙 7.5YR7/4 断）にぶい橙 7.5YR7/4		口縁部の反方に径5mmの穿孔あり。体部内外面ヨコナデ。外底に凹凸、ナデ目。	関西産 外底と体部外面に煤。
258	SK3 下層	土師質 土器	焙炉	—	—	—	—	外）にぶい黄橙 10YR6/3 断）にぶい黄橙 10YR6/3		内外面回転ナデ。	
259	SK3 上層	土師質 土器	焙炉	—	—	21.4	—	外）暗灰N2/ 断）灰白N7/	脚部、窓の有無は不明。	外面ナデ、ミガキ、底部付近に横方向のイタナデ。内面ヨコナデ、接合部付近に連続したユビオサエ。	
260	SK3 下層	土師質 土器	火鉢・焙炉・焙炉	—	—	—	—	外）にぶい橙 7.5YR6/4 断）にぶい橙 7.5YR6/4		外面ヨコナデ。内面上位に横方向の強いイタナデ、中位にユビオサエ。	
261	SK3 下層	瓦質 土器	火鉢	—	—	—	—	外）黄灰2.5Y4/1 断）黄灰2.5Y6/1		脚を貼付。脚部内側に径5mmの穿孔（貫通しない）あり。	在地系
262	SK3 下層	土師質 土器	焙炉	—	—	—	—	外）にぶい黄橙 10YR7/3 断）にぶい黄橙 10YR7/3	方形。	体部外面ナデ、内面ヨコナデ。	在地系か 口縁部内面から体部内面上位に煤。
263	SK3 上層	土師質 土器	土鈴	残存長 5.9	全幅 1.5	孔径 0.4	重量 12.1g	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2		外面ナデ。	
264	SK3 上層	土師質 土器	土鈴	残存長 6.3	全幅 1.7	孔径 0.5	重量 14.1g	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2		外面ナデ。	
265	SK3 上層	土師質 土器	土鈴	全長 7.4	全幅 1.8	孔径 0.6	重量 18.3g	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2		外面ナデ。	
315	SK4	磁器 染付	中皿 丸形	12.0	—	—	—	外）口断）白	外）松・寒屋・囲線 内）二重圏線		肥前産 18世紀前半～中葉
316	SK4	磁器 染付	小皿 丸形	7.8	4.0	3.0	—	外）灰白5G7/1 断）灰白N8/	外）雨降り文 高台外）圏線	高台施釉。呉須は青色。	肥前産 18世紀前半
317	SK4	白磁	小杯	6.8	3.7	2.8	—	外）白 断）白	白磁釉。	内外面ロクロ目顕著。高台施釉。高台に砂が付着。	肥前産 17世紀後半～18世紀初頭
318	SK4 上層	磁器 染付	中鉢 筒形鉢	11.8	6.1	4.6	—	外）灰白5G7/1 断）白	外）宝文 内）不明 見込み）蔦文・二重圏線 高台外）二重圏線	高台は外方に張り出す。高台施釉。	肥前産 18世紀後半
319	SK4 上層	磁器 染付	蓋物か	—	—	6.2	—	外）白 断）白	外）植物 高台脇）二重圏線	高台施釉。	肥前産 17世紀後半
320	SK4	磁器 染付	端口 椀形	—	—	5.2	—	外）灰白5G7/1 断）白	外）草花文・圏線	高台施釉。呉須は青灰色。	肥前産 18世紀前半～中葉

Tab.12 遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
				口径	器高	底径	最大径				
321	SK4 上層	磁器 染付	蓋 望料碗 の蓋	笠部 径 11.0	器高 3.2	摘み径 5.0	—	外）白 断）白	外）宝珠繋ぎ・帯線 内）宝珠繋ぎ・帯線・五弁花	望料碗の蓋。天井部は膨らみをもつ。	肥前産 1770～1800年代
322	SK4	磁器 染付	火入れか	—	—	—	—	外）白 断）白	外）松文	内面下半無釉。呉須は青色。	肥前産 18世紀前半
323	SK4 上層	磁器 染付	小皿 端反形	10.8	—	—	—	外）白 断）白	内）松・垣 外）花文	口縁部輪花形。呉須は青色。	肥前産 18世紀中葉～末
324	SK4 上層	磁器 白磁又は染付	瓶	3.8	—	—	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白		内面下半無釉。	肥前産
325	SK4	磁器 染付	髪油壺	—	—	5.4	11.1	外）灰白5GY8/1 断）白	外）草花文	内面ロクロ目顕著。内面無釉。高台施釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀初頭
326	SK4 上層	陶器	不明	—	—	—	—	外下）黒褐10YR3/2 外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	灰釉、鉄釉	腰錆碗。外面中位に回転削りによる4条の凹線。外面下半に鉄釉。外面上半と内面に透明釉。鉄釉は黒褐色。	瀬戸・美濃産 18世紀後半
327	SK3・ SK4	陶器	中碗 甕形	11.4	—	—	—	外）灰オリーブ 7.5Y6/2 断）灰白7.5Y7/1	外）鉄絵による笹文 灰釉	外面下位に多段の荒い鉋痕。高台無釉。灰釉は灰オリーブ色を帯び1～2㎜大の貫入が入る。	
328	SK4	陶器	火入れ又は香炉	—	—	—	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	外面に強いロクロ目。内面無釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉で2㎜前後の貫入が入る。	
329	SK4 上層	陶器	小皿	—	—	3.8	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白7.5Y7/1	灰釉	内底に段あり。外面ロクロ目。高台に砂が付着。外底下半無釉。灰釉は焼成不良気味で白濁。内底に砂目痕。	肥前産 1610～1630年代 内底に砂目。
330	SK4 上層	陶器	中碗	—	—	4.8	—	外）浅黄2.5Y7/3 断）灰白10YR8/2	灰釉	外面下位に放射状の鉋痕。高台内を曲線的に削り出す。高台内凸状。畳付外側に面取り。高台施釉。釉は焼成不良気味でにぶい黄色に発色。	肥前産
331	SK5	磁器 染付	小杯 桶形	6.0	4.0	3.2	—	外）灰白7.5Y8/1 断）白	外）草文	呉須は青色。透明釉は焼成不良気味で白濁。	肥前産 18世紀中葉～後半
332	SK4 上層	陶器	灰落とし	5.2	7.4	5.2	—	外）浅黄5Y7/3 断）灰白2.5Y8/2	外）鉄絵による植物文 灰釉	内面ロクロ目顕著。外底回転ケズリ。内面と外底無釉。浅黄色を帯びる透明の釉で2㎜前後の貫入が入る。	京・信楽系 口縁端部に敲打痕
333	SK4	土師質 土器	ひょうそく	4.0	1.4	2.6	—	外）浅黄橙10YR8/3 内）にぶい黄橙 10YR7/4 断）浅黄橙10YR8/3	にぶい黄橙色の低火度釉	灯芯受けを貼付。径4㎜の円孔あり。内外面ナデ。内面施釉。外面無釉。	外底に刻印。
334	SK4	土師質 土器	ひょうそく	4.0	1.5	2.8	—	外）灰白2.5Y8/2 内）浅黄2.5Y7/4 断）灰白2.5Y8/2	浅黄色の低火度釉	灯芯受けは欠損。内外面ナデ。内面施釉。外面無釉。	
335	SK5	陶器	擂鉢	29.0	—	—	—	外）橙2.5YR6/6 断）橙2.5YR6/6	焼締	口縁部外面に凹線。内面擂目。外面ヨコナデ。	備前 内面は使用により摩耗する。
336	SK4	陶器	灯明受皿	8.4	1.1	3.0	—	外）にぶい赤褐 2.5YR5/3 内）灰褐7.5YR4/2 断）灰N6/	鉄釉	薄手の作り。内面回転ナデ、外面回転ケズリ。内面施釉、外面無釉。釉は灰褐色。	
337	SK4	土師質 土器	小皿	7.8	1.5	4.4	—	外）にぶい橙 7.5YR7/4 断）にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転ケズリ。	
338	SK4 上層	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外）浅黄橙10YR8/3 断）浅黄橙10YR8/3	動物	型作り貼り合わせ。中空。内面ユビナデ。底部に径3㎜の穿孔あり。外面にキラ粉。	
339	SK6 上層	磁器 染付	中碗 丸形	11.0	—	—	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）草花文	呉須は藍色に発色。	肥前産 18世紀前半
340	SK6 上層	磁器 染付	中碗 丸形	9.8	—	—	—	外）白 断）白	外）草花文	呉須は青色に発色。透明釉は貫入が入る。	肥前産 18世紀前半
341	SK6 下層	陶胎染付	中碗 腰張形	11.4	8.2	5.2	—	外）灰7.5Y6/1 断）灰白5Y7/1	外）山水文・圏線 高台外）二重圏線	厚手のつくり。呉須は緑灰色に発色。	肥前産 18世紀前半
342	SK6 下層	白磁	小碗	—	—	4.2	—	外）白 断）白		高台施釉。	肥前産 17世紀後半
343	SK6 上層	磁器 染付	猪口 端反形	8.0	5.9	4.6	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）草花文	高台施釉。呉須は青色に発色。	肥前産 18世紀前半
344	SK6	青花	小皿	—	—	4.0	—	外）白 断）白	内）野菜文	呉須は青色。	中国産 景徳鎮窯系 1620～1640年代
345	SK6 上層	磁器 染付	中皿 丸形	19.8	3.2	8.0	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	口紅 内）鳥・区画内に四方襷 口縁外）圏線	クリ底。高台施釉。呉須は藍色に発色。	肥前産 1640年代

Tab.13　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
				口径	器高	底径	最大径				
346	SK6 上層	白磁	小杯 丸形	5.6	3.1	2.6	—	外) 灰白7.5Y8/1 断) 白		高台施釉。	肥前産
347	SK6 上層	磁器 染付	小杯	6.8	—	—	—	外) 灰白10Y7/1 断) 灰白N8/	外) 笹文	外面ロクロ目。呉須は暗オリーブ色に発色。	肥前産
348	SK6 上層	白磁	小杯 又は 小猪口 菊花形	6.0	3.4	1.8	—	外) 白 断) 白	口紅	型打成形。口縁部輪花形。クリ底。高台施釉。二次被熱により釉は変質。	肥前産 17世紀末～18世紀初頭 二次被熱。
349	SK6	磁器 染付	碗蓋	笠部径6.8	器高2.7	摘み径6.8	—	外) 白 断) 白	外) 梅文 見込み) 不明	広東形碗の蓋。透明釉は貫入が入る。	肥前産 1780～1810年代
350	SK6 上層	磁器 色絵	蓋物蓋	笠部径8.0	器高1.2	—	かえり径7.0	外) 白 断) 白	外) 上絵付（赤）による梅文	内面施釉。かえり無釉。	肥前産 17世紀末～18世紀前半 158と同一個体
351	SK6 上層	磁器 色絵	仏飯器	—	—	2.0	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 圏線	外底無釉。	肥前産
352	SK6 上層	磁器 染付	瓶	—	—	5.8	9.0	外) 白 断) 白	外) 草花文・圏線 高台外) 二重圏線	内面ロクロ目。高台施釉。呉須は青色。	肥前産 1660～1700年代
353	SK6 上層	白磁又は染付	瓶	2.8	—	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白		内面無釉。	肥前産
354	SK6 上層	青磁	香炉	6.8	—	—	—	外) 明緑灰10GY7/1 断) 白		内面無釉。明緑灰色の釉。	肥前産
355	SK6 下層	白磁	合子	—	1.5	3.8	かえり径5.6	外) 白 断) 白	外) 菊弁	かえり無釉。内面施釉。高台無釉。	肥前産 17世紀第4四半期
356	SK6 下層	磁器 色絵染付	水滴	—	—	—	—	外) 白 断) 白	陽刻による菊花文。呉須と上絵付け（赤）で菊花を塗り分ける。	型押し成形。上面中央に径4mmの円孔。	肥前産 17世紀後半
357	SK6	磁器 染付	水滴又は人形	—	—	—	—	外) 白 断) 白	不明	型作り貼り合わせ。内面ユビオサエ、ナデ。	肥前産
358	SK6 下層	白磁	水滴又は人形	—	—	—	—	外) 灰白10Y8/1 断) 白	鳥	型作り貼り合わせ。内面ユビオサエ、ナデ。透明釉はわずかに青色を帯びる。	肥前産 17世紀後半
359	SK6 上層	磁器 染付	水滴	—	—	—	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	不明	径5mmの円孔あり。内面ナデ。透明釉はわずかに緑色を帯びる。	肥前産 17世紀末～18世紀初頭
360	SK6	陶器	中碗	11.4	—	—	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 浅黄橙10YR8/4～黄灰2.5Y6/1	灰釉	外面に緩やかなロクロ目。灰釉は焼成不良気味で白濁する。器面に御本が入る。	尾戸窯
361	SK6	陶器	中碗 丸形	12.0	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1		灰白色を帯びる半透明の釉で0.5mm前後の貫入が入る。器面に御本が入る。	尾戸窯
362	SK6	陶器	中碗 腰折形	11.0	—	—	—	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 灰白2.5Y8/2	外) 水仙 花弁を白土、葉を鉄錆で描き分ける。灰釉	せんじ碗。花弁は白土を盛上げるように厚く施して描く。灰釉は浅黄色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	京都系 18世紀前半
363	SK6 下層	陶器	中碗	—	—	4.4	—	外) にぶい赤褐5YR4/3 断) 灰白2.5Y7/1	鉄釉	高台内に渦状の鉋痕。高台施釉。にぶい赤褐色～黒色に発色。	
364	SK6 下層	陶器	台付皿	—	—	5.6	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰黄2.5Y7/2	内) 釉の掛け分け。	高台内施釉。釉は二次被熱により変質し、暗赤褐色と灰白色に発色。	二次被熱。
365	SK6 下層	陶器	小皿 端反形	14.6	3.9	6.8	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	内) 呉須による草文灰釉	内外面緩やかなロクロ目。内底に段あり。高台内を曲線的に削り出す。畳付外側にナデ。高台内平坦。	尾戸窯産 内底に目痕。
366	SK6 下層	陶器	小皿 丸形	11.8	—	—	—	外) 灰黄2.5Y6/2 内) オリーブ黄5Y6/4 断) 灰白2.5Y8/2	銅緑釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面ロクロ目。高台無釉。	肥前産　内野山 18世紀前半
367	SK6 上層	陶器	小皿	9.6	2.1	4.2	—	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 灰白N7/	焼締め	内外面回転ナデ。内底ロクロ目。外底回転糸切り。全体に自然釉が掛る。	
368	SK6 下層	陶器	鉢 変形形	16.0	7.8	8.6	—	外) にぶい黄褐10YR4/3 断) 灰白10Y7/1	灰釉	口縁部の数箇所をユビオサエし輪花形に形作る。内外面ロクロ目顕著。全面施釉。灰釉は薄く掛かりにぶい黄褐色に発色。	
369	SK6 上層	陶器	灯明受皿	11.2	—	—	受け部径8.4	外) 暗赤褐10R3/3 断) 橙2.5YR6/6	焼締め	内面ロクロ目。外面下半回転削り。	
370	SK6 下層	陶器	灯明受皿	12.0	—	—	—	外) にぶい橙2.5YR6/4　内) にぶい赤褐2.5YR4/4 断) にぶい橙2.5YR6/4	内面に鉄釉	内面回転ナデ。外面下半回転ケズリ。内面施釉。外面無釉。	口縁部に灯芯油痕あり。
371	SK6	陶器	鍋	13.6	—	—	—	外) 暗赤褐5YR3/2 断) にぶい黄橙10YR7/2	鉄釉	把手は欠損する。外面ロクロ目。内外面施釉。暗赤褐色の釉。	

Tab.14　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
				口径	器高	底径	最大径				
372	SK6 下層	陶器	甕	8.8	—	—	—	外）明黄褐2.5Y6/6 断）淡黄2.5Y8/3	黄瀬戸釉	肩部に双耳を貼付。外面ロクロ目。内面と口縁端部無釉。	瀬戸・美濃系
373	SK6 下層	陶器	壺又は甕	—	—	10.0	—	外）灰白5Y7/2 内）灰白5Y7/1 断）灰白5Y7/1	外）鉄線灰釉。	内面に強いロクロ目。外面下位に横方向のヘラナデ。内面無釉。外底施釉。	内底と外底周縁に胎土目。
374	SK6	陶器	甕	—	—	—	—	外）暗赤褐5YR3/3 断）褐灰5YR5/1	外）灰釉の流し掛け　鉄釉	型作りによる獣面を双方に貼付。内面ロクロ目。外面肩部に灰釉を流し掛け。	
375	SK6 上層	土師質土器	杯	—	—	5.0	—	外）にぶい黄橙10YR7/3 断）にぶい黄橙10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
376	SK6	土師質土器	小皿	7.8	1.3	5.0	—	外）にぶい黄橙7.5YR7/4 断）にぶい黄橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底摩耗し調整不明。	
377	SK6 下層	土師質土器	小皿	10.2	1.5	5.9	—	外）灰白10YR8/2 断）灰白10YR8/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
378	SK6 上層	土師質土器	小皿 白土器	—	—	—	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	内）陽刻による寿字文	内面に型押しによる陽刻文様。摩耗し調整不明。	尾戸窯
379	SK6 下層	土師質土器	焙烙	30.0	—	—	—	外）にぶい黄褐10YR5/4 断）にぶい黄橙10YR6/3		体部外面ヨコナデ、内面横方向のイタナデ。内底ヨコナデ、外底凹凸とチヂレ目。	関西系 体部外面に強い煤。外底周縁に煤。内底に焦げ痕。
380	SK6 上層	土師質土器	焜炉	21.2	—	—	—	外）橙7.5YR6/6 断）橙7.5YR6/6		内部突起は欠損。内外面ヨコナデ。	
389	SK7 上層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.2	器高 2.9	摘み径 5.6	—	外）白 断）白	外）梅文・笹文・「龍虎」字 内）鶯・二重圏線	広東形碗の蓋。	肥前産 1780～1810年代
390	SK5・SK7下層	磁器 染付	中碗 丸形	12.0	6.3	4.4	—	外）白 断）白	外）宝珠繋ぎ・帯線 高台外）二重圏線	呉須は暗青灰色。	肥前産 目痕3足
391	SK7	磁器 染付	鉢か	—	—	7.0	—	外）白 断）白	見込み）不明	撥状に広がる幅広の高台。高台内施釉。呉須は青色。透明釉は淡い青色を帯びる。	肥前産 18世紀後半
392	SK7 上層	磁器 染付	小杯 浅丸形	5.4	2.2	2.4	—	外）白 断）白	外）笠文・蝶	高台施釉。	肥前産 18世紀中葉～末
393	SK7 下層	白磁	紅皿 菊花形	4.8	1.5	1.4	—	外）白 断）白	外）型作りによる菊弁文	型押し成形。高台無釉。	肥前産 18世紀後半
394	SK7 上層	白磁	紅皿 菊花形	4.8	1.4	1.4	—	外）灰白5Y8/1 断）白	外）型作りによる菊弁文	型押し成形。外面下半無釉。	肥前産 18世紀後半
395	SK7 上層	陶器	小碗 端反形	9.2	5.2	3.6	—	外）灰白5Y8/2 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で2㎜前後の貫入が入る。高台無釉。	高台内に墨書。
396	SK7	陶器	灯明受皿	—	—	—	—	外）暗赤褐2.5YR3/2 断）灰白10Y5/1	焼締め	内面回転ナデ。外面回転ケズリ。	
397	SK7	陶器	皿 輪花形	—	—	—	—	外）灰白10Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	口錆・灰釉	口縁部輪花形。外面ロクロ目。灰白色の釉。	尾戸窯か 釉は被熱し変質。
401	SK8 下層	磁器 染付	蓋物	10.2	5.9	5.0	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）草花文・蝶 高台外）二重圏線	口縁端部無釉。露胎部は橙色に発色。	肥前産 18世紀前半
402	SK8 下層	陶器	合子	4.8	2.1	2.6	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	外底回転ケズリ。内面施釉。かえりと外底無釉。灰黄色を帯びる半透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。	
403	SK8	磁器 染付	合子	4.4	2.0	3.8	—	外）白 断）白	外）陽刻による紗綾形文	型押し成形。蛇の目高台。内面施釉。内面上位無釉。	肥前産　有田 17世紀末
404	SK8 下層	白磁	紅皿 菊花形	4.8	1.7	1.6	—	外）白 断）白	外）型作りによる菊弁文	型押し成形。外面下半無釉。	肥前産 18世紀後半
405	SK9 上層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.0	器高 1.5	摘み径 5.6	—	外）白 断）白	外）鳥	呉須は青色。透明釉は粗い貫入が入る。	肥前産 1780年代～1810年代
406	SK9 上層	磁器 染付	中碗 広東形	10.4	—	—	—	外）白断）白	外）鳥	呉須は青色。	肥前産 1780年代～1810年代
407	SK9 下層	磁器 染付	小碗 丸形	9.2	—	—	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）コンニャク印判による丸文	呉須は淡い青色。	肥前産 18世紀前半
408	SK9 上層	磁器 色絵	中碗	11.0	—	—	—	外）白 断）白	外）上絵付（赤・黄・その他は剥離）による草花文		肥前産　有田 17世紀後半
409	SK9 上層	磁器 青磁染付	中碗	—	—	5.0	—	外）明緑灰10GY8/1 内）白断）白	外）青磁釉 見込み）二重圏線・笊描きによる五弁花 高台内）角枠内に「筒江」銘	青磁釉は明緑灰色、呉須は青色に発色。	肥前産　筒江窯 18世紀後半 高台内「筒江」銘。

Tab.15　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種 器形	法量（cm） 口径	 器高	 底径	 最大径	色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
410	SK9 上層	磁器 染付	猪口	9.4	—	—	—	外）灰白2.5GY8/1 断）灰白N8/	外）竹・梅	呉須は暗緑灰色。	肥前産
411	SK9 上層	磁器 染付	蓋物 丸碗形	9.4	5.2	4.8	—	外）白 断）白	外）唐草文 高台外）二重圏線	口縁端部無釉。呉須は青色。	肥前系 18世紀末～19世紀前半 焼継ぎ痕あり。
412	SK9 上層	磁器 染付	小杯 筒形	5.2	3.5	3.6	—	外）白 断）白	外）梅・稲束	呉須は青色。	肥前産 18世紀後半～19世紀初頭
413	SK9 下層	磁器 染付	小瓶	3.0	—	—	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白N8/	外）文様不明	内面無釉。	肥前産
414	SK9 下層	磁器 染付	壺	—	—	6.4	—	外）白 断）白	高台外）櫛歯文 高台内）人物文か	内面ロクロ目。高台外側を面取る。畳付に灰白色の粗い砂が付着。	肥前産 1630～1640年代
415	SK9 上層	陶器	小碗 半筒形	7.8	5.4	4.4	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	畳付外側を面取る。灰白色を帯びる透明の釉で1～2mm大の貫入が入る。高台無釉。	関西系
416	SK9 上層	陶器	小碗 端反形	9.0	—	—	—	外）灰白5Y8/2 断）灰白5Y8/2	緑釉・灰釉	口縁部内外面に緑釉。灰釉は1mm前後の貫入が入る。	信楽 19世紀
417	SK9	陶器 色絵	小碗	—	—	—	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/1	外）上絵付（薄緑）による松文	灰釉は灰白色を帯び2mm前後の貫入が入る。	京都系
418	SK9 下層	陶器	中碗	—	—	4.4	—	外）浅黄2.5Y7/3 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	高台内を鋭角的に深く削り出す。高台内平坦。畳付外側に面取り。高台無釉。浅黄色を帯びる透明の釉で2mm前後の貫入が入る。	肥前系
419	SK9 上層	陶器	小皿	12.8	2.8	6.2	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/1	内）呉須による文様 灰釉	ひだ皿。高台施釉。	瀬戸・美濃産 18世紀
420	SK9 床	陶器 色絵	平碗	12.4	4.7	3.6	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y8/1	内）上絵付（赤・淡い緑・剥離し不明）による菊文 灰釉	高台内を鋭角的に削り出す。畳付外側を面取る。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で0.5～1mm大の貫入が入る。	京都系 18世紀中葉～後半
421	SK9 上層	陶器	小皿 端反形	13.8	3.8	5.6	—	外）灰白5Y8/1 断）灰白N8/	灰釉	外面ロクロ目。外面下半無釉。灰釉は焼成不良気味で白濁。	尾戸窯
422	SK9	陶器	小皿 折縁皿	—	—	—	—	外）オリーブ黄5Y6/3 断）灰白5Y7/1	灰釉	口縁部折縁状。内面にそぎを施す。灰釉はオリーブ黄色を帯びる透明の釉で光沢が強い。	瀬戸 大窯3期後～4期 16世紀末～17世紀初頭
423	SK9 上層	陶器	灯明受皿	12.0	—	—	—	外）灰白5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2	内）櫛目	灰白色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。外面無釉。	19世紀
424	SK9	陶器	瓶	—	—	5.6	—	外）黒5Y2/1 断）灰N6/	鉄釉	高台施釉。内面無釉。黒色の釉。	
425	SK9 上層	陶器	土瓶	—	—	7.5	17.2	外）灰7.5Y6/1 断）灰白7.5Y7/1	灰釉	三足を貼付。内面施釉。外面下半無釉。灰色を帯びる透明の釉で1～2mm大の貫入が入る。外底無釉。	
426	SK9	土師質 土器	小皿	8.0	1.1	5.4	—	外）にぶい黄橙10YR7/3 断）にぶい黄橙10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
427	SK9 上層	土師質 土器 白土器	小皿	11.8	1.9	9.0	—	外）浅黄橙10YR8/3 断）浅黄橙10YR8/3	内）陽刻による高砂文	内底陽刻文様。内面周縁と外面ヨコナデ。外底不定方向のナデ。	尾戸窯
428	SK11 上層	陶器	小皿 丸形	13.6	3.1	5.0	—	外）オリーブ黄5Y6/4 内）暗オリーブ7.5Y4/3 断）灰白5Y7/1	銅緑釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台無釉。釉剥ぎ部分と畳付に楕円形の砂目痕。	肥前産　内野山 17世紀後半
429	SK11 上層	陶器	中碗 丸形	—	—	5.0	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	内底凸状。高台施釉。淡黄色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
430	SK11 上層	磁器 色絵	碗蓋	—	—	3.2	—	外）白 断）白	外）上絵付（赤・緑・その他は剥離）による圏線・草花文 摘み）三重圏線		肥前産 17世紀後半
432	SK11 上層	瓦質 土器	火鉢	23.0	—	—	—	外）灰N4/ 断）灰白5Y7/2		口縁部を肥厚させる。摩耗し調整不明。	
433	SK10 上層	土師質 土器	小皿	7.7	1.5	4.6	—	外）にぶい橙7.5YR7/4 断）浅黄橙7.5YR8/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
434	SK10	磁器 染付	小杯 筒形	3.8	3.0	2.6	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）竹文	クリ底。内面ロクロ目。透明釉は貫入が入る。	肥前産
435	SK11 上層	土師質 土器	人形	全長 4.0	全幅 1.8	—	—	外）浅黄橙10YR8/3 断）浅黄橙10YR8/3	馬と童子	型押し成形貼り合わせ。中実。底部に穿孔あり。	
436	SK12 上層	白磁	小杯 胴紐形	5.8	3.1	2.6	—	外）白 断）白		外面中位に凸状の線が巡る。透明の釉。	関西系

Tab.16 遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
				口径	器高	底径	最大径				
437	SK12	陶器	中碗	—	—	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	外面緩やかなロクロ目。灰白色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	尾戸窯
438	SK12 上層	磁器 染付	皿又は鉢	—	—	—	—	外）白 断）白	外）文様不明 外底）「富貴長春」銘	呉須は青色。	肥前産　有田 18世紀 高台内に「富貴長春」銘あり。
439	SK12 上層	陶器	甕	15.0	—	—	—	外）黒褐7.5YR3/2 断）黄灰2.5Y6/1	鉄釉	内面上半施釉。鉄釉は黒褐色。	在地か
440	SK12 上層	陶器	急須	—	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	外）櫛目灰釉	把手を貼付。内面無釉。灰釉は灰オリーブ色～灰白色に発色。	
442	SK13	磁器 染付	小皿 丸形	14.5	2.8	6.0	—	外）灰白7.5Y7/1 断）白	内）帯花文	高台に灰白色の粗い砂が付着。高台施釉。透明釉は僅かに青色を帯びる。釉は被熱し変質。	肥前産 1610～1630年代 二次被熱。
443	SK13	陶器	中碗 天目形	10.0	—	—	—	外）黒10YR1.7/1 断）灰白2.5Y7/1	鉄釉	釉は黒色～黒褐色に発色。	瀬戸・美濃産
444	SK13	陶器	小皿 稜花形	11.0	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y7/1	灰釉	ひだ皿。オリーブ黄色を帯びる透明の釉で1～2mm大の貫入が入る。	瀬戸・美濃産 18世紀
445	SK13	陶器	皿又は鉢	—	—	—	—	外）黒褐7.5YR3/2 内）オリーブ褐2.5Y4/4 断）にぶい赤褐2.5YR5/3	刷毛目二彩手	口縁部折縁形。外面ロクロ目顕著。外面下半無釉。灰釉はオリーブ褐色に発色。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
446	SK13	磁器 染付	猪口	—	—	—	—	外）白 断）白	外）渦・二重圏線	内面無釉。呉須は青灰色。	肥前産 1630～1640年代
447	SK13	磁器 染付	鉢	—	—	6.0	—	外）白 断）白	内）文様不明高台 外）二重圏線高台 内）圏線		肥前産
448	SK13	磁器 染付	水滴	—	3.5	—	—	外）白 断）白	外）型作りによる陽刻文様	型押し成形。底部貼り合わせ。内面ユビナデ。内底布目、ハケ。外底施釉。内面と外面の一側面無釉。	肥前産
449	SK13	土師質土器	焜炉	—	—	—	—	外）にぶい黄橙10YR6/4 断）にぶい黄橙10YR7/3		外面ナデ。内面ヨコナデ、縦方向の櫛目。	関西系
450	SK13	土師質土器	小皿	10.5	1.9	5.2	—	外）灰白10YR8/2 断）灰白10YR8/2		内面ナデ。外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
451	SK13	土師質土器	杯又は小皿	—	—	5.0	—	外）にぶい橙7.5YR7/4 断）にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
453	SK14	陶器	小皿	—	—	5.0	—	外）にぶい橙7.5YR6/4　内）灰7.5Y6/1 断）にぶい橙7.5YR6/4	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面ロクロ目。外面下半無釉。灰釉は灰色を帯びる。内底に胎土目痕。	肥前産 1590～1610年代 胎土目。
454	SK15・SK16	陶器	小碗 端反形	9.0	5.5	3.4	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	畳付外側に面取り。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で2mm前後の貫入が入る。	関西系 19世紀
455	SK15	陶器	皿	—	—	—	—	外）オリーブ褐2.5Y4/4 断）灰白10YR7/1	刷毛目	口縁部溝縁形。	肥前産 18世紀前半 漆継痕あり。
457	SK15 下層	土師質土器	人形	全長5.1	全厚2.0	全幅3.5	—	外）にぶい黄橙10YR7/2 断）にぶい黄橙10YR7/2	鳥	手捏ね成形。外面ナデ。	
458	SK16 下層	磁器 染付	中碗 広東形	11.0	—	—	—	外）灰白5Y8/1 断）白	外）草花文 内）二重圏線		肥前産 1780～1810年代
459	SK16 床	磁器 色絵	小皿 折縁形	9.0	—	—	—	外）白 断）白	口錆 内）口縁部に上絵付（赤・黄）による文様帯	薄手の作り。色絵顔料は殆ど剥離する。	肥前産　有田 1640～1660年代
460	SK16 下層	白磁	紅皿 菊花形	5.0	1.3	1.4	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）型作りによる菊弁文	型押し成形。外面下半無釉。	肥前産 18世紀末～幕末
461	SK16 床	磁器 染付	中瓶 鶴首逆瓶形	—	—	9.4	17.0	外）灰白10Y8/1 断）灰白10Y8/1	外）草花文	内面ロクロ目顕著。内面無釉。呉須は暗青灰色。	肥前産　波佐見 18世紀後半
462	SK16 下層	陶器	蓋物	11.0	—	—	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白5Y8/1	外）鉄絵	端部無釉。灰釉は灰色を帯び1mm前後の貫入が入る。	関西系
463	SK16 下層	土師質土器	火入れか	11.6	—	—	—	外）にぶい橙7.5YR7/4 断）にぶい橙7.5YR7/4		外面ナデ・ミガキ。内面回転ナデ。灰白色の胎土に橙色土を練り込む。	
464	SK17	陶器	皿 変形形	—	—	—	—	外）灰白7.5Y7/1 断）淡黄2.5Y8/3		型作り。脚は貼付。オリーブ灰色を帯びる光沢の強い透明の釉で2～3mm大の貫入が入る。	

Tab.17　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
				口径	器高	底径	最大径				
465	SK17	土師質土器	焙烙	—	—	—	—	外）黒褐7.5YR3/1 内）灰褐7.5YR4/2 断）にぶい橙7.5YR6/4		外面口縁部ユビオサエ後ヨコナデ、体部ヨコナデ。粘土帯接合部に連続したユビオサエ。内面ヨコナデ。	腹縁両本黒 外面に煤。
466	SK18	白磁	紅皿菊花形	4.7	1.5	1.4	—	外）白 断）白	外）型作りによる菊弁文	型押し成形。外面下半無釉。	肥前産 18世紀後半
467	SK18	陶器	蓋物半筒形	10.6	—	—	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉 外）呉須と鉄鉛による草花文。花は呉須、葉と蓋は鉄鉛で描き分ける。	内面施釉。口縁端部無釉。灰釉は淡黄色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	
468	SK18	土師質土器	焜炉	21.0	—	—	—	外）にぶい黄橙10YR6/3 断）にぶい黄橙10YR6/3		粘土紐積み上げ成形。外面ヨコナデ、ミガキ、内面ヨコナデ。突起は接合部で剥離。	関西系 口縁部内面に強い煤。
469	SK18床	磁器染付	小瓶	—	—	7.0	—	外）灰白10Y7/1 断）灰白N8/	外）草花文	内面下半無釉。呉須は暗青灰色。	
470	SK18	陶器	灯明受皿	—	—	—	—	外）褐灰7.5YR5/1 内）灰赤2.5YR5/2 断）褐灰7.5YR5/1	鉄錆	外面回転ケズリ。外面下半無釉。	口縁部に灯芯油痕。
471	SK18	土師質土器	人形	—	—	—	—	外）にぶい橙7.5YR7/4 断）にぶい橙7.5YR7/4	天神	型作り貼り合わせ。中空。内面ユビオサエ、ユビナデ。	471・472同一個体。
472	SK18	土師質土器	人形	—	—	—	—	外）にぶい橙7.5YR7/4 断）にぶい橙7.5YR7/4		型作り貼り合わせ。中空。内面ユビオサエ、ユビナデ。外面チヂレ目。	471・472同一個体。
473	SK19	磁器染付	中碗端反形	11.8	6.5	4.8	—	外）白 断）白	外）宝文・網目文・帯線 内）多重圏線 見込み）束文 高台内）角に茶	呉須は淡い青色。内底に目痕3足。	能茶山窯 1820～幕末（在銘資料は1836年以降） 高台内「茶」銘。
474	SK19	磁器染付	中碗広束形	11.0	6.9	6.0	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	外）山水文・圏線 口縁内）二重圏線 見込み）水に岩か 高台外）二重圏線	内底に目痕あり。	能茶山窯 1820～幕末（在銘資料は1836年以降） 高台内に「サ」銘。
475	SK19	磁器染付	中碗広束形	—	—	6.0	—	外）白 断）白	見込み）宝珠か・圏線	目痕なし。	肥前産又は肥前系 1780年代～幕末
476	SK19	磁器染付	小碗端反形	8.4	4.4	3.6	—	外）白 断）白	外）草文 内）連続唐草文 見込み）□□□製	蛇の目高台。畳付外側に面取り。呉須は青色。	関西系 19世紀
477	SK19	磁器染付	蓋物腰張形	10.2	5.5	5.6	—	外）灰白2.5GY8/1 断）白	外）多重圏線・四方に草花文を巡らす 高台外）二重圏線	内底に目痕3足。二次被熱により釉は変質。	能茶山窯 1820～幕末 （在銘資料は1836年以降） 高台内に「茶」銘。
478	SK19	磁器染付	小碗丸形	8.6	5.7	3.4	—	外）白 断）白	外）格子文・蓮弁文 見込み）火焔宝珠 高台外）二重圏線	呉須は藍色に発色。	肥前産 18世紀末～幕末
479	SK19	磁器染付	碗蓋	笠部径10.2	器高2.8	摘み径5.8	—	外）灰白2.5GY8/1 断）灰白2.5GY8/1	外）縞 摘内）銘 摘み外）二重圏線 口縁内）二重圏線 見込み）圏線・不明		
480	SK19	磁器染付	碗蓋	笠部径8.8	器高2.5	摘み径3.2	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）唐草文 摘み外）二重圏線 摘み内）□□年製 口縁内）四方襷 見込み）松竹梅円形文		肥前系
481	SK19	磁器染付	蓋物蓋	笠部径9.0	器高2.4	摘み径3.0	かえり径7.8	外）白 断）白	外）梅文・二重圏線	内面施釉。かえり無釉。	肥前産
482	SK19	磁器染付	小杯端反形	6.2	2.9	2.6	—	外）白 断）白	内）竹文・銘	薄手の作り。	肥前系 19世紀前半～中葉
483	SK19	磁器色絵染付	蓋物腰張形	7.9	4.3	3.6	—	外）白 断）白	外）呉須と上絵付（赤・剥離し不明）による唐草・窓に草花文	唐草は白抜きで表し、地を赤で埋める。	肥前産 18世紀末～19世紀前半

Tab.18 遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
				口径	器高	底径	最大径				
484	SK19	青磁	皿 端反形	13.6	2.8	7.4	—	外）オリーブ灰 2.5GY6/1 断）灰白N8/	内）陽刻による花卉文	口縁部輪花形。蛇の目高台。	肥前産　有田 1660～1670年代
485	SK19	白磁	中皿 折縁形	21.6	2.9	8.6	—	外）白 断）白	透明釉	口縁部折縁形。クリ底。透明釉は僅かに青色を帯びる。	肥前産 1630～1640年代
486	SK19	磁器染付	仏花瓶	—	—	5.2	—	外）白 断）白	外）草花文	双耳を貼付。内面無釉。	肥前　波佐見系 18世紀後半～19世紀初頭
487	SK19	磁器染付	植木鉢	—	—	9.4	—	外）白 断）白	外）山水文	底部中央に1.5cmの円孔あり。高台の双方にアーチ状の抉り。畳付両側に面取り。内面と高台無釉。	肥前系
488	SK19	陶器	中碗 丸形	11.8	7.9	5.0	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	畳付の両側を面取り。高台施釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
489	SK19	陶器	中碗 丸形	12.0	—	—	—	外）灰白7.5Y7/2 断）灰白7.5Y8/1	灰釉	内面ロクロ目。外面工具による荒いナデ。底部無釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	尾戸窯か
490	SK19	陶器	小皿	13.6	4.1	4.8	—	外）にぶい褐 7.5YR6/3 断）浅黄橙10YR8/3	灰釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。内外面ロクロ目。底部無釉。にぶい褐色の釉。	肥前系か
491	SK19	陶器	中皿	20.0	—	—	—	外）浅黄2.5Y7/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	口縁部溝縁形。浅黄色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	
492	SK19	陶器	小杯 輪形	—	—	3.0	—	外）浅黄2.5Y7/3 断）淡黄2.5Y8/3	外）呉須による梅文 灰釉	浅黄色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	
493	SK19	陶器	土瓶蓋	笠部径 7.8	1.8	3.6	—	外）にぶい赤褐 5YR5/3 内）赤黒10R2/1 断）灰N4/	鉄釉	摘みを貼付。外底回転糸切り。外面無釉。赤黒色の釉。	尾戸窯又は能茶山窯
494	SK19	陶器	植木鉢か	19.0	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y7/1	灰釉	内外面緩やかなロクロ目。内面下位無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	
495	SK19	陶器	壺	—	—	10.0	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	内面ロクロ目顕著。体部内面無釉。高台施釉。灰黄色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	
496	SK19	陶器	火鉢か	15.0	—	—	—	外）浅黄2.5Y7/4 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	内面ロクロ目。内面無釉。浅黄色を帯びる半透明の釉で1～2mm大の貫入が入る。	
497	SK19	陶器	甕	28.0	—	—	—	外）オリーブ黄5Y6/3 断）灰白2.5Y7/1	外）上位に丸彫りによる檜垣文 灰釉	口縁部玉縁状。内面無釉。オリーブ黄色を帯びる半透明の釉で2mm前後の貫入が入る。釉が厚く掛かる部分は白色に発色。	在地か
498	SK19	陶器	小瓶	3.5	—	—	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）黄灰2.5Y6/1	灰釉	内面ロクロ目顕著。体部内面無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	在地か
499	SD1 上層	陶胎染付	中碗 腰張形	10.8	8.9	5.6	—	外）灰白10Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	外）山水文・二重圏線	呉須は暗青灰色。透明釉は2～4mm大の貫入が入る。	肥前系 18世紀前半
500	SD1	陶胎染付	中碗	10.6	—	—	—	外）灰白7.5Y6/1 断）灰7.5Y6/1	外）唐草文・二重圏線	呉須は暗青灰色。透明釉は2mm前後の貫入が入る。	肥前産 18世紀前半
501	SD1 上層	磁器染付	中碗 端反形	10.0	5.3	4.4	—	外）灰白2.5GY8/1 断）白	外）草花文・山水文 内）四方襷・見込みに二重圏線と墨弾きによる五弁花 高台内）渦福	呉須は藍色に発色。	肥前産
502	SD1 上層	磁器染付	猪口 輪形	8.8	6.1	5.4	—	外）白 断）白	外）草花文・竹文 高台内）渦福・圏線		肥前産 18世紀
503	SD1	磁器染付	碗蓋	笠部径 10.0	器高 3.2	摘み径 4.0	—	外）白 断）白	外）帯線・不明 内）帯線 見込み）宝文か	透明釉は貫入が入る。	肥前産又は肥前系
504	SD1 下層	磁器染付	中碗 丸形	—	—	—	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	内）圏線 外）圏線		肥前系
505	SD1	白磁	中碗	—	—	4.4	—	外）白 断）白			内面は被熱し釉が変質。
506	SD1	磁器染付	皿	—	—	6.8	—	外）白 断）白	内）芙蓉手 外）不明		肥前産 1650～1660年代
507	SD1	青花	碗	—	—	4.6	—	外）白 断）白	内）二重圏線・文様不明	透明釉は白色を帯びる。	中国産漳州窯系 17世紀前半
508	SD1 上層	青磁	碗	—	—	—	—	外）明緑灰7.5GY7/1 断）灰白2.5Y8/1	青磁釉	口縁端部と口縁部内面無釉。体部内面施釉。	釉は被熱し変質。
509	SD1	磁器染付	碗	—	—	7.0	—	外）白 断）灰白N8/	高台外）櫛歯文 高台内）不明	透明釉は灰白色を帯びる。	肥前産 1630～1640年代
510	SD1	陶器	中碗 腰折形	10.0	5.4	4.4	—	外）淡黄5Y8/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	灰釉は淡黄色を帯び2mm前後の貫入が入る。	瀬戸・美濃か

Tab.19　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	最大径	色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
511	SD1下層	陶器	中碗	12.8	—	—	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	内外面緩やかなロクロ目。	尾戸窯
512	SD1	陶器	中碗丸形	12.0	—	—	—	外）浅黄2.5Y7/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	外面緩やかなロクロ目。灰釉は浅黄色を帯び0.5～1㎜大の貫入が入る。	肥前系
513	SD1	陶器	中碗	—	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	内面緩やかなロクロ目。外面荒いコテ痕。灰オリーブ色を帯びる透明の釉で光沢が強い。	尾戸窯
514	SD1	陶器色絵	小碗半球形	9.2	—	—	—	外）灰白5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2	外）上絵付（金・青・緑）による若松・竹	灰釉は灰白色を帯び2㎜前後の貫入が入る。	京焼
515	SD1	陶器	中碗	—	—	4.8	—	外）灰白2.5Y8/2 断）淡黄2.5Y8/3	灰釉	灰釉は焼成不良気味で白濁。	尾戸窯
516	SD1上層	陶器	小皿	—	—	4.4	—	外）灰白2.5Y7/1 断）にぶい橙7.5YR7/4	灰釉	唐津系灰釉陶器。内底に砂目。外面ロクロ目。外面下半無釉。灰釉は焼成不良気味で白濁。	肥前産 1610～1630年代 砂目。
517	SD1	陶器	鉢丸形	13.0	—	—	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	灰釉は焼成不良気味で白濁。	尾戸窯
518	SD1下層	陶器	擂鉢	—	—	—	—	外）暗灰黄2.5Y4/2 断）にぶい赤褐5YR5/3	灰釉	口縁部下線状。口縁端部無釉。	
519	SD1	陶器	香炉又は火入れ	10.6	—	—	—	外）黒褐10YR3/2 断）褐灰10YR5/1	刷毛目	外面白化粧土刷毛目。内面無釉。	肥前窯 17世紀後半～18世紀前半
520	SD1	陶器	壺又は甕	—	—	—	—	外）黒褐10YR3/1 断）灰白5Y7/1	鉄釉	内面緩やかなロクロ目。外底に凹凸。内面と外底施釉。	在地か
521	SD1上層	陶器	蓋物	7.6	10.9	7.1	—	外）浅黄2.5Y7/3 断）淡黄2.5Y8/3	外）鉄絵と呉須による草花文を双方に描く 灰釉	外面上位に花状の双耳を貼付。三足を貼付。内面ロクロ目。外底ケズリ後ナデ。浅黄色を帯びる透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。	京都系 外底に墨書。
522	SD1	陶器	行平	17.0	—	—	—	外）暗赤褐5YR3/3 断）にぶい橙2.5YR6/4	外）鉄釉・飛鉋 内）鉄釉	体部内外面鉄釉刷毛塗りの後、外面に飛鉋。受け部無釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
523	SD1上層	陶器	小皿	12.2	—	—	—	外）灰白2.5Y7/1 断）にぶい橙7.5YR7/4	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部溝縁形。内外面ロクロ目。灰釉は焼成不良気味で白濁。	肥前窯1610～1630年代
524	SD1	陶器	ミニチュア	—	—	2.8	—	外）暗褐7.5YR3/3 断）灰黄2.5Y7/2	鉄釉	三足を貼付。内面施釉。外面下半無釉。	
525	SD1	陶器	銚子か	12.8	—	—	—	外）にぶい赤褐2.5YR4/3 断）灰白2.5Y8/2	鉄釉	内面緩やかなロクロ目。内面施釉。受け部無釉。にぶい赤褐色の釉。	
526	SD1	陶器	火鉢	—	—	13.0	—	外）緑 断）灰白2.5Y8/2	外）緑釉 内・外底）鉄錆を刷毛塗り	底部外面に陰刻による雷文帯。外底に貫通しない穿孔あり。	瀬戸・美濃産 18～19世紀
527	SD1	土師質土器	小皿	7.6	1.5	4.0	—	外）浅黄橙10YR8/4 断）浅黄橙10YR8/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
528	SD1	土師質土器	小皿	9.6	1.2	5.2	—	外）浅黄橙10YR8/3 断）浅黄橙10YR8/3		内外面回転ナデ。	
529	SD1	土師質土器	小皿	7.8	1.1	3.8	—	外）にぶい黄橙10YR7/3 断）にぶい黄橙10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
530	SD1	白土器	小皿	10.2	—	—	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	文様不明	内外面ヨコナデ。	尾戸窯
531	SD1	土師質土器	五徳か	21.0	—	—	—	外）にぶい橙7.5YR6/4 断）にぶい橙7.5YR6/4		粘土紐積み上げ成形。外面回転ナデ。	関西系 口縁部内面に強い煤。
532	SD1	施釉土師質土器	ミニチュア	2.8	—	—	4.0	外）灰白10YR8/2 断）灰白10YR8/2	釜形 黄緑・黄の低火度釉	上半型作り。外面上半に陽刻文様。内面と外面下半ナデ。口縁部内面と外底無釉。外面上半に黄緑色、内面に黄色の低火度釉。	
533	SD1	施釉土師質土器	人形	—	—	—	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2	緑・橙の低火度釉	男子像。中実。外面ユビオサエ・ユビナデ。緑・橙の低火度釉を部分的に施釉。	
535	SD1	瓦質土器	火鉢	—	10.8	—	—	外）黒 断）灰黄褐10YR6/2		たたら作り貼り合わせ。外面に凹凸面。内面ヨコナデ。脚は貼付。	
536	SD2下層	陶器	甕	10.8	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	双耳は欠損。口縁端部と内面無釉。	尾戸窯か
537	SD2下層	陶器	擂鉢	23.4	—	—	—	外）橙2.5YR6/6 断）橙2.5YR6/6		内面施釉。端部無釉。釉は焼成不良で白濁。	
538	SD2上層	陶器	小瓶	2.8	—	—	—	外）にぶい赤褐2.5YR4/3 断）灰N7/	鉄釉	内外面緩やかなロクロ目。	尾戸窯又は能茶山窯
539	SD2上層	陶器	灯明受皿	10.4	1.3	5.5	—	外）灰N5/1 断）灰N5/1	焼締め	外面回転ナデ。外底回転ケズリ。	尾戸窯又は能茶山窯か

Tab.20 遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）口径	器高	底径	最大径	色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
540	SD2 下層	土師質土器	小皿	8.0	1.4	4.0	—	外）灰白10YR8/2 断）灰白10YR8/2		内外面回転ナデ。内底ロクロ目。外底回転糸切り。	
541	SD2	土師質土器	小皿	9.6	1.9	6.0	—	外）浅黄橙10YR8/3 断）浅黄橙18YR8/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
542	SD2 上層	土師質土器	小皿	9.8	1.6	4.8	—	外）浅黄橙10YR8/3 断）浅黄橙18YR8/3		内外面回転ナデ。内底ロクロ目。外底回転糸切り。	
543	SD2	瓦質土器	不明	—	—	—	—	外）灰7.5Y4/1 断）灰白5Y7/1	家形	外面ナデ。	
544	SD2 上層	施釉土師質土器	人形	—	—	—	—	外）黄褐2.5Y5/6 断）浅黄橙10YR8/3	人物 黄褐色の低火度釉	型作り貼り合わせ。中空。内面ユビオサエ、ユビナデ。釉は焼成不良気味。	
545	SD2 下層	土師質土器	人形	—	—	—	—	外）浅黄橙10YR8/3 断）浅黄橙10YR8/3	人物	型作り貼り合わせ。中空。内面ユビオサエ、ユビナデ。	
546	SD2 上層	施釉土師質土器	鳩笛	全長 6.4	全高 2.2	全幅 1.7	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/2	薄緑の低火度釉	中空。背面と尾の部分に穿孔あり。緑色を帯びる半透明の釉を上面に施釉。	
547	SD3 上層	磁器染付	中碗	9.8	—	—	—	外）白 断）白	外）若松 内）雷文帯	呉須は青色。	肥前産
548	SD3 上層	磁器染付	中碗広東形	11.0	—	—	—	外）白 断）白	外）鳥		肥前産 1780～1810年代
549	SD3 上層	磁器染付	蓋物	11.4	—	—	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）花文・二重圏線	口縁端部無釉。呉須は青灰色。	肥前産
550	SD3 床	磁器染付	小皿	—	—	8.4	—	外）白 断）白	外）如意頭連続唐草文 内）花唐草文・手描きによる五弁花 高台内）圏線・角枠内「福」銘	高台内にハリ支え痕あり。	肥前産　有田 1680～1690年代
551	SD3 上層	陶器	小皿	—	—	4.4	—	外）灰黄褐10YR4/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	外底回転糸切り。外面下半無釉。灰釉は灰黄褐色に発色し部分的に白濁。内底に灰白色の不整形の砂目。外底に灰白色の粗い砂が付着。	肥前系 17世紀前半
552	SD3 下層	陶器	行平	17.5	—	—	—	外）暗褐7.5YR3/4 断）浅黄橙10YR8/3	外）飛鉋・鉄錆 内）鉄釉	外面鉄錆を刷毛塗りの後飛鉋。内面施釉。かえり無釉。	能茶山窯か 1820年代～幕末
553	SD3 上層	陶器	土瓶蓋	笠部径 12.5	器高 2.5	2.5	—	外）にぶい橙7.5YR6/4 断）黒褐5YR2/1	鉄釉	摘みを貼付。外面回転ケズリ。外面無釉。黒褐色の釉。外底の三方に胎土目痕。	
554	SD3 下層	陶器	土瓶蓋	笠部径 14.0	—	—	かえり径 10.8	外）暗オリーブ7.5Y4/3 断）浅黄橙10YR8/4	灰釉	天井部周縁に一条沈線。白化粧土イッチン掛けによる文様。かえりと内面無釉。暗オリーブ色の釉。	在地か
555	SD3	土師質土器	小皿	—	—	—	—	外）灰白10YR8/2 断）灰白10YR8/2		内外面回転ナデ。	
556	SD3 下層	陶器	不明	—	—	—	—	外）オリーブ褐2.5Y4/3 断）褐灰7.5YR5/1		オリーブ褐色の半透明の釉。口縁部内外面に灰白色の釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
557	SD3 上層	陶器	蓋	13.6	—	—	—	外）灰黄2.5Y6/2 断）灰黄2.5Y6/2	焼締め	たたら作りの後、型とユビオサエで成形。内外面ユビオサエ、内面布目。	19世紀中葉か
558	SD3	陶器	土瓶又は急須	—	—	—	—	外）にぶい黄褐10YR4/3 断）にぶい橙7.5YR7/4	焼締め	体部内外面ユビオサエ。注口部外面ヘラナデ。	19世紀中葉か
559	SD3 上層	陶器	甕	27.6	—	—	—	外）にぶい赤褐5YR4/3 断）黄灰2.5Y6/1	鉄釉	にぶい赤褐色の釉で濃く掛かった部分は黒色に発色。	能茶山窯 1820年代～幕末
560	SD3 上層	瓦質土器	火鉢箱形	—	—	—	—	外）灰5Y4/1 断）灰N6/		接合部に強いユビナデ。外面イタナデ。	
564	SD4 上層	磁器染付	中碗端反形	9.8	5.1	3.8	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）花唐草文・多重圏線 内）多重圏線 見込み）蝙蝠文・圏線		能茶山窯 1820～幕末 （在銘資料は1836年以降） 高台内「サ」銘。
565	SD4 上層	磁器染付	中碗広東形	10.8	6.7	6.4	—	外）灰白7.5Y8/1 断）白	外）矢羽根文 見込み）不明	呉須は暗青灰色。	肥前産 1780年代～1810年代
566	SD4 下層	磁器染付	小杯	6.2	—	—	—	外）白 断）白	外）笹文	呉須は青色。	肥前系
567	SD4 下層	磁器染付	蓋物	7.6	3.3	4.0	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白5Y8/1	外）草花文・雪輪	蛇の目高台。透明釉は灰白色を帯びる。呉須は暗緑灰色。	肥前産 1690年代～18世紀前半
568	SD4 上層	磁器染付	小皿	—	—	6.0	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	内）菊花		肥前系　有田 1610～1630年代
569	SD4 下層	磁器染付	小皿	13.2	3.6	4.4	—	外）灰白10Y7/1 断）灰白N8/	内）草文・二重圏線	見込み蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部分に灰白色の砂が付る。高台無釉。	肥前系か

Tab.21　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
				口径	器高	底径	最大径				
570	SD4 上層	磁器	水滴	—	—	—	—	外）白 断）白	鉄銹・呉須	唐子。型作り貼り合わせ。内面布目。	肥前産　平戸か 19世紀前半～中葉
571	SD4 上層	磁器	水滴						鉄銹	型作り貼り合わせ。体部に穿孔あり。内面ユビオサエ。	
572	SD4 下層	陶器	擂鉢	30.4	—	—	—	外）にぶい赤褐 5YR5/4 断）にぶい赤褐 5YR5/4	焼締	口縁部外面凹線。体部外面ヨコナデ、内面櫛目。	備前 17世紀
573	SD4 下層	陶器	擂鉢	—	—	—	—	外）褐灰 5YR4/1 断）褐灰 10YR5/1	焼締	口縁部外面凹線、内面回転ナデ後櫛目。体部外面ヨコナデ。	備前 18世紀
574	SD4	陶器	擂鉢	—	—	15.0	—	外）にぶい赤褐 2.5YR4/3 断）褐灰 10YR5/1	焼締	内底櫛目。外面横方向のイタナデ。外底に凹凸。	備前 18世紀
575	SD4 下層	陶器	擂鉢	—	—	—	—	外）にぶい赤褐 5YR4/3 断）にぶい赤褐 5YR4/3	焼締	口縁部外面凹線、内面櫛目後回転ナデ。体部外面ヨコナデ、内面櫛目。	備前 18世紀
576	SD4 下層	陶器	土瓶又は急須	8.0	—	—	—	外）灰白 5Y8/2 断）褐灰 10YR5/1	外）呉須による文様・二重圏線	白化粧土施釉の後、透明釉を施釉。	
577	SD4 床	陶器	不明	—	—	10.4	—	外）灰白 7.5Y8/1 断）灰白 2.5Y8/1	外）鉄銹による型紙刷りの文様 灰釉	内面強いロクロ目。高台外側削り後ナデ。内面施釉。高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉で1～2㎜大の貫入が入る。	
578	SD4 下層	陶器	不明	21.4	—	—	—	外）黒褐 7.5YR3/2 断）灰白 2.5Y7/1	鉄釉	口縁は内側に肥厚させる。外面ごく緩やかなロクロ目。鉄釉は黒褐色に発色。	
579	SD4 下層	陶器	擂鉢	—	—	9.6	—	外）黒褐 5YR3/1 断）赤褐 10R5/4	鉄釉	内面ロクロ目顕著。高台内は鋭角的に削り出す。鉄釉は黒褐色に発色。	
580	SD4 下層	陶器	鍋	—	—	10.4	—	外）暗褐 7.5YR3/3 断）にぶい橙 7.5YR6/4	鉄釉	三足を貼付。内面施釉。外底無釉。鉄釉は暗褐色に発色。	能茶山窯 1820年代～幕末
581	SD4 上層・撹乱9	陶器	甕	37.0	—	—	—	外）暗褐 7.5YR3/3 断）灰黄 2.5Y6/2	鉄釉	体部外面上位に櫛目と櫛描波状文。内面と頸部外面に強いロクロ目。内面施釉。暗褐色の釉。	
582	SD4 上層	陶器	灯明受皿	10.6	—	—	—	外）灰白 5Y7/2 断）灰白 5Y8/1	灰釉	外面無釉。灰釉は灰オリーブ色を帯び2㎜前後の貫入が入る。内底に目痕。	関西系 19世紀 口縁部外面に灯芯油痕。
583	SD4	土師質土器	小皿	8.8	1.9	5.0	—	外）にぶい橙 7.5YR7/4 断）にぶい橙 7.5YR7/4		内面ロクロ目。外底回転糸切り。	
584	SD4	土師質土器	焜炉類か	26.2	—	—	—	外）橙 7.5YR7/6 断）にぶい黄橙 10YR7/3		粘土紐積み上げ成形。外面ナデ、内面ヨコナデ。内外面に粘土紐接合痕明瞭。	
589	SD5	磁器染付	中碗丸形	12.4	—	—	—	外）明緑灰 7.5GY8/1 断）白	外）不明・圏線	呉須は淡い青色。	肥前産
590	SD5 下層	磁器染付	中碗	—	—	—	—	外）白 断）白	外）丸文・寿字文	呉須は藍色。釉は被熱し変質。	肥前産 1630～1650年代 二次被熱。
591	SD5	磁器染付	猪口	7.6	—	—	—	外）灰白 10Y8/1 断）灰白 N8/	外）草花文		肥前産 18世紀
592	SD5	陶胎染付	中碗	—	—	5.6	—	外）灰白 7.5Y7/1 断）黄灰 2.5Y5/1	灰釉 外）鉄絵 高台外）圏線	高台施釉。灰釉は灰白色で2㎜前後の貫入が入る。	肥前産 18世紀前半
593	SD5	磁器色絵	皿	—	—	8.0	—	外）灰白 10Y8/1 断）灰白 N7/	内）上絵付（赤）による「魁」（さきがけ）字文	高台内無釉。高台外側まで施釉。灰白色の白濁した釉。	中国産 漳州窯系 17世紀前半
594	SD5 下層	磁器染付	小杯端形	4.0	—	—	—	外）白 断）白	外）草文・二重圏線	高台施釉。呉須は青色。	肥前産 18世紀前半
595	SD5 下層	白磁	小杯	—	—	3.0	—	外）灰白 N8/ 断）白		高台施釉。	肥前産
596	SD5	磁器染付	中皿	—	—	14.6	—	外）白 断）白	内）唐草文 外）連続唐草文 高台内）圏線 高台外）二重圏線		肥前産
597	SD5	磁器染付	中皿	—	—	12.8	—	外）白 断）白	内）瓜 外）圏線	呉須は青色～淡青色。二次被熱により透明釉は変質。	肥前産 17世紀末～18世紀前半二次被熱。
598	SD5	磁器染付	小皿丸形	13.4	3.0	5.8	—	外）灰白 10Y7/1 断）灰白 N8/	内）草文	高台施釉。呉須は暗緑灰色。	肥前産 1640～1650年代
599	SD5	磁器染付	大皿	—	—	17.0	—	外）白 断）白	内）山水文高台 外）二重圏線 高台内）圏線	呉須は青色。高台内にハリ支え痕あり。	肥前産　有田 1655～1670年代

Tab.22　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
				口径	器高	底径	最大径				
600	SD5	磁器染付	皿	—	—	—	—	外）白 断）白	外）不明 内）墨弾きによる文様・圏線		肥前産 釉は被熱し変質。
601	SD5下層	磁器青磁染付	碗蓋	10.0	—	—	—	外）明緑灰7.5GY7/1 断）灰白N8/	内）四方襷	外面に明緑灰色の青磁釉。	肥前産 18世紀後半
602	SD5	磁器染付	蓋物腰張形	14.0	—	—	—	外）白 断）白	外）格子文・亀甲文	内面施釉、口縁部内面無釉。呉須は肝色。	肥前産 1780～1840年代
603	SD5上層	磁器染付	蓋物	9.2	—	—	—	外）白 断）白	外）草花文か・二重圏線	内面施釉、口縁端部と内面無釉。透明釉は貫入が入る。	肥前産　有田 1660～1700年代
604	SD5下層	白磁	紅皿菊花形	4.6	1.4	1.2	—	外）白 断）白		型押し成形による菊花。	肥前産 18世紀後半
605	SD5上層	磁器染付	水滴箱形	全長—	全高5.3	全幅5.3	—	外）白 断）白	円孔周辺に型作りによる菊花。	上面中央に径4mmの円孔。外底布目、内面ユビナデ。外面施釉、内面と外面の一側面のみが無釉。	肥前産
606	SD5上層	磁器染付	壺	8.6	—	—	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	外）渦・不明	内面無釉。	肥前産 1630～1640年代
607	SD5上層	磁器染付	瓶	—	—	7.0	—	外）白 断）白	高台外）圏線	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前産
608	SD5下層	磁器染付	水滴又は人形	—	—	—	—	外）白 断）白		型作り貼り合わせ。内面ユビオサエ・ユビナデ。外底布目。	肥前産
609	SD5下層	陶器	中碗端反形	12.0	—	—	—	外）灰白5Y8/1 断）灰白5Y8/1	灰釉	1mm前後の貫入が入る透明の釉。	釉は被熱し変質。
610	SD5	陶器	中碗	—	—	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白5Y7/1	灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	尾戸窯産
611	SD5	陶器	中碗	—	—	5.0	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白5Y7/1	灰釉	高台内は曲線的に削り出す。畳付外側にナデ。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で0.5～1mm大の貫入が入る。内底に目痕あり。	尾戸窯
612	SD5	陶器	中碗	—	—	4.6	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	高台内は鋭角的に削り出す。高台無釉。灰釉は0.5～1mm大の貫入が入る。	京都系
613	SD5	陶器	中碗	—	—	4.6	—	外）黒2.5Y2/1 断）褐灰10YR6/1	鉄釉	高台無釉。高台脇に抉り。	能茶山窯か
614	SD5	陶器	中碗	—	—	5.4	—	外）にぶい黄橙10YR7/3 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	外面緩やかなロクロ目。高台施釉。浅黄色を帯びる半透明の釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
615	SD5下層	陶器	鉢	15.6	—	—	—	外）褐7.5YR4/3 断）灰白5Y7/1	鉄釉	内外面ロクロ目顕著。鉄釉は褐色。	尾戸窯又は能茶山窯
616	SD5	陶器	碗	—	—	8.0	—	外）灰白5Y8/2 内）浅黄5Y7/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	高台内は曲線的に削り出す。畳付内側はナデにより丸みをもつ。高台無釉。浅黄色を帯びる光沢の強い透明の釉で2mm前後の貫入が入る。	
617	SD5	陶器	小皿	—	—	5.2	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。内底に砂目。高台無釉。灰釉は灰オリーブ色を帯びる。	肥前産 1610～1630年代 砂目痕。
618	SD5	陶器	小皿	—	—	4.2	—	外）にぶい黄橙10YR5/3　内）灰オリーブ5Y6/2 断）灰褐7.5YR5/2	灰釉	見込み蛇の目釉剥ぎするが部分的に釉が残る。釉剥ぎ部分に砂が付着。クリ底。灰釉は焼成不良気味で白濁。	肥前産
619	SD5床	陶器	小皿	12.2	3.2	4.4	—	外）灰白5Y7/2　内）緑灰5G5/1 断）灰白2.5Y7/1	銅緑釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部に砂目。外面下半無釉。内面は竹緑色、外面は灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	肥前産　内野山 17世紀後半
620	SD5	陶器	擂鉢	—	—	—	—	外）灰褐5YR4/2 断）灰白2.5Y8/2	鉄錆	内外面に鉄錆。内面擂目。内外面ロクロ目。	瀬戸 18世紀前半
621	SD5下層	陶器	擂鉢	—	—	—	—	外）灰N4/ 断）灰N4/	焼締め	口縁部外面凹線、内面擂目後回転ナデ。体部外面ヨコナデ、内面擂目。	備前 18世紀
622	SD5下層	陶器	擂鉢	—	—	9.6	—	外）にぶい赤褐2.5YR5/3 断）赤灰2.5YR5/1	焼締め	内面擂目。外面ヨコナデ。	備前 18世紀
623	SD5下層	陶器	灯明受皿	—	—		受部径7.3	外）赤褐10R4/4 断）赤褐10R4/4	焼締め	内面ナデ、外面ケズリ。受け部の三方にアーチ状の抉りあり。	内面に灯芯油痕。
624	SD5	陶器	甕	22.0	—	—	—	外）黒褐2.5Y3/1 断）灰5Y5/1	鉄釉・灰釉	内面ロクロ目。頸部外面無釉。体部外面黒褐色の釉。内面と口縁端部に灰オリーブ色の釉。	丹波焼 18世紀後半
625	SD5	陶器	甕	26.6	—	—	—	外）暗褐7.5YR3/3 断）灰白2.5Y8/2	鉄釉	内面ロクロ目。	関西系
626	SD5下層	陶器	甕	21.8	—	—	—	外）褐7.5YR4/3 断）褐灰7.5YR4/1	鉄釉	口縁を内外に肥厚させる。内面上位まで施釉。鉄釉は褐色に発色。	能茶山窯 1820年代～幕末

Tab.23　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm） 口径	器高	底径	最大径	色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
627	SD5	陶器	香炉又は火入れ	10.6	—	—	—	外）にぶい黄橙10YR5/4 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	強いロクロ目。内面無釉。にぶい黄橙色の釉で2mm前後の貫入が入る。部分的に緑釉が掛る。	
628	SD5	陶器色絵	不明	—	—	7.8	—	外）灰白5Y7/2 断）灰N5/	外）上絵付による草文 白化粧土・灰釉	体部外面に縦筋。色絵は変色し黒色に発色。外面は白化粧土後灰釉施釉。内面無釉、外底無釉。	京都系
629	SD5下層	陶器	不明水注類か	—	—	—	—	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	外面にヘラによる縦筋。注口の一部が残る。内面に緩やかなロクロ目。灰白色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	尾戸窯
630	SD5下層	土師質土器	小皿	10.8	1.8	7.2	—	外）にぶい黄橙10YR7/4 断）にぶい黄橙10YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
631	SD5下層	土師質土器	焜炉	—	—	—	—	外）にぶい橙7.5YR7/4 断）にぶい黄橙10YR7/3		外面ナデ、内面回転ナデ。	関西系
632	SD5	瓦質土器	火鉢又は火消し壺	—	—	—	—	外）黄灰2.5Y4/1 断）にぶい黄橙10YR6/3		外面ナデ・ミガキ、内面ヨコナデ。	
637	包含層Ⅱ層	磁器染付	中碗丸形	11.0	5.8	4.7	—	外）白 断）白	外）格子・篠（まがき） 見込み）花文 高台内）「宣明」銘	呉須は青色。	肥前産 1660～1680年代 高台内に「宣明」銘あり。
638	包含層Ⅱ層	磁器染付	小皿丸形	14.2	3.2	5.8	—	外）灰白5GY8/1 断）白	内）菊花・二重圏線	呉須は青色。	肥前産　有田 1610～1630年代
639	包含層Ⅱ層	磁器染付	小皿	—	—	4.9	—	外）白 断）白	内）鶴・松 外）芙蓉手か	呉須は青色。	肥前産 1820年代～幕末
640	包含層Ⅱ層	陶器	皿又は鉢	—	—	6.2	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	高台施釉。灰オリーブを帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	尾戸窯 内底に目痕。
641	包含層Ⅱ層	磁器染付	小杯	7.2	3.9	2.8	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白N8/	外）草文	高台施釉。呉須はオリーブ灰色。透明釉は灰白色を帯びる。畳付に砂が付着。	肥前産 17世紀前半
642	包含層Ⅱ層	磁器染付	碗蓋	笠部径10.0	器高3.0	摘み径4.0	—	外）白 断）白	外）稲束 摘み外）二重圏線 内）四方襷 見込み）十字花	呉須は青色。	肥前産
643	包含層Ⅱ層	陶器	土瓶又は急須	13.2	—	—	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）淡黄2.5Y8/3	無釉	外面ユビオサエ・ナデ。	
644	包含層Ⅱ層	陶器	土瓶蓋	笠部径12.9	—	—	かえり径10.7	外）灰白5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2	外）鉄絵	天井部ケズリ後ナデ。内面とかえり無釉。鉄錆は暗オリーブ色に発色。灰釉は灰白色を帯びる透明の釉で1～2mm大の貫入が入る。	
645	包含層Ⅱ層	陶器	蓋	笠部径4.9	器高1.3	摘み径1.4	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）淡黄2.5Y8/3	灰釉	上面回転ナデ。下面回転糸切り。上面に薄く灰釉が掛る。淡黄色の釉。	
646	包含層Ⅱ層	陶器	不明	—	—	2.8	—	外）灰白5Y8/1 断）にぶい黄橙10YR6/3	灰釉	茄子形。型作り貼り合わせ。灰釉は焼成不良気味で白濁する。	尾戸窯
647	包含層Ⅱ層	陶器	皿変形形	—	—	—	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白N8/	内）鉄絵 灰釉	灰白色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。光沢が強い。	尾戸窯
648	包含層Ⅱ層	焼締陶器	急須又は土瓶	—	—	—	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）淡黄2.5Y8/3	無釉	型作り後、手捏ね成形。底部は六角形。ユビオサエにより側面を亀甲状に面取る。内外面ユビオサエ・ナデ。内面の一部に布目痕が残る。	外底周囲に煤。
649	包含層Ⅱ層	焼締陶器	鍋	14.6	7.0	7.6	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰オリーブ5Y6/2	無釉	手捏ね成形。内外面ユビオサエ・ナデ。	外底周囲に煤。
650	包含層Ⅱ層	瓦質土器	茶釜	14.0	—	—	—	外）灰5Y6/1 断）灰5Y6/1		内外面回転ナデ。	
651	包含層Ⅱ層	瓦質土器	焜炉	13.6	—	—	—	外）黄灰2.5Y5/1 断）灰白5Y7/1		体部上位に円孔あり。外面ナデ・ミガキ、内面回転ナデ。	内面上位に煤。
652	包含層Ⅱ層	土師質土器	五徳か	12.4	6.6	14.2	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	外）側面の三方にヘラによる面取りと飛鉋	前面に窓あり。窓の周縁に粘土紐を貼付しユビオサエ。側面の6箇所に径1.3cmの円孔あり。内面ロクロ目。	口縁部に弱い煤。
653	包含層Ⅱ層	土師質土器	泥面子	全長2.3	全厚0.7	全幅2.4	—	外）にぶい黄橙10YR7/3断）		型押しによる花文。外面ナデ。	
654	包含層Ⅱ層	施釉土師質土器	人形又は鳩笛	—	—	—	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2	鳥形。 外）黄・茶・薄緑の釉	型押し成形貼り合わせ。尾の先端に穿孔あり。羽を黄、尾を茶で描き分け、全体に薄緑の釉を掛ける。	

Tab.24　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm） 口径	器高	底径	最大径	色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
657	攪乱	磁器 染付	中碗 端反形	9.6	—	—	—	外）白 断）白	外）柘榴・唐草 内）雷文帯 見込み）松竹梅円形文		肥前系
658	攪乱6	磁器 染付	中碗 端反形	11.0	—	—	—	外）白 断）白	外）窓に山水文・区画内に唐・獅内）雷文		能茶山窯 1820年代～幕末
659	攪乱3	磁器 染付	中碗 端反形	11.6	6.4	4.8	—	外）白 断）白	外）雀・竹・岩輪・菊・蘭見込み）竹		肥前系 1820年代～幕末
660	攪乱6	磁器 染付	中碗 端反形	11.0	6.1	4.4	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	外）草・蘭・多重圏線 内）二重圏線 見込み）略化された明文銭	見込み蛇の目釉剥ぎ。	砥部 1840～1860年代
661	攪乱1	磁器 色絵	中碗 丸形	11.0	—	—	—	外）白 断）白	外）上絵付（赤・青その他は剥離）による描		岡百系
662	攪乱1	磁器 染付	小碗	9.0	—	—	—	外）白 断）白	外）雨降り文		肥前産 17世紀末～18世紀前半
663	攪乱1	磁器 染付	中碗 端反形	—	—	—	—	外）白 断）白	外）松 内）二重圏線		肥前産又は肥前系
664	攪乱6	磁器 染付	うがい茶碗	—	—	5.4	—	外）白 断）白	内）文様不明。	高台施釉。	肥前産 18世紀後半
665	攪乱3	磁器 染付	小杯 端反形	5.0	3.5	2.0	—	外）白 断）白	外）忍冬唐草台 外）二重圏線		肥前産
666	撹乱	磁器 染付	中皿	26.0	—	—	—	外）白 断）白	内）筆割による蘭花と折枝・鳥による列点文口縁	口縁部輪花形。	肥前産　有田 18世紀後半
667	攪乱3	磁器 色絵染付	皿	30.4	—	—	—	外）白 断）白	内）酸化コバルトと上絵付（赤・緑）による窓と花文 外）酸化コバルトによる蝶転文	口縁部輪花形。	肥前産 明治
668	攪乱5	磁器 染付	大皿					外）白 断）白	内）松	口縁部輪花形。共須は青色。	肥前系 668・669 同一個体
669	攪乱5	磁器 染付	大皿	—	—	16.0	—	外）白 断）白	内）花弁・区画内に松 外）不明		肥前産 668・669 同一個体
670	攪乱4	磁器 染付	皿	—	—	—	—	外）白 断）白	内）草花・葵 高台内）銘		肥前産 17世紀後半～18世紀前半。 高台内「虚化年製」銘。
671	攪乱1	磁器 色絵染付	皿	—	2.8	—	—	外）白 断）白	内）酸化コバルトによる唐草・上絵付（赤・緑・その他は剥離）による草花と蝶 外）点描 高台外）二重圏線	口縁部輪花形。	肥前系 明治～大正
672	攪乱3	磁器 染付	大皿	—	—	23.0	—	外）白 断）白	内）鶴亀文 高台外）二重圏線 高台内）圏線・銘	共須は青色。高台内にハリ支え痕。	肥前系 1820～1860年代 高台内「□」年製」銘。
673	攪乱	磁器 染付	大皿又は中皿	—	—	9.0	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	内）花文	外面ごく僅やかなロクロ目。畳付に灰白色の粗い砂が付着。高台施釉。共須は青灰色。透明釉は明緑灰色をおびる。	肥前産 山辺川窯か 1630～1640年代
674	攪乱6	磁器 染付	大皿	—	—	16.6	—	外）灰白10Y8/1 断）白	内）網目・桜 高台外）二重圏線 高台内）圏線	透明釉は焼成不良気味でやや白濁する。	肥前系　有田 1650～1670年代
675	攪乱3	磁器 染付	大皿 丸形	35.8	5.0	19.0	—	外）白 断）白	内）水辺文・丸 外）如意頭連銭唐草文・圏線 高台内）圏線	共須は青色。	肥前産 1630～1660年代
676	攪乱3	磁器 染付	鉢 端反形	20.2	—	—	—	外）白 断）白	外）花文・圏線 内）花文・圏線	共須は青色。	肥前系 18世紀末～19世紀前半
677	攪乱3	磁器 色絵染付	鉢 浅丸形	18.0	4.0	11.8	—	外）灰白7.5Y8/1 断）白	外）酸化コバルトによる唐草と蘭弁文・上絵付（赤）による花文 内）酸化コバルトと上絵付（赤）による花文・家文	口縁部玉縁状。クリ底。	肥前産 明治

Tab.25　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・釉調等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
				口径	器高	底径	最大径				
678	攪乱5	磁器染付	鉢	10.6	5.5	9.8	—	外）白 断）白	内）山水文 外）山水文	口縁部輪花形。蛇の目凹型高台。呉須は青色。	肥前系
679	攪乱	磁器染付	猪口端反形	7.4	6.3	4.2	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白10Y8/1	外）芭蕉	呉須は青灰色。	肥前系
680	攪乱3	磁器染付	猪口広東形	9.4	7.0	6.2	—	外）白 断）白	外）波に千鳥 見込み）千鳥 内）波		肥前産
681	攪乱6	磁器染付	猪口	—	—	5.6	—	外）灰白7.5Y8/1 断）白	外）風水文か 見込み）亀 高台内）銘	透明釉は1mm前後の貫入が入る。	能茶山窯 1820～幕末（在銘資料は1836年以降） 高台内「サ」銘。
682	攪乱5	磁器染付	鉢八角形	13.4	5.5	6.4	—	外）白 断）白	内）草・鳥 外）芙蓉手高台 外）二重圏線		肥前産
683	攪乱3	磁器染付	碗蓋	10.0	3.2	4.2	—	外）白 断）白	外）竹・需輪・釜・鍋 見込み）竹		肥前系 1820年代～幕末
684	攪乱5	磁器染付	碗蓋	笠部径8.4	器高2.8	摘み径3.4	—	外）灰白5Y8/1 断）白	外）松葉・簪・福寿 内）雷文帯 見込み）芭蕉葉		能茶山窯 1820年代～幕末
685	攪乱6	磁器染付	碗蓋	笠部径9.6	器高2.8	摘み径3.6	—	外）白 断）白	外）松・梅 摘み外）圏線	呉須は青色。	肥前産
686	攪乱	磁器色絵染付	碗蓋	笠部径10.4	器高2.5	摘み径4.2	—	外）白 断）白	外）呉須と上絵付（金・赤）による水仙・菊花		肥前産 幕末～明治初頭
687	攪乱9	磁器染付	蓋物蓋	笠部径11.4	器高4.2	摘み径2.6	かえり径10.2	外）白 断）白	外）山水文	呉須は青色。透明釉は2mm前後の貫入が入る。	肥前系
688	攪乱9	磁器染付	蓋	—	—	—	—	外）白 断）白	外）花文	呉須は青色。	肥前産 1820～1860年代
689	攪乱6	磁器染付	蓋	—	—	摘み径7.6	—	外）白 断）白	外）区画に松・梅 内）垣・植物 摘み内）昆虫文	鉢の蓋か。	肥前産 1780～1800年代
690	攪乱3	磁器染付	蓋物蓋	笠部径9.0	—	—	かえり径8.0	外）白 断）白	外）蝙蝠・雲	内面施釉。かえり無釉。呉須は青色。	肥前産
691	攪乱6	磁器染付	蓋物蓋	笠部径5.6	—	—	かえり径4.6	外）白 断）白	外）井桁文・繍	摘みを貼付。かえり無釉。	肥前産
692	攪乱3	磁器染付	蓋物蓋	笠部径6.0	—	—	かえり径5.4	外）白 断）白	外）丸に松文・纲	摘みを貼付。内面無釉。かえり無釉。呉須は青色。	肥前産
693	攪乱3	磁器染付	蓋物碗形	10.8	3.7	5.0	—	外）白 断）白	外）帯線に丸・草文 高台外）二重圏線	内面施釉。口縁端部無釉。	肥前系
694	攪乱	磁器染付	段重	6.4	4.3	7.0	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	外）牡丹唐草文	腰部括れあり。口縁端部と高台脇無釉。	肥前系
695	攪乱8	磁器色絵染付	段重	5.7	—	—	—	外）白 断）白	外）呉須と上絵付（赤・剥離し不明）による蓮弁文・白抜きによる唐草・丸に花文	内面ロクロ目。内面施釉。口縁端部無釉。	肥前産 19世紀初頭～幕末
696	攪乱3	磁器色絵染付	段重	9.2	—	—	—	外）白 断）白	外）呉須と上絵付（赤・黒）による丸に桃・白抜きによる唐草	内面ロクロ目。内面施釉。口縁端部無釉。	肥前産 18世紀末～幕末
697	攪乱1	磁器染付	段重	10.8	4.5	10.0	—	外）白 断）白	外）花唐草文	高台脇重ね。内面施釉。口縁端部と高台脇無釉。	肥前系
698	攪乱	磁器染付	火入れ	11.0	—	—	—	外）白 断）白	外）花詰め・窓に宝文	内面無釉。	肥前産 口縁端部に敲打痕
699	攪乱	磁器染付	うがい茶碗	13.8	—	—	—	外）白 断）白	外）花文 内）條	呉須は青色。	肥前系 1820～1860年代
700	攪乱	磁器染付	仏飯器	6.8	5.9	3.6	—	外）灰白2.5GY8/1 断）灰白N8/	外）半菊花	焼成不良気味で透明釉は白濁	肥前産
701	攪乱	磁器色絵	神酒徳利瓶子形	2.0	10.6	4.0	4.8	外）白 断）白	外）上絵付（赤・緑）による文字「御神前」・飾り	輪高台	肥前産 19世紀初頭～幕末
702	攪乱	磁器染付	小瓶	—	—	3.8	—	外）灰白7.5Y8/1 断）灰白N8/	外）蛸唐草・圏線	内面ロクロ目顕著。畳付に砂が付着。内面無釉。	肥前産 19世紀
703	攪乱3	色絵	人形又は水滴	—	—	—	—	外）白 断）白	外）陽刻文様・黄土色の釉下彩	型押し成形貼り合わせ。中空。内面ユビオサエ・ナデ。内面無釉。	瀬戸又は関西系 明治

Tab.26　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）口径	器高	底径	最大径	色調	文様・釉薬	特徴（成形・調整・絵胴等）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕・他）
704	撹乱	磁器 色絵	人形又は水滴	—	—	—	—	外）灰白N8/ 断）白	外）上絵付（赤）	唐子の背中の部分か。型作り貼り合わせ。内面ユビオサエ、ユビナデ。	肥前産 17世紀末〜18世紀前半
705	撹乱3	色絵又は白磁	人形又は水滴					外）白 断）白	外）陽刻文様	型押し成形貼り合わせ。中空。内面ユビオサエ・ナデ。内面無釉。	瀬戸又は関西系 明治
706	撹乱3	色絵又は白磁	人形又は水滴	—	—	—	—	外）白 断）白	外）鱗状の陽刻文様	型押し成形貼り合わせ。中空。内面ユビオサエ・ナデ。内面無釉。	瀬戸又は関西系 明治
707	撹乱5	磁器 染付	手焙り	19.4	20.1	13.6	—	外）白 断）白	外）丸文。四方に円形の窓。窓内に笹・樹木。	クリ底。高台の三方をアーチ状に削り出す。畳付に刻み。体部内面無釉。呉須は青色。	肥前産 1820〜1860年代 内底に灰白色の砂が多量に付着。
708	撹乱	陶器	中碗 丸形	11.0	6.8	4.0	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	外面にごく緩やかなロクロ目。高台内を曲線的に削り出す。畳付外側にナデ。高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	尾戸窯
709	撹乱	陶器	中碗	12.6	—	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白5Y7/1	灰釉	外面にごく緩やかなロクロ目。灰釉は透明で1mm前後の貫入が入る。	尾戸窯
710	撹乱5	陶器	鉢 丸形	16.2	6.4	9.0	—	外）緑 断）灰白2.5Y8/7	外）緑色の釉	畳付外側面取り後ナデ、内側ナデ。高台施釉。	珉平焼
711	撹乱	陶器	小皿 変形形	—	1.3	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	型打ち成形による蔦文。外面にヘラによる稜線。内外面布目。	尾戸窯
712	撹乱	陶器	レンゲか	10.0 ×6.4	2.8	5×2.8	—	外）白内）黄 断）白	内）レモン色の釉 外）白色の失透性の釉	高台内施釉。	珉平焼か
713	撹乱8	陶器	碗	10.2	—	—	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	外）鉄錆による注連縄文灰釉	鉄絵は黒褐色に発色。灰釉は2mm前後の貫入が入る。	京都系
714	撹乱	陶器	小碗杉形	9.2	5.0	3.4	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白7.5Y8/1	外）若松	高台無釉。高台内は鋭角的に削り出す。灰白色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	京・信楽系 18世紀後葉
715	撹乱5	陶器	蓋	12.0	—	—	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/1	外）鉄錆と青絵具による草花文		京焼
716	撹乱5	陶器 色絵	鉢	13.4	6.8	7.4	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/1	外）鉄錆と青絵具、上絵付（赤・緑）による草花文	高台内を鋭角的に削り出す。高台内平坦。畳付外側に面取り。内面施釉。受け部と内面の段部無釉。高台施釉。灰釉は1mm前後の貫入が入る。	京焼
717 718	撹乱5	陶器	土瓶	10.2	—	6.0	—	外）にぶい黄2.5Y6/3 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	把手を貼付。外面上位に多条の沈線。口縁端部無釉。内面と外面下半無釉。にぶい黄色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	717・718同一個体
719	撹乱5	陶器	急須又は土瓶	7.4	—	—	—	外）青 断）黄灰2.5Y5/1	外）列点文・檜垣・青海波文	薄手の作り。外面に白化粧土施釉の後酸化コバルトによる文様を描く。内面無釉。	関西系 19世紀
720	撹乱3	陶器	灯明受皿 容器付き立鼓形	—	—	4.6	—	外）浅黄2.5Y7/4 断）灰白10YR8/2	灰釉	受け部に抉り。内面ロクロ目。外底と内面無釉。浅黄色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	
721	撹乱	土師質土器	焜炉又は火鉢	—	—	24.0	—	外）橙7.5YR6/6 断）にぶい橙7.5YR7/4		粘土紐積み上げ成形。三足を貼付。内外面ヨコナデ。	外面に煤。
722	撹乱6	土師質土器	火消し壺蓋	笠部径17.0	—	—	—	外）にぶい橙7.5YR6/4 断）にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。	天井部内面に煤。
723	撹乱8	瓦質土器	焜炉又は火鉢	—	—	—	—	外） 断）	外）菅文・檜垣文	外面ナデ・ミガキ。底部外側に印刻による菅文・檜垣文。	
724	撹乱	土師質土器	五徳か	—	6.3	23.0	—	外）橙5YR6/6 断）橙5YR6/6		内外面回転ナデ。	
729	撹乱	白磁	蓋付の鉢か	8.0	—	—	—	外）灰白N8/ 断）灰白N8/	外）文字「防衛□□」	防衛食器。内面施釉。端部と口縁部内面無釉。文字はゴム印により、灰オリーブ色に発色。	肥前産 昭和
730	表採	白磁	小瓶	3.6	3.9	3.2	—	白	外底）「653セ」	内面施釉。外底にゴム印による記号「653セ」。	昭和

Tab.27　遺物観察表（石製品・金属製品）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）			重量（g）［］は残存分	色調	特徴
266	SK3 上層	銅製品	煙管雁首	—	—	火皿径 1.5	［4.6］	—	脂返しは湾曲する。側面に接合痕あり。
267	SK3 上層	銅製品	煙管雁首	残存長7.0	ラウ接合部径 0.9	吸口径 —	［8.2］	—	火皿を欠損する。脂返しは僅かに湾曲する。上面に接合痕あり。
268	SK3 上層	銅製品	煙管雁首	残存長4.6	—	—	［4.6］	—	火皿を欠損する。脂返しは湾曲する。側面に接合痕あり。ラウが残存する。亜みあり。
269	SK3 下層	銅製品	煙管吸口	全長 6.3	ラウ接合部径 0.9	吸口径 0.2	3.3	—	胴部は長く、口付部に向かい緩やかに細くなる。
270	SK3 上層	銅製品	煙管吸口	全長 4.7	ラウ接合部径 1.0	吸口径 0.3	8.4	—	胴部は短く、口付部はすぼまる。
271	SK3 下層	鉄製品	釘	—	—	径 0.5	［1.9］		頭部を欠損する。断面四角形。
272	SK3 上層	銅製品	簪	全長 14.9	—	径 0.2	［3.2］	—	飾りは欠損する。亜みあり。
273	SK3 上層	銅製品	毛抜き	全長 8.6	—	—	9.6	—	
274	SK3 下層	鉄製品	包丁	全長 22.2	全高 6.3	厚さ 0.2	65.6	外）にぶい赤褐2.5YR5/4 内）にぶい赤褐2.5YR4/3 断）赤灰2.5YR4/2	柴勾包丁。柄は欠損する。
275	SK3 上層	石製品	不明	全長 4.5	—	全幅 3.8	［73.4］	外）灰白N8/ 断）白	球形。外面ミガキ。貫通する穿孔あり。
276	SK3 下層	銅銭	寛永通宝	銭径 2.5	穿径 0.6	厚さ 0.1	3.0	—	
381	SK6	銅製品	煙管雁首又は吸口	残存長4.5	ラウ接合部径 0.9	—	［1.3］	—	側面に接合痕あり。
382	SK6 上層	鉄製品	釘	—	—	—	—	—	錆により形状不明。
388	SK6 下層	石製品	石臼	径 22.0	—	—	［780］	外）灰7.5Y4/1 断）灰7.5Y4/1	上臼。側面に陽刻文様。
431	SK11 上層	鉄製品	釘	残存長4.5		径 0.5	［2.6］	—	断面四角形。
441	SK12 上層	鉄製品	釘	全長 9.7	—	—	—	—	錆が著しく形態不明。
432	SK13	銅銭	寛永通宝 文銭	銭径 2.4	穿径 0.6	厚さ 0.1	2.7	—	裏面に「文」
456	SK14 下層	石製品	砥石 転形	残存長7.5	全高 3.6	全幅 5.0	［223.4］	外）灰白5Y8/1 断）灰白5Y8/1	凝灰岩製。中央部で破損。主研面は使用によって弓なりに摩耗する。裏面、側面とも使用痕あり。
563	SD3	鉄製品	釘	全長 7.4	—	径 0.5	5.3	—	頭部をもつ。断面四角形。
636	SD5 床	銅銭	寛永通宝	銭径 2.3	穿径 0.7	厚さ 0.1	［1.3］	—	
728	撹乱1	石製品	砥 楕形	全長 13.5	全高 2.0	全幅 7.5	359.2	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y7/2	凝灰岩製。砥部に縦方向の擦痕あり。砥部中央は使用により窪む。全体に鉛が薄く付着。

Tab.28 遺物観察表（瓦）

図版番号	出土地点	種類	法量（cm）			色調・胎土	特徴	備考（生産地・銘）
			瓦当高	文様区高	平瓦厚			
22	TP3 I層	軒丸瓦	—	—	—	外）灰N4/ 断）灰白5Y8/1	巴文。外面にキラ粉。	
23	TP5 I層	平瓦	—	—	1.7	外）灰N4/ 断）灰白N8/		高知県安芸市 側面に銘印「アキ福」。
24	TP3 I'層	平瓦	—	—	1.5	外）灰7.5Y5/1 断）灰白5Y8/1		高知県安芸市 側面に銘印「アキ五」。
98	SK2 上層	平瓦	—	—	1.7	外）褐灰10YR6/1 断）灰5Y6/1	二次被熱により変色。	高知県安芸市 「アキ」銘印。
383	SK6 上層	軒平瓦	4.2	2.7	1.6	外）灰N4/ 断）灰白5Y8/1	中心飾りは不明。側面に唐草文を配する。表面にキラ粉を使用。	
384	SK6 下層	平瓦	—	—	1.8	外）灰N4/ 断）灰白5Y7/1	表面にキラ粉を使用。	高知県高知市布師田 角内に「□惣」銘印。 「布源」か。
385	SK6	平瓦	—	—	1.8	外）灰N4/ 断）灰白5Y7/1	表面にキラ粉を使用。	角に「二忠」銘印。 「小の忠」布師田、又は 「山忠」幹市か
386	SK6 上層	平瓦	—	—	1.7	外）灰N4/ 断）灰白7.5Y7/1		高知県安芸市 「アキ兼」銘印。
387	SK6 下層	平瓦	—	—	1.6	外）暗灰N3/ 断）灰N5/		「け□□」銘印。
398	SK7 上層	軒平瓦	4.5	2.7	1.6	外）暗灰N3/ 断）灰5Y6/1	中心飾りは蕨文。両側に均整唐草文を配する。キラ粉を使用。	
399	SK7 下層	平瓦	—	—	1.6	外）灰N4/ 断）灰5Y5/1		高知県香南市徳王子 「王子」銘印。
400	SK7 下層	平瓦	—	—	1.5	外）暗灰N3/ 断）灰白5Y7/1		高知県安芸市 「アキ」銘印。
534	SD1 上層	軒平瓦	4.4	—	—	外）浅黄橙10YR8/4 断）浅黄橙10YR8/4	右桟瓦。唐草文。	被熱し橙色に変色。
561	SD3 上層	軒平瓦	—	—	2.0	外）黒N2/ 断）灰5Y5/1	左桟瓦。側面に唐草文。	
562	SD3 下層	軒平瓦	—	—	—	外）灰N6/ 断）灰白5Y7/1	中心飾りは蕨文。両側に均整唐草文を配する。	高知県安芸市 「安芸友」銘印。
585	SD4 上層	軒丸瓦	14.5	11.5	—	外）灰N4/ 断）灰白5Y7/1	巴文。珠文数は16個。	
586	SD4	軒平瓦	—	—	1.5	外）灰N5/ 断）黒N2/	中心飾りは蕨文。両側に均整唐草文を配する。	
587	SD4 下層	軒平瓦	—	—	—	外）灰N5/ 断）灰7.5Y8/1	中心飾りは茎付の花3本からなり、両側に均整唐草文を配する。唐草は巻きが強い。	
588	SD4 下層	平瓦	—	—	1.6	外）灰N4/ 断）灰N4/		高知県安芸市 外面に銘印。「あキ□」。
633	SD5	平瓦	—	—	1.6	外）黒N2/ 断）暗灰N3/		高知県香南市徳王子 側面に「とく」銘印あり。
634	SD5	軒平瓦	4.6	3.3	1.5	外）灰N4/ 断）灰白2.5Y8/2	中心飾りは花文。両側に均整唐草文を配する。	
635	SD5	軒平瓦	—	—	—	外）灰N4/ 断）灰白7.5Y7/1	中心飾りは珠点をもつ子葉文。	
655	包含層 II層	軒平瓦	4.6	3.1	—	外）灰白5Y7/1 断）灰5Y5/1	中心飾りは三花文。	
656	包含層 II層	軒平瓦	—	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白5Y7/1	植物文様か。	
725	撹乱3	軒平瓦	—	—	—	外）灰5Y5/1 断）灰N6/1	中心飾りは花文。側面は均整唐草文。	
726	撹乱3	平瓦	—	—	1.8	外）灰N4/ 断）灰白N8/		高知県安芸市 側面に銘印「アキ兼」。
727	撹乱11	平瓦	—	—	1.8	外）灰N3/ 断）灰白5Y7/1		高知県安芸市 側面に銘印「アキ兼」。

Tab.29　遺物観察表（木製品）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	特徴	備考（使用痕）
99	SK2 下層	木製品 漆器	椀又は椀蓋	—	—	底径 4.4	—	外）黒N1.5/ 内）黒N1.5/	内外面に黒漆。無文。器壁は薄い。高台内は曲線的に挽き出す。	
100	SK2 下層	木製品 漆器	椀	—	—	—	—	外）暗赤10R3/6 内）暗赤10R3/6	内外面に赤漆。無文。歪みあり。	
101	SK2 下層	木製品 漆器	曲物	復元径 12.0	—	全厚 0.7	—	外）黒10YR1.7/ 内）暗赤10R3/6	曲物底部。円形盤状。外底に三足を貼付する。内面に赤漆、外面に黒漆。無文。	
102	SK2 下層	木製品 漆器	曲物	復元径 33.6	—	全厚 0.8	—	外）赤褐2.5YR4/6 内）赤褐2.5YR4/6	円盤状。曲物の底部又は蓋の一部か。側面は欠損する。内外面に赤漆。無文。	
103	SK2 下層	木製品	桶	復元径 23.6	—	全厚 1.7	—	—	桶底部の部材か。半円状で内側面の2箇所に釘穴が残る。底厚み1.7cm、桶底の復元径は23.6cm。	
104	SK2 下層	木製品	桶	復元径 22.0	—	全厚 1.5	—	—	桶底部の部材か。半円状で内側面の2箇所に釘穴が残る。底厚み1.5cm、桶底の復元径は24.0cm。	
105	SK2 下層	木製品	桶か	復元径 24.0	—	全厚 1.7	—	—	円形。盤状。厚さ1.7cm。周縁の片側面3箇所に貫通する穿孔あり。	
106	SK2 下層	木製品	桶	全長 18.1	全幅 10.2	全厚 0.7	—	—	桶の側板か。縦18.1cm厚さ0.7cmの薄板で、断面は緩やかに湾曲する。上部は幅10.5cm、下部は幅9.0cmと、上方に向かい僅かに広がる。内面の数箇所に縦方向の切り込みが入る。内面下部幅1.7cm高さ2.5cmの木片がはめ込まれる。	
107	SK2 下層	木片	不明	全長 10.5	全幅 11.3	全厚 2.0	—	—	厚み2.0cmの板材を緩やかなカーブを描くように斜め方向に切り取っている。使用痕なし。	
277	SK3 上層	木製品 漆器	椀蓋	—	—	摘み径 5.2	—	外）黒N1.5/ 内）暗赤7.5R3/6	外面に黒漆、内面に赤漆。外面に金蒔絵による若松・笹・花・注連縄器壁は厚い。歪みあり。	
278	SK3 下層	木製品 漆器	椀	—	—	底径 5.8	—	外）黒N1.5/ 内）黒N1.5/	内外面に黒漆。外面に金蒔絵による若松・花器壁が厚く、腰の張った底部から体部が上方へ立ち上がる。	
279	SK3 下層	木製品 漆器	椀	—	—	—	—	外）黒N1.5/ 内）暗赤7.5R3/6	外面に黒漆、内面に赤漆。外面に赤蒔絵による文様底部の器壁は厚い。	
280	SK3 中層	木製品	箸	全長 19.8	全幅 0.7	全厚 0.5	—	—	両先端が尖る。断面楕円形。	
281	SK3 下層	木製品	箸	全長 25.8	全幅 0.8	全厚 0.5	—	—	断面八角形。先端は切りっぱなし。	
282	SK3 上層	木製品	箸	全長 22.7	全幅 0.5	全厚 0.6	—	—	棒状。断面円形。両先端は平坦。	
283	SK3 下層	木製品	箸	全長 22.0	全幅 0.7	全厚 0.6	—	—	断面円形。先端は切りっぱなし。	
284	SK3 中層	木製品	箸	残存長 11.5	全幅 0.8	全厚 0.7	—	—	下部を欠損する。断面楕円形。上面は面取る。	
285	SK3 上層	木製品	曲物	径 12.2	—	全厚 0.5	—	—	曲物の底部か。円盤状。	
286	SK3 上層	木製品	曲物	径 11.0	—	全厚 0.5	—	—	曲物の底部か。円盤状。	
287	SK3 上層	木製品	曲物	径 11.8	—	全厚 0.5	—	—	曲物の底部か。円盤状。	
288	SK3	木製品	桶又は曲物	復元径 32.0	—	全厚 0.9	—	—	桶又は曲物の底部か。円盤状。	
289	SK3 上層	木製品	桶	復元径 34.0	—	全厚 1.5	—	—	桶の蓋の一部か。厚さ1.5cm。周縁の一箇所に半円形の抉りあり。	
290	SK3 上層	木製品	曲物	—	全幅 5.1	全厚 0.5	—	—	厚さ0.5cm。曲物の側板。	
291	SK3 下層	木製品	下駄	全長 21.0	全幅 10.2	高さ 残存長 3.5	台部厚 1.4	—	連歯・長方形台部の断面は厚さ1.4cmの板状。歯は削り出しによって作り出しており、前後の厚み3.0cm。鼻緒の穴は径8mm。	歯の接地面は使用によって摩耗する。
292	SK3 上層	木製品	下駄	全長 21.4	全幅 8.8	高さ 残存長 3.1	台部厚 1.5	—	連歯・長方形。台部の断面は厚さ1.5cmの板状。歯は削り出しによって作り出しており、前後の厚み3.5cm。鼻緒の穴は径8mm。	歯の接地面は使用によって摩耗する。
293	SK3 上層	木製品	下駄	全長 21.5	全幅 9.0	高さ 残存長 3.6	台部厚 1.3	—	連歯・長方形。台部の両側を欠損するため、形態は不明であるが、断面は厚さ1.3cmの板状。歯は削り出しによって作り出しており、前後の厚み2.7cm。鼻緒の穴は径8×10mm。	歯の接地面は使用によって著しく摩耗する。鼻緒の穴は径1cmで手前方向に摩耗する。
294	SK3 上層	木製品	不明	残存長 10.3	全幅 8.1	全厚 1.1	—	—	板状。厚み1.1cm。中央に円状の抉りあり。	
295	SK3 上層	木製品 漆器	不明	残存長 9.8	全幅 3.7	全厚 0.8	—	外）黒10YR1.7/	内外面と外底に黒漆。板状。中央付近に円弧状の切り込みあり。内面又は外面の下位に浅い切り込みあり。下面は面取り後を施す。片側面と上部は欠損。	
296	SK3上層	木製品	不明	残存長 23.2	全幅 1.4	全厚 0.6	—	—	扁平棒状。片側先端付近に浅い切り込みと貫通する穿孔あり。一方の先端部は欠損する。	
297	SK3 上層	木製品 漆器	不明	—	—	全厚 0.9	—	外）黒10YR1.7/	内外面と外底に黒漆。板状。中央付近に円弧状の切り込みあり。内面の中位と下位に浅い切り込みあり。下面は面取り後を施す。左右側面と上部は欠損。	
298	SK3 上層	木製品 漆器	不明	—	—	全厚 0.7	—	外）黒10YR1.7/	内外面に黒漆。縁線は曲線的。片側面は欠損する。	

Tab.30　遺物観察表（木製品）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	特徴	備考（使用痕）
299	SK3 上層	木製品	下駄	全長 19.5	全幅 8.5	—	台部厚 2.8	—	差歯・長方形。台部の断面は横、縦とも箱形で、歯裏の両縁に面取りを施す。歯荒で、歯差し込みための方形の穴を2穴（1個につき1穴）穿つ。鼻緒の穴は径7mm。歯は欠損する。歯の厚みは1.5cm前後と推定される。	
300	SK3 上層	木製品	下駄	全長 22.8	全幅 8.7	高さ 7.0	台部厚 3.0	—	差歯・長方形。台部の横断面は歪な逆三角形。歯裏。歯の差し込み穴は1歯につき3穴を穿つ。歯は前後の厚み1.5cmで底に向かって幅広がりの形態をとる。鼻緒の穴は径7mm。	歯の後端面は使用によって摩耗する。
301	SK3 上層	木製品	下駄	残存長 13.9	全幅 7.3	—	台部厚 3.0	—	片歯・小形。歯裏は歯下寸法に差荒で、歯は歯差し込みによる。前方に径8×9mmの穴を穿つ。後方と歯を欠損する。	
302	SK3 中層	木製品	不明	全長 9.1	全幅 2.9	全厚 2.4	—	—	板材。抉りあり。使用痕なし。	
303	SK3 上層	木製品	不明木製品の部材	全長 14.9	全幅 1.7	全厚 1.4	—	—	棒状。断面形態は四角形。両面の中央に沿って釘穴が並ぶ。釘穴は貫通しない。下面は斜めに切り取り、隅に面取りを施す。	
304	SK3 下層	木製品	不明	全長 18.2	全幅 1.5	全厚 0.3	—	—	薄状。厚さ0.3cmの薄い板状で、両端の先端部は片側から斜め方向に加取る。	
305	SK3 上層	木製品	不明	全長 24.9	全幅 35.2	全厚 6.5	—	—	三方に側面をもつ浅い箱状で前方は開く。長方形の扁平な底板をもつ。底板は厚さ5mm前後、側板は厚み2cm前後。左下の側板は後方が残る6cm四方が厚さ3.5cmと先方に向けて低くなり、先端の角に面取りを施す。右手の側板は前方に縦2cm横1.1cmの切り込みが設けられ、先端の隅に面取りが施される。底部寄から側面板に向けて鉄製所に釘穴を穿つ。	
306	SK3 上層	木製品	不明木製品の部材	全長 18.9	全幅 10.5	全厚 0.7	—	—	長方形。板状。厚さ0.7cm。下位の鉄製所に異通する釘穴あり。一部に釘が残存する。上面の先端は内傾へ斜めに面取る。	
307	SK3 上層	木製品	不明	全長 13.9	全幅 4.8	全厚 0.9	—	—	長方形。板状。厚さ0.9cm。下位の中央に貫通する穿孔あり。上端と下端は斜め方向に面取る。	
308	SK3 下層	木製品	不明木製品の部材	全長 23.2	全幅 12.1	全厚 0.8	—	—	台形。板状。厚さ0.8cm。下位の鉄製所と片幅面隣に異通する釘穴あり。上部は斜め方向に切り取る。	
309	SK3 上層	木製品	不明木製品の部材	残存長 8.2	全幅 5.4	全厚 1.0	—	—	長方形。板状。下隅に貫通する穿孔あり。片側は欠損する。	
310	SK3 上層	木製品	不明木製品の部材	全長 4.0	全幅 3.3	全厚 0.5	—	—	方形。板状。中央に貫通する穿孔あり。	
311	SK3 下層	木製品	不明	全長 48.5	全幅 9.4	全厚 2.5	—	—	板状。中央の3箇所に穿孔あり。先端部に網歯状の切り込みがある。	
312	SK3	木製品	不明木製品の部材	全長 37.8	全幅 4.1	全厚 1.6	—	—	板状。中央に沿って上位に1穴、2穴貫通する穿孔あり。下部先端は斜めに切り取る。	
313	SK3	木製品	不明木製品の部材	—	—	全厚 1.8	—	—	板状。上位に貫通する穿孔あり。上部と片側の側面を欠損する。	
314	SK3 上層	木製品	不明木製品の部材	残存長 12.3	全幅 3.4	全厚 0.5	—	—	板状。穿孔あり。中央に沿って貫通する2穴の穿孔を認める。	

[遺物観察表凡例]

○ 色調欄の略号「外」は外面、「内」は内面、「断」は断面を表している。

○ 色調は農林水産省農林水産技術会議事事務局監修「新版　標準土色帳」による。

○ 瀬戸・美濃、関西系陶磁器については赤松和佳、加藤真司、日下正晴、佐藤公保、渡辺晴香、肥前産・肥前系陶磁器（下記）については佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏、瓦の銘印については土居利光氏のご教示を得た。

（3・15・17・19・25・28・30・32・34・42・43・45・47～49・52・53・65・66・68・113・115～117・121～124・127～131・133・134・136・138～146・149・150・152～172・208・215・315・317・319・320・322・323・325・331・342～345・348・350・352・355・356・358・359・389・391・392・394・401・403・407～409・412・414・430・438・442・445・446・455・459・461・483～486・506・507・509・550・551・567・568・570・590・593・594・597～599・602・603・606・637～639・660・664・666・667・671～677・686・688・689・695・696・699・701・703～707・729）

第Ⅴ章　考察

第1節　金子橋遺跡、居住者の性格と動向

はじめに

金子橋遺跡が立地する現在の第六小学校周辺の地域は、近年まで「金子橋」の町名が残り、近世には御馬廻や御小姓組の屋敷地が並ぶ上級～中級武士の居住区であった。また、郭中の南西端の一角にあった近世の金子橋とその周辺は、南側が鏡川の大堤防に接していたため、付近には水防用具蔵が設けられるなど、城下町の水防の要地でもあった。

今回の調査区では、近世の武家屋敷に関連する土坑、溝等の遺構を検出し、遺構内から多くの廃棄遺物が出土した。これらの廃棄遺物には上手の陶磁器や木製品などが含まれ、当時の武家の暮らしぶりを伝える貴重な資料が得られている。この遺構、遺物を検討するに先立って、本節ではまず、関連の絵図や文献史料を用いながら、近世金子橋遺跡での居住者の性格や変遷の姿を追うこととする。

1. 近世金子橋の景観

「金子橋」は郭中の西南端にあたる町名で、町のすぐ西には、外堀を渡り郭外の上町へ通じる橋「金子橋」が架けられている。橋の名は東の橋元に「金子」姓の武家が住んでいたことによると伝えられており、宝永年間（1704～1711）編纂の『土佐州郡志』[注1]には、「金子橋　長四間一尺廣二間　中嶋町西金子某カ宅ニ近シ」。文化12年（1815）編纂の『南路志』[注2]には「橋一ヶ所、長四間一尺弁弐間、俗小路中嶋町ゟ通丁へ渡ル。橋詰ニ金子某住宅、依之金子橋と云。金子橋」と記されている。

絵図によると、金子橋には、御馬廻や御小姓組など[注3]上級～中級武士の屋敷が並んでいる。今回、発掘調査が行われた第六小学校敷地付近の状況を絵図からみると、まず、寛文9年（1669）の『寛文己酉高知絵図』（Fig3・Fig77－図3）では、北側の通りに面して、東隅から御馬廻の「小八木務右衛門」、その西隣に御馬廻の「金子傳十郎」、南側の通りに面して東隅に不明屋敷地、その西に「田口五右門」「松浦平左衛門」の屋敷名が記され、南端には東西方向に設けられた堀と土堤が描かれている。

享和元年（1801）の『高知御家中等亀図』（Fig2・Fig78－図8）では、北側の通りに面して、東隅から御馬廻の「小八木五衛」、「小八木寿之助」、西隣に御小姓組の「馬場源助」、「前野領助」、南側の通りに面しては、東隅から「生駒熊弥太」、土堤と緑地を挟んでその西に「寺村命助」の屋敷が記されている。

また、幕末の『高知郭中図』（Fig4）では、北側の通りに面して東隅から「小八木五兵衛」、「小八木繁猪」、西に「馬場」、南側の通りに面して東隅から「麻田楠馬」、「奥村小十郎」、「森田貞馬」、「日比庄右衛門」の武家名が見える。

2. 居住者の推定

では、今回の発掘調査で検出された遺構群は、どの武家の屋敷に関連するのだろうか。

寛永元年（1624）から万治2年（1659）の間に成立したと推測されている『侍町小割帳』[注4]は高知城下の侍町の住居者名簿とでもいうべき史料であり、通りごとに屋敷地の間口と居住者の氏名が列記されている。該当地付近の記事を見ると（史料1）、間口が「拾三間半」として「金子弥右衛門」、隣家に間口「四拾八間」として「小八木務右衛門」の名が記されている。この間口の表記を、現代の地図（Fig.77－図2）[注5]と照合させると、今次調査区は「金子弥右衛門」の屋敷の範囲に入ることが推定される。

また、藩撰図と推定され[注6]その製図法の巧緻さが評価されている寛文9年の『寛文己酉高知絵図』をもとに、昭和44年の市街地図（Fig.77－図2）と比較すると、現況の街路区画が近世の町割りをほぼ踏襲していることが見て取れる。近代以降の改修が認められる区画南部側を除き、比較的良好に近世当時の規模をとどめている区画北面道路と、区画東端、西端の位置を、同倍率で重ね合わせ、今回の調査地点の位置を絵図上に推定復元したものが、（Fig.77－図3）になる。これによると、今次調査区位置は、やはり「金子傳十郎」の武家名が記された屋敷地の南側部分に入り、南側に接する「松浦平左衛門」屋敷との境界にまたがっていることが分かる。

一方、藩政期当時の写図とされる享和元年（1801）『高知御家中等亀図』は、現況位置との照合は困難であるが、先の『寛文己酉高知絵図』の「金子傳十郎」屋敷の前後の屋敷割りなどから、対応関係を推察することは一定可能である。これによると「馬場源助」「前野頼助」の武家名を記した2つの屋敷地を該当させることができよう。（Fig.78－図8）

そこで、以下では、金子氏、馬場氏に注目して、史料に表れる各人物の跡目相続の期間や身分、役職などを検討し、金子橋遺跡の性格とその年代的変遷を知る手がかりとしたい。

3. 居住者の性格と動向

金子氏について

金子氏については、山内家史料『御侍中先祖書系図帳』[註7]に藩差し出しの先祖書が収められている他、寺石正路氏著作の『土佐名家系譜』[註8]にも取り上げられ、『金子文書』『土佐國叢簡集』等の史料を用いて金子氏の系譜が紹介されている。

寺石正路『土佐名家系譜』によると、金子氏は遠祖を桓武平氏後裔とし、武蔵金子氏、伊予金子氏、土佐金子氏に分かれるとあり、土佐金子氏は、高知の金子橋と帯屋町に屋敷を構えたとされる。

金子家系譜によると、土佐金子氏の遠祖は伊予新居郡の金子氏で、金子傳兵衛備後守元宅が天正5年に土佐の長曽我部元親に属している。天正13年に伊予の金子城が落城して金子傳兵衛備後守元宅が戦死した後は、その遺族が土佐へ渡り、土佐金子氏となったものである。土佐金子氏の初代である金子弥右衛門宅明は、当初、元親のもとで土佐に留まったが、天正の陣の後は会津の加藤家に仕え、その後、再び土佐に戻り、山内家に召し抱えられることとなった。その後二代の金子傳十郎久宅は正保3年（1646）に御馬廻の身分と300石の禄を与えられている。

山内家史料『御侍中先祖書系図帳』に収められた、十二代金子鎰十郎宅教差し出しの先祖書には、

金子家初代弥右衛門から十二代までの跡目相続の年代と没年、身分、石高、役職などの内容が記されている。その概要は次の通りである。なお、家禄、役職については、同史料に記載のあるもののみを記述した。

元祖　弥右衛門宅明　正保元年（1644）～正保2年（1645）　五人扶持　30石。
二代　傳十郎久宅　正保3年（1646）～延宝4年（1676）御馬廻　300石。
寛文11年に御留守居物頭。
三代　十郎左衛門宅充　延宝5年（1671）～元禄6年（1693）　御馬廻。
四代　彦十郎宅晴　元禄6年（1693）～享保元年（1716）　300石。
五代　傳十郎宅清　享保2年（1717）～元文3年（1738）
六代　左十郎宅雅　元文3年（1738）～天明4年（1784）　御馬廻。
七代　弥十郎宅友　天明4年（1784）～文化4年（1807）
八代　傳十郎宅重　文化5年（1808）～文政4年（1821）　御馬廻。
九代　忠助宅孚　文政4年（1821）～天保9年（1838）
十代　嘉治馬宅弘　天保9年（1838）～弘化4年（1847）　御馬廻。
十一代　馬翼之助宅長　弘化4年（1847）～明治3年（1870）　御馬廻。
十二代　鎰十郎宅教　明治3年（1870）～

これによると、初代金子弥右衛門が、土佐山内家に仕えたのは正保元年（1644）以降であり、二代目金子傳十郎が御馬廻となった後、以後近世を通じて、金子家は御馬廻として山内家に仕えたことが分かる。

二代目の金子傳十郎久宅は、正保3年（1646）に父の跡目を相続し、延宝4年（1676）に没するまでの30年間を勤めている。そして、年代的な照合から、二代目金子傳十郎が、寛文9年（1669年）の『高知城下図』に記載された「金子傳十郎」にあたると考えられる。

金子家の屋敷位置は享和元年（1801）の『高知御家中等屋図』では金子橋に無く、替わって郭中北東部の錦川町の辺りに「金子伝十郎」（弥十郎の誤読か）、郭中南東部の南与力町に「金子彦十郎」の武家名が記されている。享和元年（1801）当時は七代目金子弥十郎（相続1784～1807。）の代にあたるが、先の『御侍中先祖書系図帳』には、弥十郎の項、寛政8年（1796）12月に「長屋出火にて焼失」の記事が記されている。

馬場氏について

馬場氏については、山内家史料『御侍中先祖書系図帳』[註9]に藩差し出しの先祖書が収められている。これによると、先祖はもと甲州武田家に仕えたとされるが、武田氏滅亡の後は、馬場平兵衛信義が土佐に至り、香宗我部氏に仕えている。この平兵衛信義から、源助信直、次右衛門信重、源右衛門氏信と3代が続くが、土佐山内家に召し抱えられたのは、源右衛門氏信からである。

このため、七代目馬場辰猪氏保が藩に差し出した馬場家先祖書では、源右衛門氏信が初代とされている。以下、馬場家先祖書から分かる、氏名と跡目相続年～没年、身分、禄高などの概要を下記

に挙げている。

元祖	源右衛門氏信	延宝7年（1679）～享保12年（1727） 二人扶持 切米7石。
二代	丈大郎氏幹	享保12年（1727）～享保13年（1728） 三人扶持。
三代	源右衛門氏興	享保13年（1728）～寛政9年（1797） 三人扶持。
四代	源助氏綱	寛政9年（1797）～文化5年（1808） 御厩従組。
五代	源馬氏高	文化6年（1809）～文久3年（1863） 文久2年から御馬廻。
六代	源八郎氏永	御馬廻。
七代	辰猪氏保	慶応元年（1865）～

馬場家は世禄が36石8斗、三代目から他に新田200石を与えられている。身分は、初代から三代まで二人扶持～三人扶持であるが、四代目の源助氏綱から御厩従組（御小姓組）に上がり、五代目から御馬廻となっている。

享和元年（1801）の『高知御家中等旋図』金子橋の南所に屋敷名が記される「馬場源助」はこの四代目にあたる。馬場家系譜には、四代目源助氏綱は、種崎の御船倉役、御蔵奉行代官頭、江戸上屋敷作事役、御隠居様屋敷作事役などの役職を勤めたことが記されている。

4. 屋敷替えの時期をめぐる問題

ところで、もと金子家屋敷があった地点は、享和元年（1801）頃には、馬場、前野家の2区画の屋敷地に変わっているが、この屋敷替えがどの時期に行われたのかについての疑問が残る。

金子氏の居住開始時期については、先の『侍町小割帳』に初代弥右衛門の名が見えるため、弥右衛門が山内家に召し抱えられた正保元年（1644）から、没する正保2年（1645）の間には、金子家屋敷が当地に存在していたことが分かる。そして、この後の金子屋敷の存続については、絵図、史料などから幾つかの手がかりをつかむことができる。

まず絵図では、寛文9年（1669）絵図（Fig.77－図3）に二代目金子傳十郎屋敷が描かれる他、『皆山集』(註10)に収められた「元禄二、三年間之図」に金子屋敷が描かれ、元禄2・3年（1689～1690）には存在していることがつかめる。

また、『南路志』にも、金子屋敷の動向の手がかりとなる記録を見ることができる。「享保十二年丁未二月朔日、越前町中程西側伊野部丈助宅ゟ出火、御城本丸、二ノ丸、三ノ丸、鉄門、ゟ楼上下、乾楼、二丸内楼二ヶ所、…（略）…役所不残焼失ス。帯屋町北側山田多門屋敷ゟ下堀端火の見迄十六軒、同南側高屋又兵衛宅ゟ今田清左衛門迄十一軒、本町乾又五郎、大黒甚左衛門、野中六左衛門迄三軒、西大御門北藪際佐藤五郎左衛門一軒、金子橋藪之内小笠原又右衛門外輪ゟ南鷹匠町境迄、東ハ大塚藤右衛門、金子傳十郎ゟ合八軒、鷹匠町南側西ゟ八軒、同北側後藤甚五右衛門一軒、外江ノ口分鶯見市丞一軒、合四十九軒焼残ル。」これによると、城を含め城下の殆どが類焼に及んだ享保12年（1727）の大火では、五代目金子傳十郎屋敷を含む8軒の屋敷が金子橋周辺で焼け残ったとある。こうした内容から、金子家屋敷は享保12年（1727）にも、金子橋に所在していたことが分かる。

次に、馬場家の居住開始の時期についてもみてみたい。

先に取り上げた『侍町小割帳』は、17世紀中葉頃に成立した原文を寛政3年（1791）と文政9年

(1826) の2時期に写したものであり、『土佐國群書類』に収められた写本は文政9年に市原辰登なる人物が書写したものとされる。現存する写本の末尾には市原辰登が「屑書傍書ハ書付札也」と記しており、先に別の人物が原文に注釈を加えているものも含めて写し取ったことが分かる。これをふまえて「金子弥右衛門」「小八木務右衛門」の項を見ると、「金子弥右衛門」の箇所に「寺田源助、井家左仲、馬場源右衛門」、「小八木務右衛門」の箇所に「小八木武助」の注釈が加えられており、おそらく、注釈を加えた人物がその当時、該当地に存在した屋敷の名を記入したものとみられる。ここに注記された「小八木武助」と同名の人物は不明であるが、「馬場源右衛門」と同名の人物は、初代(相続1679年～没1727年)と三代目(相続1728年～没1797年)があり、先の『南路志』で享保12年(1727)の記事まで金子家屋敷が存在したことからみると、三代目が該当すると考えられる。こうしたことから、三代目馬場源右衛門が家督を相続した享保13年(1728)～寛政9年(1797)の間には、馬場氏が金子橋に屋敷を構えていたことが特定できる。

絵図では、延享3年(1746)の『延享三年之図』(Fig.78－図5)で該当位置は空白。寛延年間(1748～1751)の『寛延年間頃高知城下郊中之図』(同－図6)と天明年間(1781～1789)の『天明年間前後高知絵図』(同－図7)で三代目「馬場源右衛門」。享和元年(1801)の『高知御家中等鳥図』(同－図8)で四代目「馬場源助」。天保元年(1830)の『天保元年高知之図』(同－図9)、弘化年間(1844～1848)『弘化年間旧廓中絵図』(Fig.79－図10)で、五代目「馬場源馬」の名が記され、文久3年(1863)の『文久三年之図』では「馬場」とのみ記されている。これらの絵図からも、三代目馬場源右衛門の頃より馬場家の金子橋居住が始まったことが窺われ、遅くとも寛延年間(1748～1751)には金子橋に屋敷が存在したことがつかめる。

これらのことから、金子橋遺跡には、正保元年(1644)～正保2年(1645)以降金子氏の屋敷が構えられ、大火のあった享保12年(1727)までは金子氏屋敷が存在していたこと、その後、享保13年(1728)～寛延年間(1748～1751)の間の何れかの時期に馬場氏屋敷に転じ、以後、幕末まで馬場家屋敷が継続することが明らかになった。屋敷替えの契機については、享保12年の大火を境に金子橋一帯の武家地で大掛かりな屋敷替えが行われたのか、あるいは一定の空白期を空けて転居が行われたのかについての確証を得ることができていない。

屋敷替えの契機や時期などの詳細については未だ曖昧な部分が残るが、後節にて今回の発掘調査による遺構、遺物の検討作業を行い、それによって補うこととしたい。

謝辞

今回の報告にあたっては、文献調査について内川清輔氏、絵図資料の調査について吉松靖峰氏より、多くのご教示、ご協力を賜りました。記して心より感謝申し上げます。

[註]

1)『土佐州郡志』は宝永年間（1704～1711）に各村から差し出された『宝永風土記』をもとに山内家儒者緒方宗哲が編纂した官撰地誌とされる。

2)『南路志』は文化12年（1815）、高知城下の豪商美濃家の武藤致和・平遠父子が編纂。

3) 御馬廻…150石～600石、御小姓組…30石～300石の中級武士

4)『土佐国史料集成　土佐國群書類　第八巻』高知県立図書館2006より引用。
『侍町小割帳』は高知城下の侍町の住居者名簿とでもいうべき史料であり、通りごとに屋敷地の間口と居住者の氏名を列記している。寛政3年（1791）と文政9年（1826）の2回書写されている。史料の成立年代は不詳であるが、書写した人物が史料末尾に付記した内容によると、寛永元年（1624）に山内家に召し抱えられた仙石忠右衛門と、万治2年（1659）に他国へ出た間宮九左衛門の屋敷が記されていることから、寛永から万治2年の間に成立したものと推測されている。ただし、『御侍中先祖書系図帳』と人名との照合など今後の研究によって、成立時期をさらに絞り込むことが可能であろうとされる。なお、『侍町小割帳』に表れる「金子弥左衛門宅明」は正保二年（1645）に没していることなどから、史料の下限を正保二年以前まで繰り上げることも可能であろう。

5)『高知広域都市圏38』昭和44年から一部転載。

6) 大脇保彦「高知城下町絵図について－歴史空間の情報源としての吟味と課題」『土佐女子短期大学紀要』土佐女子短期大学2001

7)『御侍中先祖書系図帳』土佐山内家宝物資料館所蔵。

8) 寺石正路『土佐名家系譜』歴史図書社昭和51年。『土佐名家系譜』は寺石正路が昭和17年に高知教育会より発刊行。

9)『御侍中先祖書系図帳』土佐山内家宝物資料館所蔵。

10)『皆山集』高知県立図書館。『皆山集』は松野尾章行が明治11～34年にかけて古文書・古記録を筆記した史料集。

[参考文献]

寺石正路『土佐名家系譜』歴史図書社昭和51年
『土佐国史料集成－南路志』高知県立図書館1991年
『土佐州郡志－復刻版－』土佐史談会1983年
『高知城下町読本－改訂版－』土佐史談会・高知市教育委員会2004年
『土佐国史料集成　土佐國群書類　第八巻』高知県立図書館2006
『御侍中先祖書系図帳』土佐山内家宝物資料館所蔵。

[絵図出典]

『寛文己酉高知絵図』…高知市民図書館所蔵。『高知城下町読本－改訂版－』土佐史談会・高知市教育委員会2004年掲載の絵図（絵図を活字化したもの）を転載。

『高知御家中等麁図』…安芸市立歴史民俗資料館所蔵。『高知城下町読本－改訂版－』土佐史談会・高知市教育委員会2004年掲載の絵図（絵図を活字化したもの）を転載。

『寛永五年ヨリ万治二年間廓中之圖』…土佐之国史料類遺纂『皆山集』第九巻より転載。

『寛文九年分図』…土佐之国史料類遺纂『皆山集』第九巻より引用。

『元禄二、三年間之図』…土佐之国史料類遺纂『皆山集』第九巻より引用。

『元禄自十年至十二年間之図』…土佐之国史料類遺纂『皆山集』第九巻より引用。

『文久三年之図』…土佐之国史料類遺纂『皆山集』第九巻より引用。
『天保元年高知之図』…吉松靖峯氏所蔵。高知市発行『図録高知市史』より転載。
『弘化年間旧廓中絵図』…町田尚友氏所蔵。高知市発行『図録高知市史』より転載。
『延享三年之図』…吉松靖峯氏所蔵。
『寛延年間頃高知城下郭中之図』…吉松靖峯氏所蔵。
『天明年間前後高知絵図』…吉松靖峯氏所蔵。
註)『延享三年之図』『寛延年間頃高知城下郭中之図』『天明年間前後高知絵図』については、吉松氏のご厚意により実見させていただいた。

Tab.31　絵図と金子橋遺跡居住者の記載

	年代	名称	所蔵、出典	備考	金子橋遺跡関連居住者の記載
図4	寛永5年（1628）～万治2年（1659）	『寛永五年ヨリ万治二年間廓中之圖』	皆山集稿本所載	写図	「金子」
図3	寛文9年（1669）	『寛文己酉高知絵図』	高知市民図書館	原図	「金子傳十郎」
	寛文9年（1669）	『寛文九年分図』	皆山集稿本所載	写図	「金子」
	元禄年間（1688～1704）	『建依別高知城郭之図』	高知市民図書館	写図	未見。
	元禄2,3年（1689～1690）	『元禄二、三年間之図』	皆山集稿本所載	写図	「金子」
	元禄10,11年（1697,1698）	『元禄自十年至十二年間之図』	皆山集稿本所載	写図	未見。
図5	延享3年（1746）	『延享三年之図』	吉松靖峯氏所蔵	写図	敷当地、空白。
図6	寛延年間（1748～1751）	『寛延年間頃高知城下郭中之図』	吉松靖峯氏所蔵	写図	東「麻田安右衛門」 西「馬場源右衛門」
図7	天明年間（1781～1789）	『天明年間前後高知絵図』	吉松靖峯氏所蔵	写図	東「小八木寿助」 西「馬場源馬」
図8	享和元年（1801）	『高知御家中等屋図』	安芸市立歴史民俗資料館所蔵	写図	「馬場源助」
図1・9	天保元年（1830）	『天保元年高知之図』	吉松靖峯氏所蔵	写図	「馬場源馬」
図10	弘化年間（1844～1848）	『弘化年間旧廓中絵図』	町田尚友氏所蔵	?	「馬場源馬」
	文久3（1863）	『文久三年之図』	皆山集稿本所載	写図	「馬場」

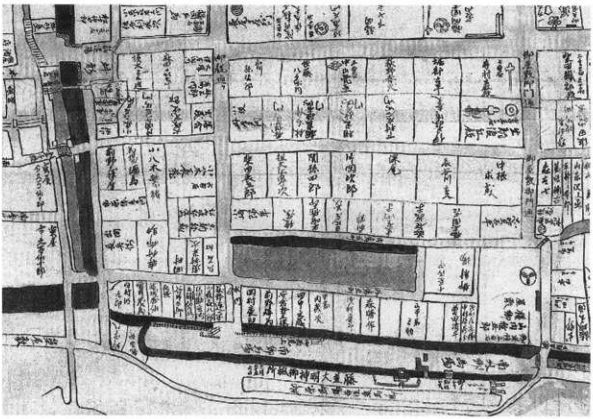


図1　「天保元年高知之図」天保元年（1830）
（吉松清峯氏所蔵の絵図より一部抜粋）

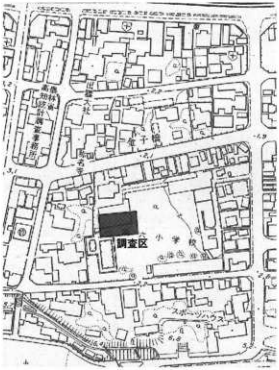


図2　昭和44年地図
（『高知広域都市圏38』より抜粋）

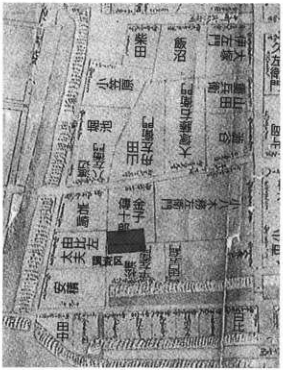


図3　「寛文己酉高知絵図」寛文9年（1669）
（高知市民図書館所蔵の絵図をもとに一部活字化一部加筆。）

Fig.77　絵図にみる金子橋遺跡の変遷（1）

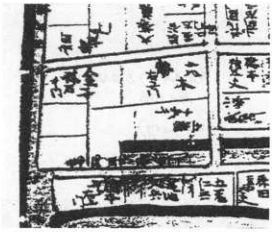


図4 「寛永五年ヨリ万治二年間廓中之圖」
寛永5年（1628）～万治2年（1659）
（皆山集稿本所蔵）

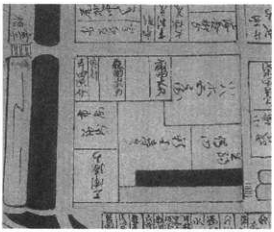


図5 「延享三年之図」延享3年（1746）
（吉松靖峯氏所蔵）

図6 「寛延年間頃高知城下郭中之図」
寛延年間（1748～1751）
（吉松靖峯氏所蔵）

図7 「天明年間前後高知絵図」
天明年間（1781～1788）
（吉松靖峯氏所蔵）

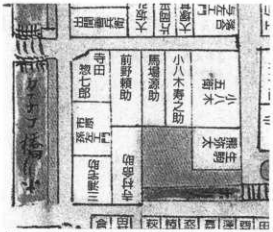


図8 「高知御家中等鑑図」享和元年（1801）
（安芸市立歴史民俗資料館所蔵の絵図を一部活字化）

図9 「天保元年高知之図」天保元年（1830）
（吉松靖峯氏所蔵）

Fig.78 絵図にみる金子橋遺跡の変遷（2）

図10　『弘化年間旧廓中絵図』
弘化年間（1844～1848）
（町田尚友氏所蔵）

Fig.79　絵図にみる金子橋遺跡の変遷（3）

史料1
『侍町小割帳』（一部抜粋）

〆五百六拾八間弐寸五分
中島町西ノはし南川立町

一拾三間半
一四拾八間　横町四間五尺
一拾七間
一拾五間
一弐拾弐間
一拾七間
一拾七間四尺
一拾六間
一弐拾四間四尺　横町五間半
一三拾間
一弐拾間
一弐拾四間　此間堀三拾八間横町弐間
一拾七間
一拾九間
一弐拾間
此間堀拾八間横町九尺
一拾九間弐尺

金子弥右衛門
小八木務右衛門
橋本猪太夫
橋本甚兵衛
伊藤玄之丞
河本九郎兵衛
小栗源兵衛
内海亀之丞
角市之丞
御廐
堺与次右衛門
深尾文右衛門
前野九郎右衛門
渡辺少兵衛
下村左右衛門
安積左内

一拾六間
一拾三間半
一拾三間半
一弐拾壱間
一拾九間
一拾六間半
一拾六間
一拾八間

餘太郎介
手嶋吉十郎
田中十左衛門
祖父江久右衛門
平山兵左衛門
篠原与三右衛門
河田半右衛門
千屋三郎右衛門

（…中略…）

右御侍屋敷小割帖年暦相記し無之ニ付、時代離考候得共、仙石忠右衛門・間宮九左衛門両士之屋敷有之ヲ以、考に候處、寛永より万治の年間御改正明亮也。其證如左。

寛永元年於江戸、御當家へ被召抱、仙石忠右衛門。万治二年百姓と出入有之。他國へ御暇被遣、間宮九左衛門。

寛政三年亥九月十五日写之。

文政九年戌十一月十九日写之。市原辰登

第2節　金子橋遺跡、検出遺構の特質と空間構成

はじめに

近世の金子橋は郭中の南西隅にあり、御馬廻や御小姓組の屋敷が並ぶ上級～中級武士の専用居住区であった。江戸前期から後期にわたるそこでの屋敷割りと武家の屋敷替えの有り様は、絵図や文献からもつかむことができ、平成18年度調査区が、近世には金子家・馬場家の屋敷が展開した地点にあたることは、前節にて触れた通りである。

今回の発掘調査では、調査区の北部側を中心に、近世の土坑19基、溝5条、他の遺構を検出した。本節では、各検出遺構の特徴をまとめ、その機能や性格を検討していく。また、これらの遺構群が、近世城下町の武家屋敷の中でどういった位置付けができるのか、史料とも照合させながら検証し、近世武家屋敷における各遺構の機能と屋敷地の空間構成を復元していく。また、遺構の出現と廃絶の時期をまとめながら、その年代的変遷についてもみていくこととする。

1. 検出遺構の概要

今回の調査では、調査区の北部側を中心に、近世の土坑19基、溝5条、他の遺構を検出した。以下、各検出遺構の内容と特徴について概要を触れておく。

土坑

土坑は19基を検出した。検出した土坑には、径3～5mの大型のもの（SK1・3～6・18）、径2m前後の中型のもの（SK7・9・11～13・19）、径1m前後の小型のもの（SK2・8・10・14～17）があり、形態も楕円形、隅丸方形、不整形と様々なタイプものが認められた。

これら大型、中型、小型の各土坑について、各々の規模、形態、陶磁器・土器の出土量(註1)、廃絶時期、位置等の特徴を示したものがTab.32である。それによると、SK19を除いて、径3mを超える大型土坑は、全体に廃棄遺物の量が多く、隅丸方形や不整形の形態をもつなどの特徴が認められた。対して、径1m前後の小型のものは、SK2以外は何れも廃棄遺物の量が少なく、形態は楕円形や不整円形など円形に近い形になっている。また、中型土坑は両者の中間的な傾向が示されている。

個々の土坑の性格を厳密に特定することは難しいが、このうち、遺物量の多かった大型土坑SK1・4～6は単純層であり、堆積状況からみて、短期間で埋め戻されたごみ穴であった可能性が高い。一方、大型土坑SK3については、最下層に植物遺体や木片・木屑を含んだ粘土層が層状に堆積していることから、埋め戻し以前に遺構が一定期間機能し、下層に水や泥が溜まるような状況であったことが推察される。また、調査区西部で検出された大型土坑SK19は遺物量が極めて少なく、性格を特定し難いものである。

次に、各土坑の廃棄遺物の内容を見ていくと、近接する大型土坑SK3・4・6と中型土坑SK7の間で、破片の接合関係や揃いのものがみえており、これらの土坑内への遺物廃棄がほぼ同時期に行われたことが推察できる。また遺物の接合関係は確認できなかったものの、近接する小型～中型土坑SK2・9も同時期頃の廃絶年代をあてはめることができるものである。これらの土坑の個々の出土遺物の生産年代をみると、17世紀から18世紀にかけての遺物が含まれており、廃棄遺物の年代幅が非

常に大きいことに気付くが、最も新しい様相の遺物からみて、土坑の廃絶年代は何れも18世紀末～19世紀初頭に比定できる。

他の土坑については、遺物量が少なく廃絶年代を絞り込むことが出来ないものもあったが、その内容はTab.32に示した通りである。

溝

溝は東西溝SD1・3・5と、南北溝SD2・4を検出した。各溝の規模、軸方向などの特徴は、Tab.33に示している。

SD1とSD3は調査区の南部側で検出されたもので、幅0.9～1mの2条の溝が4.9mの間隔を空けて並行し、東西方向に伸びる。溝の埋土中からは17世紀から19世紀にかけての遺物が出土するが、能茶山窯産磁器の出土等から、両溝の最終的な廃絶時期はともに19世紀中葉に求められる。検出された近世の土坑群で、SD1・SD3と重なり合うものが無いこと、SD1を境にその北側に遺構が集中し、SD1とSD3の間の空間では遺構が見えなくなること等から、両溝が以北の土坑群に強い影響力をもちながら、機能したことが推察される。また、両溝は、並行する位置関係や、規模や廃絶時期が同じであることなどから、双方が同時期に機能していた可能性が高い。

次に、南北方向の溝SD4は、18世紀中葉～後半の遺物を含む土坑SK1を切っており、18世紀中葉～後半以降に出現した溝であることが分かる。規模は幅1.2～1.3mとSD1・SD3に比較してやや大きく、東西溝との違いが見えている。東側には小型の溝状遺構SD2がほぼ並行して伸びるが両者の関係性は不明である。SD4埋土中には19世紀前半から幕末までの遺物が含まれており、廃絶年代は19世紀中葉に求めることができる。

2. 検出遺構の変遷と性格

遺構廃絶の画期

さて、ここまで土坑・溝の形態特徴、位置関係、廃絶時期等についてみてきたが、廃絶時期が明かにできたものについてその内容をまとめると、大きく次の様に分けられる。

1期：18世紀後半に廃絶するもの（SK1・5・8）

2期：18世紀末～19世紀初頭に廃絶するもの（SK2～4・6・7・9）

3期：18世紀末～19世紀に廃絶するもの（SK12・15・16・17、SD2）

4期：19世紀中葉に廃絶するもの（SK19、SD1・3・4）

これによると、調査区内では特に、18世紀末～19世紀初頭と19世紀中葉に遺構廃絶のピークが認められる。この中で、18世紀末～19世紀初頭に廃絶したSK2～4・6・7・9は何れも、南北溝SD4の東側の区画に該当している。また、土坑SK1については、溝SD4に切られていることから、SD4出現によって新たな区画が出来る以前の遺構であったと考えられるものである。

検出遺構の性格

では、これらの検出遺構は、近世金子橋での屋敷地の変遷とどう関わり、各々がどういった性格をもつのだろうか。前節での内容とも一部重なるが、その手掛かりとして、近世の城下町絵図を再び用い、各遺構の位置関係や出現・廃絶年代と照合しておきたい。

まず、昭和44年の市街地図（Fig.77－図2）を、寛文9年（1669年）の『寛文己酉高知絵図』（Fig.77－図3）と比較すると、現況の街路区画が近世の屋敷割りを比較的良好に踏襲していることが見て取れるが、このうち今回の調査区がある第六小学校敷地の一角は、近世金子橋の南西隅の区画に対応しており、前節での検証によって、図3の様に調査地点位置を絵図上に再現できている。

これによると、今回の調査区位置は、「金子傳十郎」の武家名が記された屋敷地の南側部分にあたり、調査区南端部で検出されたSD1とSD3が、「金子傳十郎」屋敷と南側に接する「松浦平左衛門」屋敷との境界線に、ほぼ重なり合うこととなる。

また、寛文9年以降の状況については、該当期の絵図が何れも図案化された表現となり、地図の縮尺に精度を求め難いが、周辺の屋敷割りとの配置関係や、前節で取り上げた史料『侍町小割帳』での新旧屋敷の対応[注2]についての記述等から、その後についても、位置の推定は一定可能である。それによって、18世紀後半以降の絵図（Fig.78・79－図6～10）では、元の金子家屋敷の区画が分割され、馬場家他、2軒分の屋敷区画に変化していることが見てとれる。

これらの絵図の内容から推定すると、東西溝SD1・3は南北の屋敷地を分ける境界に関連する遺構であったと考えられる。また、SK1との切り合い関係によって、18世紀後半以降出現する南北溝SD4は、この新たな屋敷区画に対応する区画溝であった可能性がある。また、18世紀末～19世紀初頭にまとまって廃絶したSK2～4・6・7・9は全て、南北溝SD4の東側の区画に該当していることから、同一屋敷地内で遺物の一括廃棄が行われたことが推察できる。

3. 金子橋遺跡にみる屋敷地の空間構成と機能

屋敷地裏手空間の機能

ここまでの検討から、金子橋遺跡での屋敷地の空間構成について、幾つかの特徴が見えてこよう。

まず、先の絵図との照合によると、金子家、馬場家の屋敷は主要道路に面する屋敷北側が正面となり、南側部分が屋敷の背面になっている。近年までに報告された、江戸遺跡などでの武家屋敷の発掘調査事例によると、屋敷地の正面側には主要建物と庭が配置され、裏面側ではごみ穴や土取り穴が掘られている。こうした一般的な空間利用の在り方からみて、金子橋遺跡で検出された大型土坑群は、同類の、屋敷裏手に設けられたごみ穴であったと考えられる。

屋敷地内での物の廃棄行為には、日常生活の中で生じるごみの廃棄（日常的な廃棄）と、災害や居住者の転居等に際して一度に大量のごみが捨てられる一括廃棄（非日常的な廃棄）があるが、今回多くの遺物廃棄がみられた土坑群SK2～4・6・7・9については、火災を裏付ける焼土や被熱した瓦片の廃棄、建物の取り壊しに伴う瓦や壁土のまとまった廃棄などは認められず、災害や、家屋の取り壊しを伴う大幅な屋敷替えの痕跡は認め難かった。ただし、複数の土坑内に一度に多量の生活用具がまとまって廃棄された様相がみえ、居住者の変更など、多量のごみが廃棄される何らかの原因が、18世紀末から19世紀初めの時期にあったことは否定できない。

次に規模の大きい廃棄が行われるのは幕末であり、この時には、SK19内に多量の瓦が廃棄されるとともに、区画溝SD1・3・4の埋め戻しがなされ、近世の屋敷割り自体が一旦その機能を失っている。

屋敷境の形態と特質

次に、屋敷境の形態に着目すると、まず東西に隣接する屋敷間の境界には、18世紀中葉～後半以降、幅1.2～1.3mの南北溝SD4が出現している。SD4は最下層への粘土・砂の層状の堆積が認められず、常時水が流れる状態で機能していたとは考え難い。しかし、出水時には排水機能も果たしたと考えられ、区画と治水双方の機能を備えた溝が、屋敷間の境界施設となっている。

一方、屋敷地背面側での隣地屋敷との境界にあたる部分では、4.9mの間隔を空けて並行する幅1m前後の2条の溝SD1・3が検出された。屋敷境で並行する2条の溝が検出された事例は、徳島城下町遺跡でも報告され、常三島地区では18世紀以降、背面の屋敷境に2つの溝に挟まれた幅約2.8mの緩衝地帯が現れている。また徳島本町2丁目地点では18世紀中頃に屋敷境に幅2.5mの空間が生まれ、19世紀には石組を伴った側溝が設けられた路地となっている。これらの溝に挟まれた空間については、側溝を伴う路地や、土手などの性格が推定されているが、金子橋遺跡のSD1・3については、溝の規模、溝間の空間とも徳島の事例に比較して大きい。また、遺構上面をかなり削平されているために堅化した道路面や側溝の護岸構造を検出できておらず、性格を特定できる明確な根拠が得られていない。しかし、屋敷の背面側の境界に緩衝地帯としての空間が存在し、それが側溝を伴っていたことはつかむことができ、今後も周辺遺跡での調査成果を蓄積しながら、これらの空間の性格を特定していきたい。

ところで、屋敷境に溝を設ける在り方は、土佐においてもすでに古代、中世から見えており、中世土佐の守護代細川氏の居館と家臣団の屋敷地が展開した15～16世紀の田村遺跡では、周囲に溝を巡らした家臣の屋敷地が多数確認されている。しかし、これらは、屋敷毎に周囲を取り囲む独立した溝が設けられているもので、溝に囲まれた屋敷空間が個別に完結するものであった。

これに対して、近世の金子橋遺跡では、複数の屋敷の背面を貫く溝によって境界がなされている。また、2条の溝で挟まれた緩衝地帯としての空間も、屋敷毎に完結せず、複数の屋敷によって共有された状態を示している。路地など共用の性格をもつ空間が、屋敷の境界として機能している点に、近世城下町における屋敷境の特質が表れているといえよう。

[註]

1) 出土量の比較は、推定個体数による。個体数の算出は、口縁部点数と底部点数をもとに行った。
各土坑での口縁部と底部出土点数の内容は下記の通りである。

2) 第1節参照。『侍町小割帳』は高知城下の侍町の住居者名簿とでもいうべき史料であり、通りごとに屋敷地の間口と居住者の氏名を列記している。史料の成立年代は不詳であるが寛政3年（1791）と文政9年（1826）の2回書写されている。

Tab.32　金子橋遺跡検出遺構（土坑）

タイプ	遺構名	平面規模（m）	深さ（cm）	形態	遺物廃棄	廃絶時期	位置（SD4を境界とする）	備考
大型	SK1	4.2×3.3	22	隅丸方形	やや多	18C後半	西	SD4に切られる
	SK3	3.7×2.9	46	不整形	多・木製品木片多量	18C末～19初頭（1780以降）	東	SK5を切る。SK3・4・6・7同時期。
	SK4	3.86×1.98	18	不整形	やや多	18C末～19初頭（1780以降）	東	SK3・4・6・7
	SK5	5.74×2.0	20	隅丸方形	少	18C後半～末	東	SK3に切られる。
	SK6	5.28×3.60	36	不整形	多	18C末～19初頭（1780以降）	東	SK3・4・6・7同時期。
	SK18	4.5×3.8	30	隅丸方形	少	不明	西	SD5を切る。
中型	SK7	2.12×1.70	21	不整円形	やや多	18C末～19初頭（1780以降）	東	SK3・4・6・7同時期。
	SK9	2.38×1.36	20	楕円形	やや多	18C末～19初頭（1780以降、1820以前）	東	
	SK11	2.42×1.60	20	楕円形	少	18C	東	
	SK12	2.1×残0.52	46	不明	少	18C末～19C	西	SK13を切る。
	SK13	残1.96×残1.34	44	不整形	やや多	18C	西	SK12に切られる。
	SK19	2.8×2.2	10～20	楕円形	多・瓦片多量	19世紀中葉	西	SD5を切る。
小型	SK2	1.34×1.02	60	不整楕円形	やや多	18C末～19初頭	東	
	SK8	1.20×0.92	12	不整円形	少	18C後半	東	
	SK10	0.78×0.42	10	楕円形	少	18C	東	
	SK14	1.30×1.00	10	不整形	少	18C	西	
	SK15	1.02×0.80	8	楕円形	少	19C	西	SK17に切られる。SK15・16同時期。
	SK16	1.20×1.10	10	楕円形	少	19C	西	SK15・16同時期。
	SK17	1.66×1.06	16	楕円形	少	19C（1820以前か）	西	SK15を切る。

Tab.33　金子橋遺跡検出遺構（溝）

遺構名	幅（m）	深さ（cm）	軸方向	廃絶時期	備考
SD1	0.94～1.04	14～32	東西 N－74°－E	19世紀中葉	SD1・SD3が並行。
SD2	0.62	19	南北 N－14°－W	18C末以降	
SD3	1.02	14	東西 N－74°－E	19世紀中葉	SD1・SD3が並行。
SD4	1.2～1.3	22～24	南北 N－17°－W	19世紀中葉	
SD5	1.94～2.10	14～30	東西 N－74°－E	18世紀か	SK18に切られる。

第3節　金子橋遺跡出土遺物の様相

はじめに

前節までで触れたように、本調査区では、18世紀末～19世紀初頭にかけて廃絶する土坑群と、19世紀中葉に廃絶する溝と土坑があり、2時期の遺構廃絶のピークが認められた。これらの遺構内には、当地域に屋敷が構えられる17世紀前半以来の遺物が多く含まれており、1遺構内に含まれる廃棄遺物の年代幅が大きいことも、本遺跡の特徴の一つとなっている。

本節では、これらの廃棄遺物に含まれる陶磁器・土器の様相を検討し、金子橋遺跡居住者の生活形態や経済力、嗜好等を知る手掛かりとする。また、その遺物組成を検討することによって、城下町における上級～中級武士層での陶磁器所有の在り方と、農村部での下級武士や農民層の所有物との違い、そこから見える両者の生活形態の違いについても見てみたい。加えて、18世紀末～19世紀初頭における各地製品の流通実態などについても触れることとする。

1. 陶磁器・土器の様相

ここではまず、土坑、溝、及び遺構外から出土した陶磁器・土器全般について、その特徴をみていくこととする。

(1) 陶磁器

陶磁器では、碗、皿、鉢、猪口、蓋物、擂鉢、捏鉢、鍋、土瓶、徳利、壺、甕、瓶類、火鉢、灯明皿、火入れ、香炉、仏飯器、紅皿、合子、段重、水滴、餌鉢、鳥の水入れ、など多様な器種が出土したが、本文との重複もあるため個々の説明は省き、本遺跡を特徴づける幾つかの資料について触れることとする。

高級品、奢侈品の所有

まず、今回の出土資料では、初期伊万里の碗（590）、小皿（30・48・442・568・598）、中皿（345）、大皿（673）、壺（414・446・509・606）や、17世紀前半までに生産された初期の白磁小杯（34）、皿（155・163・485）、初期の色絵磁器皿（459）、三足付の青磁大皿（43）など、17世紀前半までに生産された初期の肥前産磁器製品が認められた。また、続いて17世紀後半から18世紀初頭にかけて生産された上手の肥前産染付磁器（319他）、青磁（484他）、白磁（170・355）、色絵（408）も多く出土している。

この他、景徳鎮窯系の青花小鉢（115）と小皿（138・344）、漳州窯系の青花碗（507）と色絵皿（593）などの中国製品も認められた。

一般に、集落部まで磁器が普及し始めるのは18世紀以降とされるが、金子橋遺跡ではそれ以前の段階から磁器の所有が見えており、居住者の高い経済力が看守できる。また、1620～1640年代にかけて生産された中国景徳鎮窯の青花（古染付）は、当時、茶の湯の道具として珍重され、求められたものであり、金子橋遺跡の居住者がこうした嗜好性の高い製品を所有できる経済力を持っていたことを物語っている。

陶器では、鉄絵・呉須絵・白絵を施した京焼・京都系の陶器（56・173・175・362・521）や色絵陶器

(174・192・420・514・628・715・716)、文様等は不明であるが在銘の京焼底部(41・188)、土佐の藩窯である尾戸窯で生産された薄手の象嵌文碗(178)や、変形ものの皿(711)等の上質の碗、皿類が所有されている。

器種・器形の特徴と武家の生活形態

陶磁器の器種・器形の上でも、特徴が認められた。

まず供膳具では、大皿の出土点数が多いことが注目される。資料の中では599・668・669・672～675などがこれにあたるが、この中には1630～1640年代に製作された肥前山辺田窯の染付大皿(673)、1650～1670年代に肥前有田で製作された上手の染付大皿(599・674)などが含まれる。[注1] これらの磁器大皿は、主として供宴の場に供されたものであり、武家の供宴の在り方や食文化の一端をみることができるものである。

18世紀後半以降で特徴的な器形の食器では、大振りの蓋付き碗である肥前産の望料碗(28・65・66・318・321)がある。このタイプの碗は、県外の発掘調査では主に大名家や上級武士クラスの屋敷跡から出土し、下級武士の屋敷地や集落部には流通しないものであり、ここからも居住者の性格が窺われよう。

19世紀の資料では、煎茶具とみられる手捏ねの焼締陶器の土瓶又は急須(558・643)・蓋(557)、関連の遺物とみられる手捏ねの陶器鍋(649)、器種不明の底部(648)が出土している。江戸後期の煎茶の流行を背景に、道具類を取り揃えて茶を嗜んだ、武家の喫茶形態が窺われるものである。

その他の器種では、獅子、魚、唐子、菊花などの形を模した水滴(170～172・356・359・570)や京都系の筆筒など、文房具に趣向を凝らしたものが見えている。また、化粧具では、紅皿、うがい茶碗、段重、合子、髪油壺、鬢水入れなどが出土しているが、これには赤絵や金彩を施したうがい茶碗(168)や陽刻を施した合子(160・161・403)などの、上手の製品が含まれている。

こうした上質ランクの陶磁器や嗜好性の高い製品が所有される一方で、食器の一部(119・120・190・194・195他)や調理具、貯蔵具、火具などの日用の道具類については、集落部でも多く流通する日用雑器と同タイプのものが出土している。この様に、今回の出土資料では、同じ屋敷地内でも使用の場や用途に応じて陶磁器の製品ランクの使い分けがなされており、重層的な様相が示されている。

(2) 土器

土師質土器では、土器小皿、中皿、焜炉、焙烙、ひょうそく、土人形、ミニチュア、泥面子、鳩笛、瓦質土器では火鉢、家型の土製品などが出土した。なお、焼塩壺は高知城跡[注2]、高知城伝下屋敷跡[注3]他で出土が報告されているが、金子橋遺跡では確認できていない。

皿類

土器皿では、褐色系の胎土でロクロ成形によるもの(62～64・236～249・376・377・426・433・450・539～542・630)と、白色系の胎土をもちロクロ成形の後、外面にケズリやナデを施したもの(96・250・378・427・530)の2タイプがみられた。後者は、径10～11cmの白色系土器皿で、尾戸窯で生産された白土器小皿にあたる。内面に寿字文、高砂文、松竹梅鶴亀文などの吉祥文様を陽刻したものと、無文のものがある。記録には「白かわらけ」「白土器」「三ツ組土器」の名称で表れ、年賀

や祝儀の場で使用したとされるものである。[注4]一方、前者のロクロ成形による褐色系の土器皿は、径7～9cmと小型で、今回の出土資料中では口縁部に灯芯痕が残り灯明皿としての使用が認められるものと、使用痕が見えず用途不明のものがあった。中でも土坑SK3からは100個体を超える用途不明の土器小皿がまとまって出土しており、武家の儀礼の場での土器皿の使用も考えなければならない。

この他、ロクロ成形で厚手の底部をもつ土器中皿（97）も出土している。これについては、底部外面に煤が付着し、焙烙等に類した加熱調理の用途に用いられた可能性がある。

焙烙

平坦な底部から口縁部が直行して立ち上がる形態の関西系焙烙（254・256・257・379）が出土している。口径は26～30cmで、何れも胎土中に金雲母を含んでおり、関西産と考えられるものである。

県下の農村部に普及するタイプの口径45～50cm前後の大型皿状の焙烙[注5]は出土しておらず、城下町と農村部での調理形態や生産活動の違いがこれらの遺物にも表れてきている。

玩具・人形

玩具類では、泥面子（653）、鳩笛（546）、釜を模した施釉のミニチュア製品（532）、家を模した瓦質土器（543）などが出土した。釜形のミニチュアは上半を型作りし、黄色と黄緑の低火度釉を施釉するもので、子供の飯事道具とみられる。鳩笛（546）は緑色を帯びる半透明の釉を施釉しているものである。

人形では、大型品（544）と小型品（91～95・338・435・457・471・472・533・545・654）が出土した。各資料は、成形技法と形態特徴によって次のタイプに分けることができる。

A：型押し成形貼り合わせによるもので、中空のもの。(91・92・93・95・252・338・471・472・544・545)

B：型押し成形貼り合わせによるもので、中実のもの。(94・435・533・654)

C：手捏ね成形によるもので、中実のもの。(457)

このうち中実の94・435については底部中央に、製作工程時に用いる棒の逆し込み痕とみられる貫通しない穿孔を認めている。これらの人形は、色調によって、胎土が黄橙色～灰黄色のもの（92～95・338・435・471・472・544・545・457）と、灰白色のもの（91・252・533・654）に分かれた。また、252・533・544は施釉するものである。

人形のモチーフとしては、天神（471）、馬乗童子（435）、狛犬を抱いた童子（91）、侍（92・94）、人物（僧侶・公家などか）(544・545・533)、鳥（252・457・654）、動物（338）などが認められた。

これらの土人形は、まじないや民間信仰に使用され、当時の人々の精神文化を反映させるものであった[注6]と言われている。今回出土した人形の中では、天神（471）は五穀豊穣あるいは学問の神として子供のために祀ったとされるもの、馬の人形（435）は子供の成長を願って端午の節句に飾ったもの、犬に関わる人形は子供が無事に育つようにとの願いを込めたもの（91）であり、子供の成長を願うものや縁起ものの人形が多く見られる。

また、人形以外では、溝SD2内から鳩笛（546）が完形で出土している。土笛は、ものを食べた時食べ物が喉に詰まらないようにという、子供の無事な成長への願いが込められたものであり、ここにも金子橋遺跡居住者の精神文化の一端を見ることができる。

2. 陶磁器・土器の組成と金子橋遺跡の特質

今回の調査区では、区画溝SD1・3の北側に分布する土坑群SK2～4・6・7・9から18世紀末～19世紀初頭の廃棄遺物、溝SD1～4とSK19から19世紀中葉の廃棄遺物が出土したことは、先述の通りである。以下では、特にまとまった資料が得られている18世紀末～19世紀初頭の土坑出土資料に注目して、金子橋遺跡における遺物組成の検討を行いたい。またこれにあたっては、農村部に展開する近世遺跡での廃棄資料を対比資料として取り上げ、城下町と農村部での所有物の共通点や違いについてもみていくこととする。

金子橋遺跡SK2～4・6・7・9廃棄資料と、対比資料の内容

18世紀末～19世紀初頭に比定される土坑のうちでは、SK3・4・6・7間で、破片の接合関係や揃いのものがみえており、これらの土坑がほぼ同時期に埋め戻されたことが推定できる。また出土遺物の接合関係は確認できなかったものの、近接するSK2・9も18世紀末～19世紀初頭を下限とする遺物の様相を示しており、廃絶年代を18世紀末～19世紀初頭に比定できるものである。(註7) これらの土坑はいずれも、溝SD1・3とSD4によって区画された北東側の屋敷区画に属しており、同じ屋敷内の廃棄土坑にあたると推察される。

対比資料として、陣山遺跡一括廃棄資料(註8)と田村遺跡B1区SX113出土資料(註9)を取り上げる。このうち陣山遺跡一括廃棄資料が農村部に屋敷を構えた下級武士（郷士）の転居に伴う幕末一括廃棄遺物、田村遺跡B1区SX113出土資料が農村の居住地廃絶に伴う明治初頭の一括廃棄遺物にあたっている。

陶磁器・土器の器種別組成と特徴

まず、SK2～4・6・7・9出土遺物中にみられる陶磁器・土器の器種別出土点数(註10)と組成比をTab.34に、用途別出土点数(註11)と組成比をTab.35に示した。

Tab.34によると、陶磁器中では碗が38%、皿が16%と、出土比率が最も高く、それに続いて、鉢、猪口、碗蓋、擂鉢、捏鉢、片口、鍋、土瓶、徳利、瓶、水注、茶入れ、壺、甕、蓋物、火鉢、灯明皿、香炉、仏飯器、紅皿、うがい茶碗、髪水入れ、髪油壺、合子、段重、水滴、筆筒、灰落とし、火入れ、餌鉢、鳥の水入れ、などの多様な用途の器種が認められる。

Tab.35によって、陶磁器・土器全体にみる用途別組成比を見ると、やはり供膳具が51%と最も多く、次に調理具5%、貯蔵具6%、火具1%、暖房具0.6%、灯明具3%と、日用の生活用具が続く。これに加えて、神仏具0.6%、化粧具2%、文房具1%、喫煙具1%、飼育具0.2%、玩具0.9%、漁労具0.5%、用途不明（土器小皿）26%など、多様な用途の陶磁器・土器が認められている。この中には、紅皿、うがい茶碗、髪油壺、段重などの化粧具、泥面子、鳩笛、人形、ミニチュアなどの玩具など、女性や子供に関わる道具が含まれており、金子橋遺跡が、女性や子供を含めた家族が居住する生活空間であったことが推定される。

次に、こうした城下の武家屋敷での所有物の在り方が、農村部に居住する農民層や下級武士層のものと比較して、どういった違いがみられるのかについても検討しておきたい。対比資料として、農民層の廃棄資料にあたる田村遺跡B1区SX113廃棄資料、下級武士（郷士）層の廃棄資料にあたる陣山遺跡一括廃棄資料を取り上げ、その器種別組成をTab.36に示した。

Tab.34　金子橋遺跡SK2～4・6・7・9陶磁器・土器の器種別出土点数と組成比

	磁器	陶器	陶磁器計	陶磁器中の比率%	土器（瓦質・土師質・施釉土器）	陶磁器・土器計	陶磁器・土器中の比率%
中碗	68	71	139	26%		139	19%
小碗	26	36	62	12%		62	8%
小杯	37	5	42	8%		42	6%
小皿	38	38	76	14%		76	10%
中皿	5	7	12	2%		12	2%
大皿							
鉢	9	7	16	3%		16	2%
猪口	22	1	23	4%		23	3%
碗蓋	10		10	2%		10	1%
蓋台							
擂鉢		21	21	4%		21	3%
捏鉢・片口		10	10	2%		10	1%
鍋（行平・土鍋・焙烙）・釜		5	5	0.9%	3	8	1%
土瓶・急須		2	2	0.3%		2	0.2%
燗徳利							
瓶（徳利・その他）	4	8	12	2%		12	2%
水注	1		1	0.1%		1	0.1%
茶入れ		1	1	0.1%		1	0.1%
壷・甕	2	13	15	3%		15	2%
壷物	14	2	16	3%		16	2%
焜炉・涼炉・七輪・火消し壷					9	9	1%
火鉢		2	2	0.3%	3	5	0.6%
灯明皿・ひょうそく		17	17	3%	3	20	3%
香炉	2	2	4	0.7%		4	0.5%
仏飯器	1		1	0.1%		1	0.1%
神酒徳利							
紅皿	7		7	1%		7	0.9%
うがい茶碗	4		4	0.7%		4	0.5%
餐水入れ		1	1	0.1%		1	0.1%
塗油壷	4		4	0.7%		4	0.5%
合子	1		1	0.1%		1	0.1%
段重							
水滴	7		7	1%		7	0.9%
筆筒		1	1	0.1%		1	0.1%
灰落とし		2	2	0.3%		2	0.2%
火入れ	1	5	6	1%		6	0.8%
餌鉢・鳥の水入れ		2	2	0.3%		2	0.2%
人形					7	7	0.9%
土鈴					4	4	0.5%
土器小皿					179	179	24%
土器中皿・杯・鉢					4	4	0.5%
不明		12	12	2%		12	2%
計	263	271	534	98%	212	746	100%

Tab.35　金子橋遺跡SK2～4・6・7・9陶磁器・土器の用途別出土点数と組成比

	磁器	陶器	陶磁器計	陶磁器中の比率	土器	土器・陶磁器計	土器・陶磁器中の比率
供膳具	215	165	380	71%		380	51%
調理具		38	38	7%	3	41	5%
貯蔵具	21	24	45	8%		45	6%
火具					9	9	1%
暖房具		2	2	0.3%	3	5	0.6%
灯明具		17	17	3%	3	20	3%
神仏具	3	2	5	0.9%		5	0.6%
化粧具	16	1	17	3%		17	2%
文房具	7	1	8	1%		8	1%
喫煙具	1	7	8	1%		8	1%
飼育具		2	2	0.3%		2	0.2%
玩具					7	7	0.9%
漁労具					4	4	0.5%
用途不明		12	12	2%	183	195	26%
計	263	271	534	98%	212	746	99%

これによって3遺跡の陶磁器器種別組成を見ると、供膳具では、金子橋遺跡で小杯や猪口の比率が高く、碗、皿以外の器種のバリエーションが豊かな点が違いとして挙げられる。また、数値に表れていないが、金子橋遺跡に大皿や、望料碗、色絵磁器、京焼などの上手の陶磁器が揃えられ、経済力の違いが表れていたことは、先述の通りである。なお、田村遺跡と陣山遺跡で多く、金子橋遺跡に少ないという碗蓋については、19世紀以降に蓋付碗が流行し集落部まで普及するという年代的背景があり、廃棄遺物の年代差が反映された結果とみられる。

また、水滴、筆筒などの文房具や、うがい茶碗など化粧具の一部は、金子橋遺跡と陣山遺跡にあり、田村遺跡に無いもので、ここにも武家と農民層の職務や生活形態の違いが反映されている。

一方、調理具、貯蔵具、火具、暖房具、灯明具などの日用品に関しては組成に大きな違いがなく、製品ランク等もほぼ共通している。ただし、燭燈利は、田村遺跡と陣山遺跡に多くあるが金子橋遺跡に認められず、土瓶の出土比率についても金子橋遺跡が低いという、僅かな違いが認められる。この点についても、先の様に廃棄遺物の年代差が器種の比率に反映していると考えられ、今後、資料を蓄積しつつ検討していきたい。

次に、土器も含めて組成を検討すると、今回の金子橋遺跡では土器小皿の出土量が多く、そのため、組成値全体の違いが田村遺跡、陣山遺跡との間に表れている。土器小皿については、近接する2遺構からまとまって出土したものであり、これが武家の儀礼に供されたものか、灯明具としての用途なのかは使用痕からは明らかにし得ない。しかし、土器皿の使用の多さは本遺跡の特徴一つとなっており、今後も、城下町関連遺跡での出土傾向を見ていくこととしたい。

また、土製の人形や玩具についても、金子橋遺跡が出土点数、種類とも豊富で、農村部との違いが表れている。

Tab.36　田村遺跡・陣山遺跡・金子橋遺跡の陶磁器・土器の器種別組成

	陶磁器の器種別組成（%）			陶磁器・土器の器種別組成（%）		
	田村遺跡 B1SX113	陣山遺跡 一括廃棄遺物	金子橋遺跡 SK2〜7・9	田村遺跡 B1SX113	陣山遺跡 一括廃棄遺物	金子橋遺跡 SK2〜7・9
中碗	28%	21%	26%	26%	18%	19%
小碗	8%	5%	12%	7%	4%	8%
小杯	5%	6%	8%	5%	6%	6%
小皿	18%	11%	14%			10%
中皿	2%	0.3%	2%	20%	14%	2%
大皿	0.1%	0.6%				
鉢	4%	3%	3%	4%	3%	2%
猪口	3%	2%	4%	3%	2%	3%
碗蓋	5%	4%	2%	4%	4%	1%
盃台		0.3%			0.2%	
擂鉢	3%	2%	4%	3%	2%	3%
捏鉢・片口	2%	2%	2%	1%	1%	1%
鍋（行平・土鍋・焙烙）釜	3%	4%	0.9%	5%	4%	1%
土瓶・急須	2%	4%	0.3%	2%	2%	0.2%
銅徳利	2%	3%		2%	3%	
瓶（徳利・その他）	1%	8%	2%	3%	7%	2%
水注	0.1%	0.3%	0.1%	0.1%	0.2%	0.1%
茶入れ			0.1%			0.1%
壺・甕	2%	7%	3%	2%	6%	2%
蓋物	0.1%	0.6%	3%	0.1%	0.5%	2%
焜炉・涼炉・七輪・火消し壺				1.6%	3%	1%
火鉢	0.5%	1%	0.3%	0.6%	3%	0.6%
灯明皿・ひょうそく	6%	2%	3%	5%	2%	3%
香炉	0.6%	0.3%	0.7%	0.6%	0.2%	0.5%
仏飯器	0.5%		0.1%	0.4%		0.1%
神酒徳利	2%			2%		
紅皿	0.8%	4%	1%	0.7%	3%	0.9%
うがい茶碗			0.7%			0.5%
鬢水入れ			0.1%			0.1%
髪油壺	0.1%	0.3%	0.7%		0.2%	0.5%
合子		0.3%	0.1%		0.2%	0.1%
段重	0.3%	2%		0.3%	1%	
水滴		0.9%	1%		0.8%	0.9%
筆筒			0.1%			0.1%
灰落とし			0.3%			0.2%
火入れ	1%	3%	1%	1%	2%	0.8%
餌鉢・鳥の水入れ	0.1%	2%	0.3%	0.1%	2%	0.2%
人形						0.9%
土鐘						0.5%
土器小皿				0.6%		24%
土器中皿・杯・鉢						0.5%
不明・その他		0.3%	2%		0.3%	2%
計	100%	100%	98%	100%	95%	100%

陶磁器の生産地別組成と流通

さて、次に、陶磁器の生産地別出土点数と組成比を示したTab.37[注12]とグラフ1～5をもとに、各地製品の需要の在り方を検討してみたい。

グラフ1によると、磁器では肥前産が99%、中国産が1%と、肥前産磁器が市場を独占する状況である。今次資料には、19世紀初頭以降磁器生産を開始する瀬戸・美濃窯や、1820年に開窯する土佐藩の藩窯である能茶山磁器窯[注13]の製品、関西系諸窯の製品は含まれず、各地の磁器製品が市場に参入する以前の土佐の磁器流通の状況が示されている。

次に、グラフ2から陶器の内容をみると、尾戸窯21%、肥前・肥前系18%、瀬戸・美濃3%、京都・京都系14%、信楽1%、関西系1%、備前7%、堺1%、産不明34%という比率であり、陶器では在地の尾戸窯[注14]製品の比率が多くなっている。

さらに、陶磁器全体に占める割合をみると（グラフ3）、肥前・肥前系58%、尾戸窯11%、瀬戸・美濃1%、京都・京都系7%、信楽0.4%、関西系1%、備前4%、堺0.4%、中国1%、産不明17%であり、やはり土佐国外の製品が市場の殆どを占めている。

これに対して、19世紀中葉の廃棄遺物である蒲山遺跡一括廃棄資料から、磁器・陶器の生産地別組成（グラフ4・5）をみると、在地の能茶山窯の製品が磁器では41%、陶器では49%含まれ、19世紀中葉以降、日用雑器の量産と販売を進めた能茶山窯の陶磁器製品が多く購入されていることが分かる。

こうした2つの廃棄資料の隔たりは、各資料の年代的な背景によるところが多いと考えられる。藩の経済政策の1つとして、文政3年（1820）に磁器・陶器の生産を開始した能茶山藩窯の製品は、天保8年（1837）以降は日用品を中心に販売を押し進め、集落部で高い普及を遂げている。金子幔遺跡の廃棄資料は、能茶山藩窯が参入する前夜の、土佐国内の市場の状況を如実に示しているものといえよう。

[註]

1) このうち674は、海外に輸出され、現在トルコのトプカプ宮殿に収蔵されている肥前産染付大皿と同タイプの製品にあたる。「トプカプ宮殿の名品－スルタンの愛した陶磁器」佐賀県立九州陶磁文化館1995、P72－図版65大橋康二氏のご教示による。

2)『高知城跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター1995

3)『高知城伝下屋敷跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター2002

4) 延享4年（1747）、槍木尚斎が著した『土陽淵岳誌』の中巻第八「尾戸焼物」の項には、「年首賀盃ニハ尾戸焼土器ヲ三重ニシテ用ユ、土器二鶴亀松ヲエカキ、或ハ寿ノ字ナトヲ焼付ニアリ」とあり、年賀の盃には白土器を三重にして使用したことが記されている。

5) 浜田恵子「近世土佐の焙烙－高知平野と周辺の遺跡にみる製品流通とその背景」『高知市史研究－第3号』高知市企画調整課市史編纂室2005

6) 安芸範子「東大構内遺跡出土の人形にみる一考察－工学部14号館地点の人形の様相と各期にみられる成形技法－」『東京大学構内の遺跡　工学部14号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室2006

7) 遺構の廃絶年代を特定した根拠としては、1780年代以降流通する肥前産の広東形碗や、18世紀後半～末に

かけて流通する肥前産の望料碗が含まれること、1820年代以降流行する肥前産の端反形碗や、19世紀初頭以降生産が開始される瀬戸・美濃産染付磁器が含まれないことなどによっている。こうしたことからSK2～7・9出土資料については、1780年代～1800年代の間を推定廃棄年代としている。

8) 浜田恵子「陣山遺跡出土近世陶磁器の検討」『陣山遺跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター1997
対比にあたり、遺跡間の器種カウントの観点を揃えるために報告時の内容を一部修正した。「蓋」→碗蓋・蓋物蓋・土瓶蓋・鍋蓋、「瓶」→鉢徳利・壺油壺・神酒徳利・その他瓶類、「陶器涼炉」→施釉土器焜炉、へ再分類し各項目に追加。

9) 浜田恵子「近世田村遺跡の景観と陶磁器需要」『田村遺跡群Ⅱ－第9分冊』高知県文化財団埋蔵文化財センター2006
B1区SX113は耕作地の一角に設けられた長方形土坑で、規模は全長10.6m、幅3.3m、深さ0.68～2.10mと大型である。

10) 数値はいずれも推定個体数。個体数の算出は、口縁部点数と底部点数をもとに行った。この場合、接合不能な複数の口縁部片でも形態・調整痕・釉調・胎土等の観察から同一個体とみられるものは1個体とみなしてカウントした。また底部は、同一個体の口縁部を伴わないもののみを1個体としてカウントしている。ただし、土器小皿については底部点数、水滴、人形、土錘については別個体と判断できる体部片の点数を用いた。

11) 用途別分類を行う際の具体的な器種の内容は次の通りである。①供膳具～碗・小杯・皿・鉢・猪口・碗蓋・盃台②調理具～鉢（片口・捏鉢）・擂鉢・鍋（土鍋・行平・焙烙）・土瓶・急須・燗徳利 ③貯蔵具～瓶（瓶・徳利・水注）・壺・甕・藍物 ④火具～提炉・涼炉・火消し壺 ⑤暖房具～火鉢 ⑥灯明具～灯明皿・ひょうそく ⑦神仏具～仏飯器・神酒徳利・香炉 ⑧化粧具～紅皿・鬢油壺・段重 ⑨文房具～水滴・筆筒 ⑩喫煙具～火入れ ⑪飼育具～飼餌・鳥の水入れ ⑫玩具～人形・鳩笛・泥面子・ミニチュア ⑬漁労具～土錘 ⑭用途不明～土器小皿（使用痕なし）・土器鉢・土器中皿。このうち、土器小皿については、煤の付着などの使用痕跡が見られないものが多数を占めたため、用途不明とした。また、土師質土器中皿と鉢については、外底への煤の付着や内面への焦げなどの使用痕によって加熱調理に使用された可能性があるが、転用品の可能性もあり、ここでは用途不明とした。

12) 信楽産陶器のうちで、京都産と識別出来ない色絵半球形碗などの京・信楽系陶器は、京都系としてカウントした。また、尾戸窯製品については未だ実態の分からないものがあり、特定の明確な根拠を持たないものについては、京都系あるいは産地不明としてカウントした。

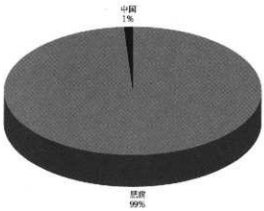
13) 能茶山窯は高知市の西部にある能茶山に所在する。藩の磁器窯と陶器窯は文政3年（1820）に開窯され、明治3年まで操業が続けられている。能茶山磁器藩窯では天保8年（1837）以降は日用雑器を主体とする生産体制へと経営の方向転換がなされ品質の低下がみられたものの、それ以前の製品には絵師の巧みな絵付けが施されたものが多く、数々の名品が伝世している。民間窯は明治以降も継続し、明治の西和田窯の頃最盛期を迎える。

14) 尾戸窯は高知城の北側にある尾戸に開かれた藩窯である。承応2年（1653）の開窯以降、近世を通じて、藩用、贈答用としての上質の陶器や、民間向の日用雑器が製作された。文政3年（1820）には磁器窯と陶器窯が能茶山に開かれ、藩窯経営の主力が磁器生産に移るとともに、尾戸の窯場も能茶山に移転される。明治4年には藩窯は廃止され、明治以降、尾戸窯は民間窯として継続されていく。

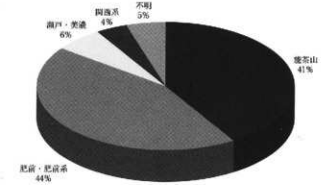
Tab.37　金子橋遺跡SK2～4・6・7・9陶磁器の生産地別出土点数と組成比

	肥前産・肥前系	中国	磁器計	尾戸	肥前産・肥前系	瀬戸・美濃産	京焼・京都系	信楽	関西系	備前	堺	不明	陶器計
中碗	68		68	29	22	1	9					10	71
小碗	26		26	3		1	24	2	1			5	36
小杯	37		37	1	1							3	5
小皿	36	2	38	11	13	2						12	38
中皿	5		5	1	3							3	7
大皿													
鉢	8	1	9	1	2		1					3	7
猪口	22		22									1	1
碗蓋	10		10										
擂鉢										19	2		21
擂鉢・片口					7							3	10
鍋				1								4	5
土瓶・急須												2	2
瀬戸利													
瓶・徳利	4		4			1						7	8
水注	1		1										
茶入れ												1	1
壺・甕	2		2	1	1	1						10	13
壺物	14		14				1					1	2
火鉢						1						1	2
灯明皿				2					2			13	17
香炉	2		2									2	2
仏飯器	1		1										
神酒徳利													
紅皿	7		7										
うがい茶碗	4		4										
製水入れ												1	1
製油壺	4		4										
合子・段重	1		1										
水滴	7		7										
筆筒							1						1
灰おとし							1					1	2
火入れ	1		1	1								4	5
餌鉢,鳥の水入れ												2	2
不明				7		1	1					3	12
計（点）	260	3	263	58	49	8	38	2	3	19	2	92	271
%	99	1	100	21	18	3	14	1	1	7	1	34	100
	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%

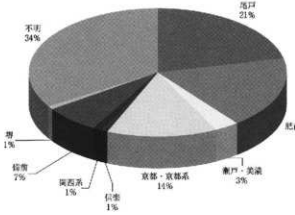
グラフ1
金子橋遺跡　磁器の生産地別組成



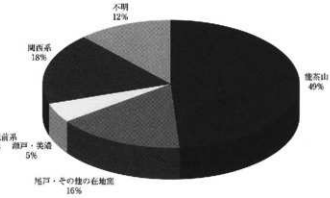
グラフ4
陣山遺跡　磁器の生産地別組成



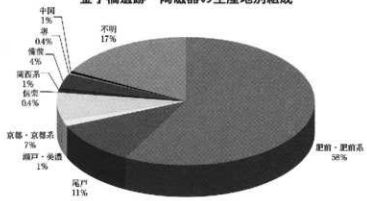
グラフ2
金子橋遺跡　陶器の生産地別組成



グラフ5
陣山遺跡　陶器の生産地別組成



グラフ3
金子橋遺跡　陶磁器の生産地別組成

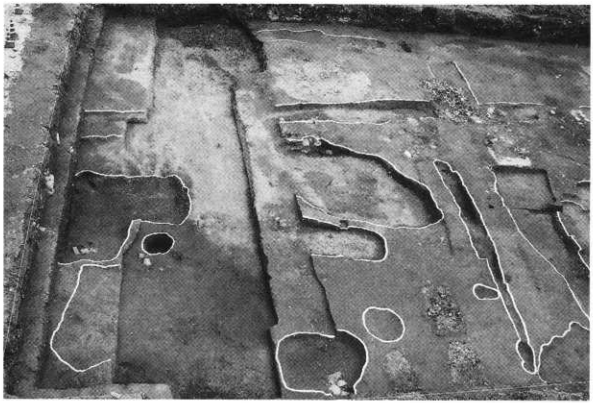


写 真 図 版

調査区遠景（北東より）

調査区風景

PL. 2



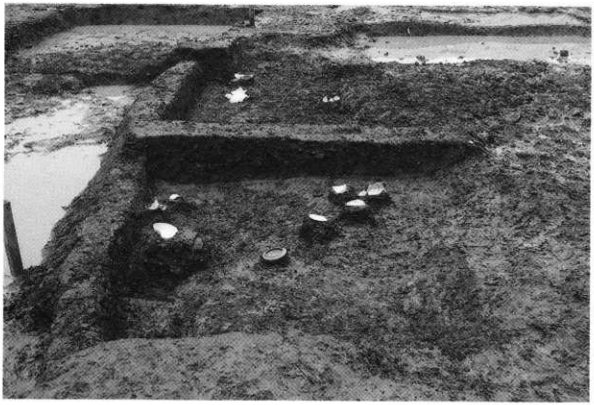
完掘状況（東部）

完掘状況（西部）

調査区北壁

北壁セクション

PL. 4



SK1セクション及び遺物出土状況（北より）

SK2遺物出土状況

SK2完掘状況（西より）

SK3遺物出土状況（西より）

PL. 6

SK3遺物出土状況

SK3完掘状況（西より）

SK4完掘状況（西より）

SK6セクション（東より）